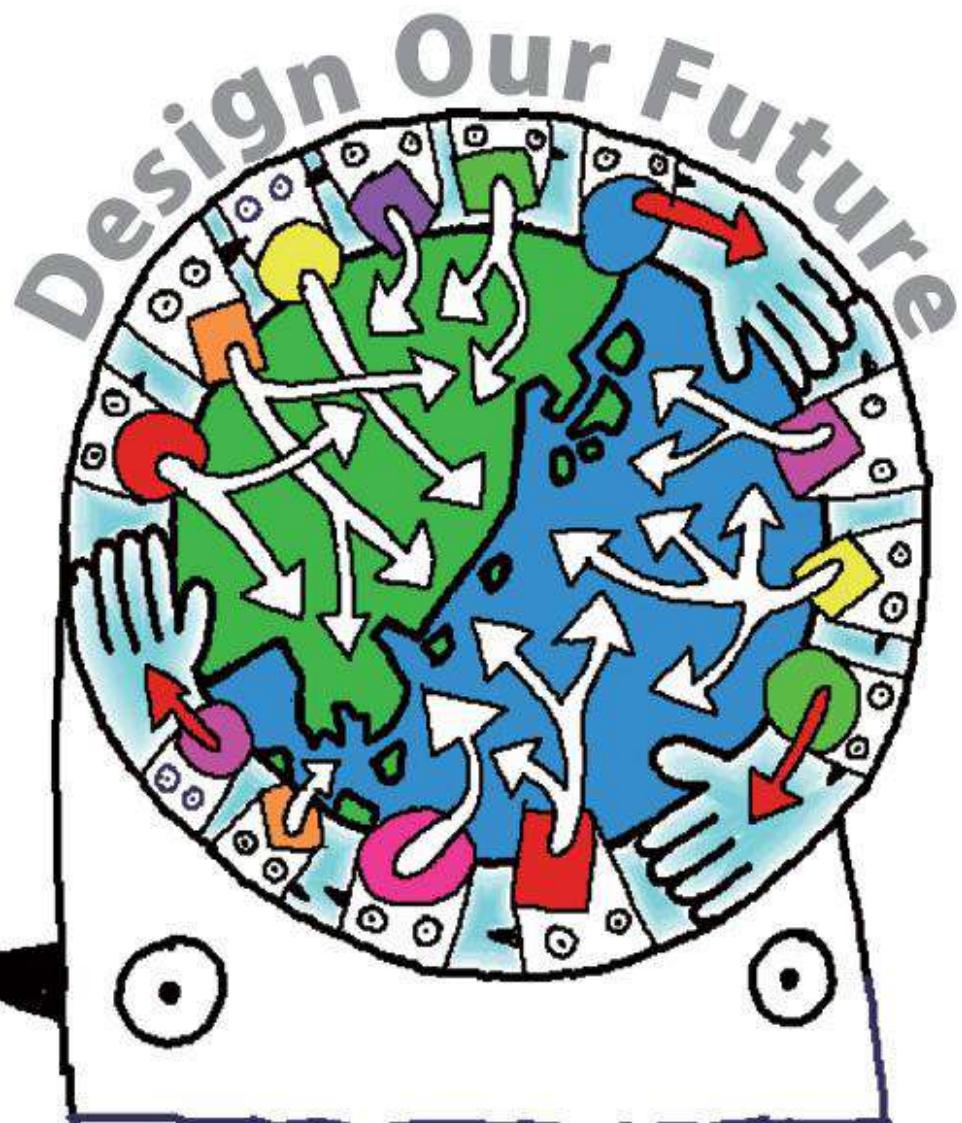




# 第 22 回日本の次世代リーダー養成塾

## 報 告 書

開催日程 2025 年 7 月 28 日～8 月 8 日



# IndeX

## Contents

	Page
1. 第22回日本の次世代リーダー養成塾を開催して	1
2. 主催者からのメッセージ	4
3. 開催概要	5
4. カリキュラム表	6
5. 講師・講義概要	7
6. 塾期間における成果・課題や卒塾後の様子	16
7. 塾を支えるスタッフ	24
8. カリキュラム	33
9. 参画自治体の声	46

### 【資料】

① 塾生アンケート調査結果	50
② 保護者・学校アンケート調査結果	59
③ 塾生概要	64
④ 塾生高校一覧	65
⑤ クラス担任・学生リーダー及びスタッフ名簿	66
(巻末) ご協賛・ご協力・助成いただいた皆様	68

## 1. 第22回日本の次世代リーダー養成塾を開催して

日本の次世代リーダー養成塾は、昨夏第22回目を行い卒塾生は3704人となりました。ここに、ご協賛いただいている企業、参画自治体、社会人や大学生のボランティア、関係者の皆様に篤くお礼を申し上げます。

今回の衆議院選挙でリーダー塾4期生が2人、当選しました。北海道11区の自民党から出馬した中川紘一さんとチームみらい九州ブロック比例の古川あおいさんです。初めての国政での政治家が誕生し、ようやく国会の場に卒塾生を送り出すことができました。彼らには日本の明るいビジョンの策定をしてもらいたいと思います。ここに改めて2004年の「開塾の詞」の一部をご紹介します。

「私たちが目指すリーダーとは、自国の文化や歴史に深い知識を持ち、人格や能力を兼ね備え、高い倫理観、責任感、構想力、決断力、行動力のある人です。21世紀の今こそ、自国をきちんと理解し、アジアを含めた海外の国々と共に歩むことができる『一流の日本人』を世に輩出しなければなりません。それには、高い教養を身につけ、何よりも感謝の気持ちを忘れず、謙虚な心で、国際舞台で活躍できる次世代の育成は急務です」

さて、昨年夏のリーダー塾には100歳を迎えたマレーシアのマハティール元首相がご夫婦でいらっしゃいました。九州大学からマハティール氏に名誉博士号を授与していただき、九州大学伊都キャンパス椎木講堂で「100歳のリーダーから～争いのない未来を築く处方箋」と題して特別講演をしていただきました。マハティール氏は100年を振り返り、ご自身が第一次世界大戦終結直後に生まれ、イギリス植民地時代、第二次世界大戦を経験されたことから「次に核兵器が使われれば文明は終焉します。日本は戦争を放棄した平和憲法を制定しています。次世代のリーダーには自衛以外を禁じた憲法を他の国々でも制定してほしいし、国連から安保理5か国の拒否権をやめさせるか、世界の国々が平等に扱われる他の国際機関を設立してほしい。そして、法の支配をしっかりと守ってほしい」と訴えました。

特別講演を前に、マハティール氏ら来賓の前で「争いのない未来を描こう～分断からの決別」と題して期間中塾生がクラス別に討議を重ねた「グローバル・ハイスクール・サミット」の政策発表として、ウクライナ戦争、イスラエルとパレスチナ、ミャンマーやスーダンの内戦、中国と台湾や朝鮮半島問題などについて記述した「次世代の教科書」を英語で発表。リーダー塾で毎年マハティール氏が講義で強調しているどんな国際問題解決にも当該国双方の対話が重要であることが盛り込まれていました。

そのマハティール氏の100年を振り返るNHKのETV特集「マハティール100年の風に立つ」が1月に放送され、NHKに10年越しで取材していただいたリーダー塾の様子も番組後半で紹介されています。見逃した方は是非、NHKオンデマンドでご覧ください。

昨年は原爆投下から80年にもあたり、マハティールご夫妻はリーダー塾後長崎を訪れて、全国の小・中・高校生への講演、被爆者の方々との面談、永井隆記念館では同じ医師である故永井氏に「医師は人の命を救う仕事をなのに彼は原爆の後始末をさせられた」と涙を流されました。

世界で紛争が絶えない今、平和を希求し、多様性を認めることの重要性が増しています。混沌とした時代に必要な次世代のリーダーをこれからも育てていきたいと強く思います。どうぞ、今後とも、変わらぬご支援とご指導を何卒よろしくお願い申し上げます。



▲8月9日夜、長崎平和祈念像で  
祈るマハティール夫妻

日本の次世代リーダー養成塾専務理事・事務局長 加藤暁子





## 2. 主催者からのメッセージ



筒井 義信 塾長（一般社団法人 日本経済団体連合会 会長）

いま、世界は大きな試練のただ中にあります。地球環境問題はもちろんのこと、国際秩序を含めて、これまで「当たり前」と思ってきた物事がいともたやすく変貌する様を私たちは日々目の当たりにしています。わが国に目を転じれば、少子高齢化・人口減少、資源・エネルギー制約など様々な課題が複雑なパズルのように入り組んで、私たちの眼前に立ちはだかっています。

こうした状況下で私たちには何ができるでしょうか？私は、「科学技術立国」と「貿易・投資立国」によるわが国の確かな成長の実現に向けて、中長期の視点からロードマップを描いていくことが重要と考えています。具体的には、イノベーション、税・財政・社会保障の一体改革、地方創生、労働改革、経済外交の強化という5つの分野に果敢に挑戦することが必要です。

次世代のリーダーを志す皆さんには、こうした国家規模、いや、世界規模の課題を自分事として捉え、構想力、実行力、協働力を存分に鍛えていただきたいと思います。必要なのは、広い視野と中長期の視点、そして一歩を踏み出す勇気です。失敗を恐れず挑戦し、多様な仲間と切磋琢磨しながら、世界に新たな価値をもたらすフロントランナーとなっていただきたいと思います。私は、変化のさなかにいる皆さん的情熱と行動力こそ、次の時代を切り拓く最大の原動力であることを信じてやみません。私も塾長として、皆さん一人ひとりの挑戦を心から応援しています。

### 「日本の次世代リーダー養成塾」役員等名簿

2025年7月28日現在（五十音順）

塾長	筒井 義信／一般社団法人日本経済団体連合会会长
塾長代理	榊原 英資／イーエスフォーラム株式会社代表
筆頭理事	服部 誠太郎／福岡県知事
理事	浅野 史郎／土屋総研特別研究員、元宮城県知事
理事	石原 進／九州旅客鉄道株式会社名誉顧問
理事	伊豆 美沙子／福岡県宗像市長
理事	江崎 稔英／岐阜県知事
理事	鈴木 直道／北海道知事
理事	鈴木 康友／静岡県知事
理事	高橋 温／三井住友信託銀行株式会社名誉顧問
理事	滝 久雄／株式会社ぐるなび取締役会長・創業者 株式会社NKB取締役会長・創業者
理事	達増 拓也／岩手県知事
理事	橋田 紘一／特定非営利活動法人九州・アジア経営塾理事長兼塾長
理事	溝上 泰弘／株式会社ミズホールディングス代表取締役会長
理事	宮崎 泉／和歌山県知事
理事	宮下 宗一郎／青森県知事
理事	宗政 寛／株式会社サニックスホールディングス代表取締役社長
理事	山口 祥義／佐賀県知事
専務理事	加藤 晓子／日本の次世代リーダー養成塾事務局長が兼務
監事	樋口 和光／九州電力株式会社常務執行役員

### 3. 開催概要

日本の次世代リーダー養成塾

塾長：筒井義信／一般社団法人日本経済団体連合会会長

#### 2 開催日程

2025年7月20日(日) 13:00～18:00 オンライン（オリエンテーション）

2025年7月28日(月)～8月8日(金) 合宿形式（対面）

#### 3 開催・宿泊施設

グローバルアリーナ（福岡県宗像市吉留46-1）

佐賀県波戸岬少年自然の家（佐賀県唐津市鎮西町名護屋5581-1）

※波戸岬少年自然の家には8月3日（日）～8月6日（水）の3泊4日で宿泊。

#### 4 塾生

対象：高校生（1年生～3年生） 149名

内 訳	参画自治体推薦枠 ( 北海道、青森県、岩手県、静岡県、岐阜県、和歌山県、福岡県 ) 佐賀県、宗像市、うるま市	110名
	全国からの一般公募枠	39名

#### 5 カリキュラム概要

##### ① 各界を代表する講師陣による講義

- 教養系（哲学、近現代経済・文明史、医学、科学、芸術など）  
日本や世界を代表する講師が高校生に知的好奇心を湧かせる講義をします。
- ビジネス系（日本企業の強みと弱み、ビジネスのしくみなど）  
世界を相手にビジネスの最先端で日夜活躍する講師が、日本の企業の強みや弱み、ひいては日本の国のある方を伝えます。
- 國際系（国際問題や外交、国連やNGO活動への理解）  
世界に目を向け、日本人としてのアイデンティティを持ち、国際舞台で活躍できる力をつけてます。
- 人間学（将来の夢をどう具現化するか、リーダーとしての生き方など）  
人生の先達が21世紀の日本を背負って立つ人材に必要なことは何かを語ります。

##### ② 講義後のディスカッション

講義終了後にクラス担任の指導のもと、1クラス約25名によるグループディスカッションを行います。クラス担任は、日本を代表する企業の中堅社員が務めます。

##### ③ プロジェクト型企画「グローバル・ハイスクール・サミット」

12日間を通して社会課題の解決に向けた議論を行い、具体案を提言する「グローバル・ハイスクール・サミット」を開催します。

##### ④ フィールドトリップ

- 佐賀県立名護屋城博物館にて当時の貴重な資料や遺産を見学し、日本列島と朝鮮半島間の歴史を学びます。
- 宗像大社神宝館で世界遺産である沖ノ島で発掘された国宝（8万点の一部）などを見学します。  
「道の駅むなかた」を見学して、味噌汁コンテストで調理する食材を調達します。

## 4. カリキュラム表



教科略

第22回 日本の次世代リーダー養成塾 カリキュラム表（2025年7月20日・7月28日～8月8日）

日目	日程	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00
0	7/20 (日)																		
1	7/28 (月)																		
2	7/29 (火)																		
3	7/30 (水)																		
4	7/31 (木)																		
5	8/1 (金)																		
6	8/2 (土)																		
7	8/3 (日)																		
8	8/4 (月)																		
9	8/5 (火)																		
10	8/6 (水)																		
11	8/7 (木)																		
12	8/8 (金)																		

## 5. 講師・講義概要

講義日	お名前 お役職 演題	ページ
7/29 (火)	加藤 晓子 日本の次世代リーダー養成塾専務理事、(公財)AFS 日本協会理事長 「“Warm Heart Cool Head”激動の時代に先を照らすリーダーとは」	8 ページ
	柿田 富美枝 (一財)長崎原爆被災者協議会事務局長 「被爆二世からのメッセージ」	8 ページ
	田中 重光 (一財)長崎原爆被災者協議会会长、日本原水爆被害者団体協議会代表委員 「被爆者として次世代に伝えたいこと」	9 ページ
	葦津 敬之 宗像大社宮司 「宗像の世界遺産への取り組みと環境問題」	9 ページ
7/30 (水)	小手川 強二 フンドーキン醤油(株)代表取締役社長 「発酵食品が繋ぐ国際化」	9 ページ
	滝 久雄 (株)ぐるなび取締役会長・創業者、(株)NKB取締役会長・創業者 「やらなければならないことは、やりたいことにしよう！」	10 ページ
7/31 (木)	佐橋 亮 東京大学東洋文化研究所教授 「世界の人々の平和と繁栄をどうすれば実現できるのか？」	10 ページ
	調 済 (公財)長崎平和推進協会理事長、長崎市立病院機構副理事長、長崎大学名誉教授 「被爆都市長崎から若者たちと共に未来を切り開く」	10 ページ
8/1 (金)	笠谷 和比古 国際日本文化研究センター名誉教授 「映画『オッペンハイマー』を観て—原爆神話批判—」	11 ページ
	佐々木 久美子 (株)グルーヴノーツ取締役会長・創業者 「高校生が知っておくべきテクノロジーのインパクト」	11 ページ
8/2 (土)	坂本 信博 (株)西日本新聞社メディア戦略局兼編集局上級専門委員メディア戦略担当部長 「巨竜に迫った3年間～隣人・中国とどう向き合うか」	11 ページ
	中川 智博 外務省経済局経済連携課首席事務官 「壇上に立ってみる」	12 ページ
	山口 祥義 佐賀県知事 「未来につなぐ君たちへ今伝えたいこと」	12 ページ
8/3 (日)	武谷 和彦 佐賀県立名護屋城博物館副館長 「肥前名護屋城と名護屋城博物館」	12 ページ
	李 凤宇 映画プロデューサー、(株)スモモ代表取締役、日本大学芸術学部映画学科講師 「映画で考える、我々の過去と未来」	13 ページ
8/4 (月)	沈 壽官 薩摩焼十五代 「伝統を守り現代を表現する」	13 ページ
	村岡 浩司 (株)一平ホールディングス代表取締役社長 「ローカルからの新しい価値を生み出そう」	13 ページ
8/5 (火)	川原 尚行 認定NPO法人ロシナンテス理事長 「究極の医療とは戦争をしないこと、させないこと～内戦のスーダンを経験して～」	14 ページ

講義日	お名前 お役職 演題	ページ
8/6 (水)	マハティール・ビン・モハマド 元マレーシア首相 「100歳のリーダーから～争いのない未来を築く処方箋」 “Prescription from 100 Years Old Leader for Building a Future without Conflict”	14 ページ
8/7 (木)	宮川 真喜雄 前内閣国家安全保障局国家安全保障参与 「歴史を読め。科学を学べ。危機を予知し、皆を率いて対処せよ。 日本のために、そして我々のアジアのために」	14 ページ
	佐野 恵美子 ショコラティエ、「LES TROIS CHOCOLATS PARIS」代表 「フランスと日本で見つけた『好き』を仕事にするチョコレートの旅」	15 ページ
	長船 健二 京都大学 iPS 細胞研究所副所長・教授 「iPS 細胞を用いた再生医療の現状と未来」	15 ページ

講義順



### 加藤 晓子 日本の次世代リーダー養成塾専務理事、(公財)AFS 日本協会理事長 「“Warm Heart Cool Head”激動の時代に先を照らすリーダーとは」

AFS 交換留学生としてアメリカのコネチカットで過ごした1年はその後の私の人生に大きな影響を与えた。留学第1日目の近代アメリカ史の授業で先生が「日本から留学生が来たから原爆を落としたから戦争が早く終結したことが是か非かを討論しよう」と言われ、「正しい」と答えた多くの同級生にいまだ苦しむ被爆者の実態を説明した。ジャーナリズムの先生が“HIROSHIMA”を書いたジョン・ハーシーを紹介してくれたことから、社会の「声なき声」に耳を傾け、伝えることこそが私の使命であると自覚した。全国紙で女性記者が珍しい時代に福岡を振り出しに記者生活が始まった。

現在の日本に目を向けると人口は減少し、少子高齢化が進んでいる。もはや外国人を排除することは現実的ではない。多様性を受け入れ、共に社会を築かないとい日本は存続できない。異なる文化を持つ人々と交流し、協調性を育むこと、すなわち「グローバル・コンピテンシー」が不可欠だ。

人生には困難がつきものであり、時にはどん底に突き落とされることもあるだろう。その経験があると、将来、人に対して優しくなる。あきらめずに自分の力を信じ、一歩を踏み出す勇気を持てば、必ず道は開かれる。失敗を恐れず、挑戦を続けることで、より良い未来を創造してほしい。

#### 講義の感想

- 私は常に、誰かに支えられていることを改めて実感しました。加藤先生はたくさんの活動を自分の意見、意志を持ちながらやっていてとても素敵だと思いました。私も5年後、10年後を見据えて、言葉や情報を鵜呑みにしたり、惑わされたりすることなく、自分の未来の道を切り拓き、日本や世界で貢献できる人間になりたいです。
- 私は今まで「一人でやらなければいけない」と思うことが多かったですが、繰り返し一人だけでできることはないとおっしゃったことがとても印象的でした。また、留学を決意することは、容易なことではないと思います。リーダー塾を卒塾した後、自分がやりたいことを改めて考え、それを行動に移していくことを思いました。



### 柿田 富美枝 (一財)長崎原爆被災者協議会事務局長 「被爆二世からのメッセージ」

被爆二世として生きてきた私にとって、原爆は過去の出来事ではなく、今も続く現実である。かつて37万人いた被爆者は、80年を経た今、10万人を下回り、平均年齢は86歳を超えた。被爆体験を直接語れる人が急速に減る中で、私は家族証言者として、母の体験や被爆者一人ひとりの人生を語り継ぐ役割を担っている。原爆は一瞬で街を破壊し、多くの命を奪っただけでなく、生き残った人々の人生、心、そして家族の歴史までも深く傷つけた。母は爆心地から3キロ離れていたが、街が燃え、人々が倒れていく光景を前に、戦争の恐ろしさを一生忘れるることはなかった。

被爆の苦しみは1945年で終わっていない。放射線の影響は長く続き、被爆者やその家族は病気や不安を抱えながら生きてきた。それでも被爆者たちは、「二度と被爆者をつくらない」という強い願いを胸に、国内外で声を上げ続けてきた。その声はやがて世界を動かし、核兵器禁止条約という形になった。核兵器は人を守るどころか、人類そのものを滅ぼす兵器であり、核と人類は共存できない。

被爆者がいなくなる時代に、私たち一人ひとりがこの事実を自分の言葉で受け止め、次の世代へ伝えていく責任がある。皆さんのが未来をつくる存在として、核兵器も戦争もない世界を本気で思い描き、行動してほしい。それが、原爆で命を奪われた人々に代わって、私が伝え続けたい願いである。

#### 講義の感想

- 山の上で助けを求める人々がいたが見捨てて逃げるしかなく、生きることに後ろめたさを感じたという話が印象に残っています。私が同じ状況でもきっと自分を守るのに精いっぱい同じ判断をしたと思いますし、この場合の選択に正解はないのだろうと思いました。
- 戦争の現実を伝えることで多くの国が核兵器に反対する姿勢を示している一方、日本が禁止条約を批准していない現状に国民として向き合う必要を感じました。「今日の聞き手は明日の語り手」という言葉を心に刻み、二度と被爆者を生まないために原爆を忘れない決意を持ち、忘れず過ごして行きたいです。



## 田中 重光 (一財)長崎原爆被災者協議会会長、日本原水爆被害者団体協議会代表委員 「被爆者として次世代に伝えたいこと」

4歳10ヶ月のとき、私は長崎で被爆した。爆心地から約6キロの場所にいたため、当時の記憶は断片的だが、母や先輩被爆者から聞いた話、そして自ら学んできた歴史が、私の原点となっている。原子爆弾は、わずか1キログラムにも満たないプルトニウムが核分裂を起こし、太陽表面を超える熱と凄まじい爆風、致死量をはるかに超える放射線を一瞬で生み出した。その被害は兵士ではなく、圧倒的に多くの一般市民に及んだ。私はこの事実を通して、戦争とは国家が人びとを動員し、声を奪い、命を消費していく仕組みなのだと理解するようになった。戦争に反対する声が抑え込まれ、思想や信仰までも統制された結果、原爆投下という取り返しのつかない現実が生まれたのである。

戦後も被爆者は長く支援されず、偏見と差別の中で苦しみ続けた。それでも私たちは声を上げることをやめなかつた。自らを救い、人類の危機を救うために、国内外で訴え続けてきた。その積み重ねが核兵器禁止条約へつながった。核兵器は人間と共存できない。未来をつくる若者一人ひとりが考え、行動すれば、社会は必ず変えられる。そのことを、私は自分の人生を通して伝え続けたい。

### 講義の感想

- 私は戦争の経験談を聞いたり、読んだりする機会が多くあったので、戦争のことは大抵知っているだろうと思っていましたが、私が知っていることはほんの一端であり、記録として残されていないことや戦争で苦しんでいても手を差し伸べられなかった人が多くいたのではないかと思いました。
- 唯一の被爆国である自国が、核廃絶で戦争反対の動きを積極的に訴えていくことが私たちにできることだと感じました。そのためにまず、戦争について深く学び、武力を使わず対話で平和を実現することの大切さを世界に訴えていく必要があると強く感じました。田中先生の核廃絶への強い想いを決して忘れず、平和を訴えていきます。



## 葦津 敬之 宗像大社宮司 「宗像の世界遺産への取り組みと環境問題」

私がこの地・宗像の歴史に向き合う中で、人の「記憶」が文明を支えてきたという事実を強く感じている。日本神話や古代史は、文字だけでなく、人の記憶によって受け継がれてきた。実際に、30年間ジャングルで生き抜いた小野田少尉の正確な記憶力に触れ、記憶の力は決して過去のものではないと実感した。

宗像は古代から海を舞台に外交・交易・国防を担い、日本が大陸から一方的に文化を受け取っただけではないことを示している。荒れる玄界灘を越え、広範囲に人が行き交った事実は、日本が高度な技術と主体性を持った海洋国家であった証である。さらに、自然に神を見いだすアニミズムの思想は、環境問題が深刻化する現代においてこそ価値を持つ。世界遺産登録が実現したのは、宗像の歴史が過去の遺産ではなく、未来への指針であると世界に伝えられたからだ。私は、この土地の精神を次の世代につなげていきたいと強く思っている。

### 講義の感想

- 多くの調査から、今までの定説が覆されると言う事例が起ったように疑問に思ったことを1から調べてみることも大切であると学びました。また、周りの目を気にして格好をつけて無理をするのではなく、様々なことにチャレンジすることで将来輝くきっかけになるとわかりました。
- 宗像大社が掲げた靈性、自然環境、自然崇拜というキーワードがユネスコ世界文化遺産の登録に繋がり、自然崇拜は環境問題に繋がっているということが印象に残りました。私は、神社と自然環境を結びつけたことがなかったので、話を聞きとても興味が湧きました。



## 小手川 強二 フンドーキン醤油(株)代表取締役社長 「発酵食品が繋ぐ国際化」

私はこれまで50年間社会人として働いてきた。大学卒業後は銀行員として社会に出て、その後、食品業界で経営に携わり、長年会社を率いてきた。その中で強く実感しているのは、日本という国が世界と深く結びつきながら成り立ってきたという事実である。日本は資源に乏しい国であり、原材料や食料を海外に依存し、貿易によって豊かさを築いてきた。戦後、食べるものも十分になかった時代から、工業製品や食品を世界に届けることで成長を遂げてきた歴史がある。一方で現在、日本は人口減少や食料自給率の低下といった課題に直面している。だからこそ今、日本の食文化や発酵食品といった強みを世界に発信し、宗教や文化の違いを尊重しながら共に生きていく姿勢が重要だと感じている。

若い皆さんには、勉強だけに縛られず、何か一つ打ち込めるものを見つけて欲しい。成長の速度は人それぞれで、遠回りや失敗も決して無駄にはならない。人との出会いや経験を糧にしながら、自分の可能性を信じて歩み続けてほしい。

### 講義の感想

- 県大会2位で現役東大合格という文武両道なご経験は高校生の最も目指す像だと思いました。学業に対して心機一転して、授業を聞くようになったら満点を取れたというお話から、とことん追求することの大切が分かりました。どのような物事にも活力を抱いて挑むことで、大きな結果が得られると思います。
- 日本では食文化が多様化に伴い、食品自給率が低くなっていることを学びました。しかし、もし日本と他国の関係が悪化した時、石油や天然ガスなどの燃料が最初に不足するため、食品自給率を重視しすぎることだけではいけないとの考えに、食品だけではなく、各分野に幅広い知識を持つことが重要であると気付かされました。



## 滝 久雄 (株)ぐるなび取締役会長・創業者、(株)N K B 取締役会長・創業者 「やらなければならないことは、やりたいことにしよう！」

私は、次世代のリーダーを目指す皆さんに、毎年「人類社会のより良い存続にどう貢献するか」という問い合わせている。その出発点となるのが好奇心だ。脳は使えば使うほど進化するが、その原動力は「知りたい」「やってみたい」という気持ちだ。

やらなければならないことを、やりたいことに変えた瞬間、思考は大きく広がる。将来リーダーになる皆さんに、私は3つの約束を提案したい。第一に、「最も早く、最もよく」を徹底すること。課題に妥協せず向き合う姿勢が、知見と人間関係を生む。第二に人間と人間社会を好きになること、好きだからこそ意見を交わし、より良い方向を目指せる。第三に、異なる文化や価値観を尊重することだ。背景の違いを理解しようとする姿勢が、世界と協働する力になる。

AIをはじめ社会が急速に変化する時代だからこそ、自分で考える力を手放してはならない。答えの出ない問い合わせても、考え続けることが未来を切り拓く。今日の話が、皆さん自身の価値観の軸となり、社会に貢献するリーダーへの一步になれば嬉しい。

### 講義の感想

- 脳を進化させるためにはよく学ぶ必要があり、そのために広い分野に興味を持つ「好奇心」が重要であると学びました。チャンスが少ない、自分には運がないと思うのではなく、自分から様々なことにチャレンジすることで、自らの能力や運を掴み取れるようになりたいと思いました。
- 好奇心を大切にすることで脳が活性化されるというお話を滝先生のご経験から実践されていることだと感じました。そのような滝先生の「リーダー憲法」から、「私自身の時間感覚を改善しなければいけない」「間違っているなら恐れずに言うことを心掛けよう」と思い、実践したいと思いました。



## 佐橋 亮 東京大学東洋文化研究所教授 「世界の人々の平和と繁栄をどうすれば実現できるのか？」

現代の国際社会が直面している課題、そして世界の平和と繁栄を実現するためにはどのようにしたらよいのだろうか。例として日中関係においては、国家レベルだけでなく国民レベルでも相互不信や固定観念が存在している。また、国家間の対立を解消するためには、一方的な勝利ではなく、妥協を通じた相互利益（win-win）の関係が必要である。そのためには、対立を煽るリーダーではなく、利害を調整し最大公約数を見いだすリーダーが求められる。だからこそ、実際に他国を訪れたり、多様な視点に触れたりして相互理解を深めることが不可欠であるのである。

私は「悲観的に世界を分析し、楽観的に世界を変えていく」という姿勢が重要であると考えている。現実を甘く見ることなく厳しく直視しながらも、未来への希望を失わないことが大切である。信頼の構築と対話の積み重ねこそが、長期的に平和な国際社会を支える基盤である。国際秩序の変化、不信の拡大、技術革新、そして平和の再定義といった現代社会の核心的課題を体系的に捉え、これから世界を考えるための視座を共有できていれば幸いである。

### 講義の感想

- 平和には「積極的平和」と「消極的平和」の2種類があり、我々は人権が保証され、貧困問題がない積極的平和を目指すべきだと思いました。しかし、今の時代では同じ価値観を持つ国が少なく、国々が相互不信に陥っているため、このような平和を目指すのは難しいと聞き、平和の実現の難しさを改めて論理的に理解しました。
- 言論の自由や他者の尊重を欠き、独善に陥ることは平和を脅かすのだと学びました。政治と企業で求められるリーダー像の違いも学び、日本は積極的平和の観点から真に平和とは言えないと思いました。不審を解消するには小国だけでなく、大国の譲歩も必要であること、歴史の裏に多様な背景があることも新たな発見でした。



## 調 済 (公財)長崎平和推進協会理事長、長崎市立病院機構副理事長、長崎大学名誉教授 「被爆都市長崎から若者たちと共に未来を切り開く」

学生時代、医学部で学びながら「社会の役に立つことに関わりたい」という思いで動いていた。その中で出会ったのが熊本水俣病である。患者が国や社会から正当に認められず、声を上げることすら難しい現実に衝撃を受けた。学生仲間と地域医療研究会を立ち上げ、現地調査や支援に関わる中で、病の原因は化学物質だけでなく、「人を人として扱わなかった社会構造」にあるのだと学んだ。その後、医師として長崎に戻り、被爆医療と向き合う中で、原爆がもたらした被害の深さを改めて知った。亡くなった人の数だけでなく、生き残った被爆者が白血病やがん、差別や偏見に今も苦しみ続けている現実は、決して過去の出来事ではない。

私は長崎大学核兵器廃絶研究センターを立ち上げ、研究と教育を通じて核の問題を伝えると同時に、若者が国連で学び、発信する機会を作ってきた。そして、平和は誰かが与えてくれるものではなく、自ら学び、考え、行動することでしか近づけないことを確信した。音楽や芸術、対話や国際交流、どれもが平和への取り組みになり得る。人の痛みが分かる想像力こそが平和の原点であり、次の世代にどんな世界を手渡すのかを考え続けることが、今を生きる私たちの責任だ。

### 講義の感想

- 田中先生、柿田先生の講義を通じて、核兵器の恐ろしさを学んだが、自分にできる行動を考えていた中で、調先生が紹介された被爆証言者育成のプログラムに関心を持ち、調べてみようと思いました。私は、自分の未来は自分で築くべきという考えに共感し、高校で学び、好きなように暮らしている今の環境に感謝したいと思います。
- 「次の世代に胸を張って快く渡せる世界にする」という言葉が、心に残りました。私たちは限りある資源や生命を未来の子どもたちから借りているという姿勢を持ち、戦争や差別といった現在の問題を、私たちの世代で解決できるようになりたいと強く感じました。



## 笠谷 和比古 国際日本文化研究センター名誉教授 「映画『オッペンハイマー』を観て—原爆神話批判—」

私は映画「オッペンハイマー」を手がかりに、原爆投下をめぐる「戦争を終わらせるために仕方がなかった」という通説を、歴史学の視点から問い合わせた。原爆は確かに極めて悲惨な兵器であるが、同時に当時のアメリカの技術力が結集した「1つの技術」でもあり、その開発過程自体は冷静に検討されるべき対象である。しかし、より重要なのは、原爆使用が本当に不可避であったのかという点である。私は、その説明自体が事実に基づかない虚構であると考えている。

日本は1945年夏、天皇制の存続を条件に和平交渉を模索しており、その動きは電文によってアメリカ側にも把握されていた。それにもかかわらず、その情報は無視され、ポツダム宣言から天皇制保障条項は削除された。結果として日本は受諾をためらい、その「拒否」を理由に原爆が投下されたのである。さらに、トルーマン大統領自身の日記という第一資料は、和平の可能性を知りながら原爆投下を決断した事実を明確に示している。歴史を正しく理解するためには、感情だけでなく、同時代に作成された当事者の資料に基づき、論理的に検証する姿勢が不可欠である。私は、この事実を世界に示し、歴史の語られ方そのものを問い合わせたいと考えている。

### 講義の感想

- 笠谷先生は「歴史を疑う」ということを教えてくださいました。歴史を知ったとき、「こんなことがあったんだな」と鵜呑みにしてしまいがちだが、実は歴史はすでに出来上がっていると思われているだけで、同時代資料と当事者資料の第一資料がそろったとき、正確な情報と言われていると学びました。
- 無条件降伏が軍隊に対する言葉で国に対する言葉ではないこと、日本に無条件降伏を要求したアメリカが国際法違反であったことを初めて知りました。当時のアメリカの「致し方なかった」という言葉のように現在でもSNSやテレビ、ニュースで映されるものが正しいものかどうか疑わないといけないということが言えると思いました。



## 佐々木 久美子 (株)グルーヴノーツ取締役会長・創業者 「高校生が知っておくべきテクノロジーのインパクト」

テクノロジーは、私たちが生まれる前から社会の姿を大きく変えてきた。かつて情報は一方的に与えられるものだったが、インターネットやスマートフォンの普及により、誰もが発信し、選び、使いこなす時代へと移り変わった。SNSやAIによるレコメンドは、私たち一人ひとりに最適化された世界をつくり出している。AIやロボットは、人の仕事を奪う存在ではなく、人が立ち入れない場所で働き、できなかつたことを可能にする力を持っている。医療や防災、教育の現場でも、テクノロジーは人の限界を補い、社会の課題を解決するために使われている。だからこそ大切なのは、技術を知ること以上に、何のために使うのかを考える視点だ。

これから社会で求められるのは、知識の量ではなく、情報を使いこなし、人とつながり、伝える力である。多様な価値観が共存する時代において、自分と異なる他者を理解し、協働する姿勢は欠かせない。私自身、幼い頃に抱いた「好き」や好奇心を原点に、テクノロジーと向き合ってきた。小さな興味や違和感こそが、未来を切り拓くリーダーシップの種になると、私は信じている。

### 講義の感想

- 学校でも情報との向き合い方について学んでいるが、その教育の範疇を現在のテクノロジーはすでに超えていると思います。戦争や犯罪を助長する可能性の低いテクノロジーが発展していくといいなと思いました。
- 生活の中にここまでテクノロジーが介入していることに驚きました。また、東北大学で研究されている量子コンピュータを数年前の段階から商業目的で実装に進んでいることに感嘆するとともに、トップトピックである組合せ最適化問題を物流に応用していることも量子コンピュータの特性をうまく活用していると感じました。



## 坂本 信博 (株)西日本新聞社メディア戦略局兼編集局上級専門委員メディア戦略担当部長 「巨竜に迫った3年間～隣人・中国とどう向き合うか」

中国駐在記者として過ごした3年間は、私にとってジャーナリズムの原点を問い合わせる時間であった。コロナ禍で日本の往来が途絶える中、私は30の省や直轄市、100を超える都市を取材し、中国社会の多様さと変化の速さを自分の目で見てきた。その中で強く感じたのは、「中国」や「中国人」という大きな言葉で一括りに語ることの危険性である。政府や中国共産党と現場で懸命に暮らす人々は決して同一ではない。だからこそ、思い込みを捨て、現場に足を運び、小さな主語で事実を伝えることを私は大切にしてきた。

一方、現代社会ではSNSが情報の中心となり、刺激的で分かりやすい言説が拡散されやすくなっている。その結果、偏った情報が人々の認識を歪め、国や人への不必要的恐怖や分断を生み出している。だからこそ新聞には、権力を監視し、歴史を記録し、困っている人の声を社会に届ける役割がある。読者の代わりに時間と労力を使い、事実を積み重ねることが、より良い社会への土台になる。恐れる前に知ること、自分の目で確かめ続けること。それこそが、これから時代を生きる私たちに求められている姿勢だと、私は確信している。

### 講義の感想

- マスコミが取材する人の周りに群がる理由が小さなつぶやき一つも漏らさないようにするために初めて知りました。マスゴミと呼ばれることがあっても、一生懸命になって取材を続けるマスコミの人々は体を張って現実を伝えようとしている姿が素晴らしいなと思いました。
- 「日本人でも中国人でもいい人はいる」という言葉が非常に強く印象に残りました。現在私がアメリカで留学生活を送る寮で人種や特定の国から来た人に対する偏見や陰口を耳にすることがあり、その度に私は違和感を感じています。大きい主語を使うことで罪のない人を傷つけてしまうということを周りにも広めていきたいと思います。



## 中川 智博 外務省経済局経済連携課首席事務官 「壇上に立ってみる」

私は、誰もが「自分なんか」と感じてしまう瞬間を持っていると思う。しかし、その欠点や弱さは、見方を変えれば必ず強みに転じる。慎重な性格は物事を丁寧に進める力になり、言い方がきついことは本音で向き合える誠実さにもなる。過去に起きた事実そのものは変えられないが、それをどう解釈するかは今この瞬間から変えられる。逆転の発想で自分を捉え直すことで、世界の見え方は大きく変わる。

外交や外務省の仕事も同じである。首脳会談という華やかな場面はほんの一部で、その裏側には膨大な準備と多くの人の努力がある。通訳の役割も、言葉そのまま置き換えることではない。話し手の意図を深く理解し、相手に確実に届く形で伝えることが求められる。そこでは「どう訳すか」より「どう伝わるか」が何よりも重要になる。語学の学習も、単なるスキル習得では続かない。自分の力が誰かの役に立ち、社会とつながっていると実感できたとき、学びは大きな意味を持つ。英語や語学は、将来の選択肢を広げ、世界への扉を開く力になる。

完璧である必要はない。自分の弱さを抱えたままでいいから、勇気を持って一步踏み出し、舞台に立ってほしい。その経験が、必ず次の成長につながると私は信じている。

### 講義の感想

- 翻訳ではなく意図を伝えるために言っていない単語を追加したり、抑揚・感情の入れ方を工夫していることを知り、その一言で外交が決まるという中のたくましさを感じました。英語は人に役立つことをモチベーションにし、テストだけの勉強ではなく1つの通間点としてとらえ、その先を見据えたいです。
- 通訳というハイリスクながらも、貿易を達成したときのハイリターンをモチベートしていると聞き、自分も、なんのために勉強しているかの意味を考え、ただ勉強するのではなくコミュニケーションを先生と増やしたり、将来の輝きのための手段として、英語や、いろんな言語を学ぶのが本当にいいなと感じました。



## 山口 祥義 佐賀県知事 「未来につなぐ君たちへ今伝えたいこと」

現代社会では、子どもの進路や挑戦に対して大人の関与が強まりすぎている場面を私は多く見てきた。安全な道を示すこと自体は決して悪いことではない。しかし、それが「本人の選択」ではなく「大人が決めた道」になってしまうと、主体性は失われてしまう。だからこそ、私は「迷ったらやる」という考え方を貫いてきた。自分自身で決断し、挑戦し、失敗した経験は必ず次につながる。挑戦しないことで残る後悔よりも、挑戦して得た学びの方が将来の選択肢を広げると確信している。

また、このSNSが発展した今の時代だからこそ、自分と反対の意見に触れ、考えを揺さぶることが重要である。これは政治や社会の問題に限らず、進路や人間関係の選択にも当てはまる。周囲の声が強いほど決断を他人に委ねたくなるが、だからこそ「最後は自分で決める」という軸が不可欠である。皆さんには「自分の人生を自分で設計することと、「社会をどう捉え、どう変えていくか」を同時に考える姿勢を大切にしてほしい。この学びを日々の小さな選択の中で実践し、どのような結果であれ胸を張って引き受けられる人になってほしいと願っています。

### 講義の感想

- 佐賀県の教育の方針である「自分で自分のことを決められる子供を育てる」という説明の際に「相談はいいけど、最後の決める部分は自分で、それまでのプロセスが大事だ」という言葉に、人の話に流されやすい僕は、この欠点を全力で直そうと思いました。
- 「最終的には自分で決断する」という言葉が印象に残りました。人に決められた事はやっぱりその人のせいにしてしまうので、相談に乗ってもらっても最後に決断するのは自分であります。山口知事がおっしゃっていたようにやるかやらないか迷ったら、「やる」を選べるようになります。



## 武谷 和彦 佐賀県立名護屋城博物館副館長 「肥前名護屋城と名護屋城博物館」

城は単なる建造物ではない。なぜこの場所に築かれたのか、なぜこの構造なのか、誰がどのような目的を持っていたのか——こうした問い合わせを持って見ることで、史跡は単に眺める対象ではなく、当時の社会や人々の息づかいを読み取る場へと変わる。私は皆さんに、歴史を単なる知識として暗記するのではなく、想像力を働かせて立体的に感じ取ってほしい。とくに名護屋城の「なごや」という名称には複数の由来が考えられ、愛知の名古屋だけでなく、日本各地に同音の地名が存在する。地名は土地の特徴や人々の暮らしと深く結びつき、過去の記憶を言葉として現在に伝えている。だからこそ、地名を調べることは、その地域の歴史を理解する重要な入り口となるのである。

史跡の価値は「そこに残っているもの」だけにあるのではない。その背景を知り、問い合わせ立て、想像し、そして次の世代へ受け渡そうとする意思によって、歴史はより厚みを増していく。皆さんが今回の学びをきっかけに、歴史的景観を大切にし、過去と現在をつなぐ視点を持ちながら学び続けてくれることを願っている。

### 講義の感想

- 城の名称の由来や構造、築城者、そして建設の目的など、様々な歴史的背景を学ぶことができました。歴史的な建造物を訪れる際には、「なぜこのような形になっているのか」「どのような理由で建てられたのか」といった疑問を持ちながら見学することで、より深く楽しむことができると感じました。
- 秀吉やその周囲の将軍の考え方など、朝鮮出兵の裏側を知ることができ、とても面白かったです。歴史を学ぶ際は、その時代の人々になりきって、心情を読み解いていくことで歴史上の人物の人間味を感じることができ、歴史に対する興味関心がより大きくなるのではないかと考えています。



## 李鳳宇 映画プロデューサー、(株)スマモ代表取締役、日本大学芸術学部映画学科講師 「映画で考える、我々の過去と未来」

同じ作品でも、自然の描写に惹かれた人、登場人物との距離の近さを感じた人、関係性が分かりにくかったと感じた人など、受け取り方は実に多様だ。その違いこそが映画の本質であり、正解は一つではない。疑問を持ったという感想も、映画と真剣に向き合った証拠だと思っている。映画は観る人それぞれの経験や関心を映し返す鏡のようなものであり、同じ場面でも心に残るポイントは大きく異なる。だからこそ、感想を言葉にすること自体が、自分自身の視点を知る行為でもある。

「ちやわんやのはなし-四百年の旅人-」が描いているのは、単なる伝統工芸の美しさではなく、「受け継ぐこと」の現実だ。歴史の長さ、技の重み、後継者不足、そして個人の夢との葛藤。親から子へ継ぐことは決して美談だけではなく、迷いと選択の連続でもある。継ぐか、離れるか、あるいは形を変えるか。その判断は常に個人に委ねられ、正解は用意されていない。その選択には覚悟と責任が伴う。だからこそ建築と工芸の両方を目指したいという声が出てきたことに、私は強い希望を感じた。新しい形で伝統を更新していく人がいてもいい。

映画は、今を生きる人の姿を未来に残す装置でもある。映像は、その人がどう生き、何を考え、どんな時代を生きていたのかを伝えてくれる。皆さんも、いつか何かを残す立場になる。そのとき、自分は何を記録し、何を次の世代に手渡したいのか。今日の映画が、その問いを考えるきっかけになれば嬉しい。

### 講義の感想

- 「映画は社会と人をつなぐ媒介である」という考えが印象に残りました。考えれば考えるほど、国籍や言語を超えて、人を結びつける力があるのだと感じました。普段は娯楽として映画を観ることが多いけど、もっと視野を広げて作品を見たら、自分の世界の見方も広がるのかもしれないなと思いました。
- 「映画で過去と未来を考える」というテーマが、先生の作品では具体化されると感じました。偏見や差別に揺れた沈壽官十五代の葛藤から、アイデンティティや日本人とは何かを自分事として考えました。映画は記憶をつなぎ直す力を持つのか。日韓の痛みをどう対話に変えるか。価値観が揺さぶられる体験を大事にしたいと思います。



## 沈壽官 薩摩焼十五代 「伝統を守り現代を表現する」

私は研究者でも政治家でもない。ただ、自分がこれまでに経験してきたことを、迷いながらも皆さんに伝えてきた。振り返れば、私の人生の軸には常に「教育」と「独立」があった。幼い頃、過疎地の小学校で育ち、父は「教育の谷間に子どもを置いてはならない」と声を上げた。その運動はやがて制度を変え、未来は子どもと共にやってくるという言葉を、私は背中で学んだ。祖母から父に贈られた「独立独歩」という言葉は、今も胸に残っている。自分で立ち、自分で歩くこと。それは孤独に耐えることではなく、自分が正しいと信じたことを、たった一人でもやり抜く覚悟を持つことだ。

日本の文化やもののづくりの歴史を見ても、異なる土地に根を下ろし、試行錯誤を重ねながら新しい価値を生み出してきた人々がいる。分からぬことに立ち止まり、それでも前に進んだ先に、未来は拓かれてきた。だからこそ私は、迷いながらでいい、自分の足で考え、歩き続けてほしいと思っている。

### 講義の感想

- 「独立独歩」という言葉は私の人生の軸となるかもしれない。目まぐるしいスピードで移り変わるこの世界を生きていくには、流れに負けない太い軸が必要だと感じました。自分の周りを渦巻いて積み重なっていく歴史の中を、いかに踏ん張って自分を保っていられるか考えながら生きていきたいと思った。
- 沈先生が自分の環境に甘んじることなく、イタリアへの留学や韓国でのキムチ壺修行など、常に新たな挑戦を続けておられる姿勢は非常に格好よく、私自身大きな憧れを抱きました。厳しい環境にあえて身を置き、「自分が変わる」という強い意志を持って行動してきたその生き様には、深い感銘を受けました。



## 村岡 浩司 (株)一平ホールディングス代表取締役社長 「ローカルからの新しい価値を生み出そう」

「地域にある小さな課題」は、社会の中で置き去りにされがちである。多くの人がグローバルな社会問題や大きな政策に目を向ける一方で、足元の地域に存在する小さな困りごとや矛盾は見過ごされやすい。しかし、地域の小さな課題は絶えず生まれ続けており、それらを丁寧に見つめ直さない限り、大きな社会課題も根本的には解決されないと私は考えている。私の使命は、「食」を通じて人々の人生を豊かにすることであった。九州の食材を活かした「九州パンケーキ」、地域の人々が自然に集まる場づくり、そして高齢者の知恵や経験を活かす「ばあちゃん新聞」といった“ばあちゃんビジネス”は、その使命の具体化の結晶である。

皆さん一人ひとりにも、自身の足元にある「小さな課題」に目を向け、それを見つめ直してほしい。そして、人と人の信頼、対話、誠実さを大切にしながら、一步踏み出してほしい。それこそが、地域の未来をつくる第一歩になると私は信じている。

### 講義の感想

- 社会課題について深く考えるきっかけをいただきました。特に印象に残ったのは、社会課題とは「普通はこうだよね」と感じるそれぞの疑問や課題意識から生まれるものであり、一人ひとり違った“普通”を考えることが大切だという言葉です。
- 普通というものは世界中の人々の考え方の平均値であるのではなく、自分自身が持つ世間の情報を咀嚼した上での独自の世界観であると感じました。その、独自の「普通」を体現している人々は自分自身のアイデンティティを貫きながら世間が考えることのなかった新たな価値を醸成し続けていると感じました。



## 川原 尚行 認定NPO法人ロシナンテス理事長

### 「究極の医療とは戦争をしないこと、させないこと～内戦のスーダンを経験して～」

アフリカ、とりわけスーダンの紛争地域で医療支援に携わってきた経験を通じて、私がたどり着いた結論は、「究極の医療とは、戦争をしないこと、そして戦争をさせないこと」である。医療とは、単に病気や怪我を治す行為にとどまらない。戦争が起これば、多くの命が危険にさらされ、医療体制そのものが崩壊する。どれほど高度な医療技術があっても、社会が破壊されてしまえば人々を守ることはできない。だからこそ、平和な社会を築くこと自体が、最も根本的な医療であると私は考えている。

また、支援とは「助けてあげる」ものではなく、「愛し、尊重する」関係の上に成り立つものである。一時的に医療チームが入り治療をして去るだけでは、地域は自立できない。現地の人材を育て、仕組みを整え、その地域自身が医療を継続できる体制をつくるこそが本当の支援である。医療の本質は、人の命を救うことだけではない。人々が安心して暮らせる社会をつくるこそが、眞の医療であると私は考えている。「医療とは何か」「世界の一員として何を知り、どう行動すべきか」を考えるきっかけになれば幸いである。

#### 講義の感想

- スポーツから医療の道に進み、海外の地域医療の支援をしていく中で、アメリカやヨーロッパが支援をしないという理由から支援を停止されたにも関わらず、自身で団体を立ち上げ数多くの開発をし、支援を充実させていった活躍はとてもすごいと感じました。
- 「究極の医療とは、戦争をしないこと、そしてさせないこと」という言葉にすべて詰まっている気がします。そのためには、相手のことを尊重することだと先生がおっしゃっていたので、自らの先入観で決めつけることをせずに相手に敬意を持っていきたいと思いました。



## マハティール・ビン・モハマド 元マレーシア首相

### 「100歳のリーダーから～争いのない未来を築く処方箋」

#### “Prescription from 100 Years Old Leader for Building a Future without Conflict”

私は100年という時間の中で、第二次世界大戦を含む數え切れない戦争を見てきた。第一次世界大戦後に生まれ、平和は実現できると人々が信じた時代を知っている。しかしその期待は長く続かず、再び世界は戦争へと突き進み、約7000万人の命が失われた。その反省から国連は設立されたが、現実には一部の大國が拒否権を持つことで、虐殺や戦争を止める決議すら実行できていない。今も武器を売るために紛争が煽られ、核兵器が使われる危険は消えていない。もし核が使われれば、それは文明の終わりを意味する。だからこそ私は、若い世代に訴えたい。

戦争は避けられないものではない。日本国憲法やASEANの取り組みが示すように、対話と交渉によって平和を維持する道は確かに存在する。すべての国が戦争を違法とする仕組みをつくり、反戦を掲げるリーダーを選ぶことが必要だ。過去の惨禍を忘れず、しかし憎しみに縛られず、未来を選び取る力は、これからを生きる私たち若者の手の中にある。

#### 講義の感想

- 戦争から学ぶことや現代社会で多様性が重視される中、共存していくことを改めて考えさせられました。原爆を記憶に留めておくだけでなく、そこから得た恐怖や学びを今ある世界で起こっている戦争や紛争、内戦などの争いで平和的な手段で解決し、永続的な平和となるように模索していかなければならないと思いました。
- 「いつまでも過去の恨みを引きずる暇はない。今は戦争を止めるべきだ」という言葉が深く心に残りました。強い信念を持って行動することが多くの人々に影響を与え、平和な世界を築く一歩となっていることが素敵だと感じました。私も将来、平和に対してさらに積極的にアプローチできるようになりたいです。



## 宮川 真喜雄 前内閣国家安全保障局国家安全保障参与

### 「歴史を読み。科学を学べ。危機を予知し、皆を率いて対処せよ。」

#### 「日本のために、そして我々のアジアのために」

現在の国際情勢は大きな「転換点」にある。冷戦後、国際協調とグローバル化を基盤に平和と繁栄を追求してきた世界の秩序は大きく揺らいでいる。今日の国際社会では分断が深まり、大国間の競争が激化している。戦争の火種はすでに幾つかの地域で発火し、その拡大の脅威はむしろ強まりつつある。国際司法は事実上機能不全に陥り、国連もまた、常任理事国が拒否権を持つ構造の下で、制度疲労を深め、国際秩序の維持が現実に困難になってきている。陸・海・空に拡大してきた戦闘領域は、宇宙に広がり、サイバー空間に忍び込み、経済活動を巻き込んでいる。加えて、核兵器の脅威は益々深刻化し、自国の安全を最優先するその保有諸国がその兵器の削減を行うとは到底考えられず、その完全廃絶などは絵空事と言っていい。

私が諸兄に伝えたいことは1つである。それは、「理想を語るだけでは平和は守れない」という冷厳な国際社会の現実である。現実から目を背ければ、危険はむしろ増大する。歴史を学び、科学を理解し、国際政治を冷静に読み解く姿勢が不可欠である。若い世代のリーダーたる諸君が、「自分たちを守るのは一体誰なのか」という根源的な問いに主体的に答えを見つけるこそが、世界平和への最初の第一歩であると私は考える。

#### 講義の感想

- 「日本の味方といえる国は現在でどれだけあるのだろうか」と考えさせられました。アメリカは、日本の国力が弱くなってきたらアメリカのお荷物になるということや、人と人の紛争はやがて家と家の紛争になり、国家間の紛争になるという身近な例を使った説明もとてもわかりやすかったです。
- 戦争の廃絶に関して教養を深めることができました。国家安全保障の第一線で貢献された先生の実体験に基づいたお話を、戦争を経験していない私たちにとって、さらに平和への願いが高まりました。これから、日本はどうしていくべきなのか、考えるきっかけとなりました。



## 佐野 恵美子 ショコラティエ、「LES TROIS CHOCOLATS PARIS」代表 「フランスと日本で見つけた『好き』を仕事にするチョコレートの旅」

「好きなことを伸ばすこと」、当たり前に聞こえるかもしれないが、これが私の最も大切にしてきた信念である。ただし、好きな道を選んだからこそ求められる姿勢もある。それは、プロとして手を抜かないこと、そして一つひとつの行動に誠実であることである。好きな仕事であっても、続けるほど責任は重くなり、直面する壁も増えていく。しかし、失敗を恐れすぎず、起きたことから学び、次に活かして切り替えていく姿勢こそが、挑戦を継続する力になるのである。

私自身も、挑戦の一つとしてフランスへ渡り、修行をする道を選んだ。必死に学び続けた結果、少しづつ実力を身につけ、やがて世界の舞台で評価されるまでに成長することができた。自分から話すこと、信頼関係を築くこと、感謝を伝え続けること——こうした小さな行動の積み重ねが、結果的に自分の自信となり、挑戦を支える土台になったのだ。チョコレート産業は現在、地球温暖化によるカカオ生産への影響、供給不足や価格高騰といった「カカオ危機」、そしてカカオ農園における貧困や児童労働の問題など、構造的な課題を抱えている。私は、「おいしいチョコレートを作ること」と「その背景に責任を持つこと」を切り離さずに捉え、これからも挑戦の意識を持って自らの使命を突き詰めていくつもりである。

### 講義の感想

- 謹めずに最後までやり遂げることの重要さにも気づかされました。将来はその分野を好きと思ってもらえるような体育の先生になり、子どもたちに寄り添いたいです。自分も周りも愛することができるような人間になりたいと思いました。
- 「世界中全て同じ人間だ」という言葉が印象に残りました。日本語が通じないフランスで営業権を持ち、現地で奮闘した先生のご経験から、フランス人も日本人と同じで、嫌いな人もいれば好きな人もいると知った。この話を聞いて、初めて出会う人との緊張が和らいぎました。



## 長船 健二 京都大学 iPS 細胞研究所副所長・教授 「iPS 細胞を用いた再生医療の現状と未来」

iPS 細胞は、病気の原因解明や病態モデルの構築、さらには再生医療への応用へと発展し、すでに一部では臨床応用が進んでいる。私はこの研究を通じて、「医療が“治せない”を減らしていく時代が訪れるかもしれない」という可能性を強く感じている。しかし同時に、動物実験の必要性や社会的受容の問題など、科学の進歩と倫理の間で葛藤が生じることは避けられない。だからこそ、最先端医療は希望だけでなく重大な責任を伴う分野であると考えている。

研究は努力すれば必ず成果が出る世界ではない。何年も同じ実験を続けても、目に見える結果が得られないこともある。それでも研究を続けられるのは、「一人でも多くの患者を救いたい」「社会の役に立ちたい」という目的があるからである。この姿勢は研究者だけでなく、次世代のリーダーにも不可欠である。困難や失敗に直面したときに諦めるのではなく、「なぜ失敗したのか」「次にどう改善できるか」を考え続けられる人こそが、最終的に社会を前に進めていくと私は信じている。

### 講義の感想

- 「世の中どう変わるかわからないから、自分のやりたいことをする」という言葉が特に印象に残りました。時代に沿った生き方や考え方も大事だが、変わりゆく世の中で自分のやりたいことをとことん追求し、どうやったら今の社会にそれを適応させ、役立てることが出来るかを考えていくのも面白いなと思いました。
- 人生 100 年時代と呼ばれ、人生の半分以上を仕事に費やす時代も来るかもしれません。そのような中で、自分のためよりも人に尽くすという選択をされたことに強く感銘を受けました。どうせするなら人のためになる方を選べるような人に私もなりたいと感じました。

## 6. 塾期間における成果・課題や卒塾後の様子

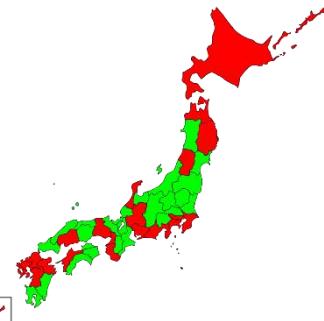
第22回日本の次世代リーダー養成塾（以下、リーダー塾）を終えて、塾生概要、期間中における塾生の様子や成長をまとめた。

### 塾生概要

#### （1）概要

塾生は、負担金をいただいている8道県2市（北海道、青森県、岩手県、静岡県、岐阜県、和歌山県、福岡県、佐賀県、福岡県宗像市、沖縄県うるま市）の参画自治体推薦枠から110名、全国・海外から公募で選抜する一般公募枠39名を選考し、参加者として合計149名を決定した。国内22都道県97校、海外5校（アメリカ・エチオピア・フランス・ベトナム）から参加し、海外の高校に所属している塾生は主に夏季休暇のため帰国した高校生または海外在住の日本人の高校生であった。（資料③～④参照）

塾生は、約25名・6クラスに分かれ、1クラスをクラス担任1名（前半7月28日～8月2日・後半8月2日～8月8日の交代で各1名）と学生リーダー2名（全期間）で担当していただいた。期間中、体調不良の塾生は、宿泊棟の療養部屋からZOOMを通じてハイブリッド形式で参加。一部のプログラムは感染対策を徹底した上、対面で参加した。



▲参加者の都道府県(赤)

#### （2）塾生の募集及び選考

塾生は、一般公募枠または参画自治体推薦枠のいずれかの出願区分に申し込み、審査を経てリーダー塾に参加することができる。一般公募枠は、事務局が募集・選考を担い、参画自治体推薦枠は、各自治体で個別に募集、および選考を行っている。（自治体ごとに選考方法が異なる）

今年はホームページやSNS（公式Instagramなど）で募集開始のお知らせや卒塾生の声などをアップし、広報・周知を行った。また、オンライン説明会を3月、4月に計3回開催し、応募を検討している高校生や保護者、学校関係者にご参加いただいた。そのほか、卒塾生にも自身が活動する団体や高校の後輩へのチラシ配布やSNSを通じての呼びかけに協力していただいた。毎年塾生が参加を決意するきっかけに、先輩や兄弟姉妹が塾への参加を契機に大きく成長した姿を目の当たりにしたことを挙げる者が多い。今後も卒塾生による周知活動協力に期待するとともに、塾として卒塾生の活躍を支援していきたい。

今年度からすべての出願区分でインターネット出願を採用し、応募者はオンラインで応募が完結するようになった。一般公募枠は例年4月1日から募集を開始していたが、今年度は応募者が春休みに応募を完了できるよう3月1日から応募を開始した。なお、参画自治体推薦枠は新年度となる4月1日以降に開始する自治体がほとんどであった。

一般公募枠の選考については、一次審査（書類審査）、二次審査（オンライン面接）がある。参画自治体推薦枠の選考については、各自治体で書類審査、面接、グループディスカッション等で選考を行った。

▲インターネット出願

## 塾生の期間中の様子

### (1) 受講者決定から開塾まで

5月30日に審査を通過した受講者を決定し、データで受講の案内や事前課題を送付した。リーダー塾では本番期間中に知識を蓄え、より良い時間を過ごせるよう全塾生に対して事前課題を課している。今年は①グローバル・ハイスクール・サミットのレポート（第1弾～第3弾）②合唱「ダーリン」「花は咲く」の歌詞、パートの練習③名刺の作成④講師からの読書課題⑤自己紹介フォームの入力に取り組んでもらった。また、1週間前の7月20日には事前オンラインプログラムを行い、リーダー塾のガイダンスやクラス交流、役職決めなどを行った。そして、塾初日に自宅から出発する前に新型コロナウイルス・インフルエンザの抗原検査を全員に実施し、陰性を確認した上で、塾に臨んだ。



▲入塾式の集合写真

7月28日、福岡県宗像市のグローバルアリーナにて開塾。入塾式では、榎原英資塾長代理が開塾の挨拶をし、来賓の服部誠太郎福岡県知事、伊豆美沙子宗像市長より、激励のお言葉をいただいた。

塾生を代表して3名が榎原英資塾長代理に向けて決意表明を行った。

初めに福岡県立城南高等学校2年の河野翔子さんが「私は出会った彼ら（留学先で出会った人々）のように自分の信念を持ち、情熱と理性を兼ね備えた愛で溢れるリーダーになりたいです。リーダー塾を通して社会について、仲間について、そして自分についてたくさんことを知り、これまでの経験やこれから経験することを最大限に生かしていきます」と語った。



▲決意表明/河野翔子さん

次に、岩手県立釜石高等学校1年の菊池真暖さんは「今、世界では悲しいことに多くの争いが起きています。世界や日本で起きている問題を他人事として捉えず、問題の発見と、どうしたら解決できるか、自分ならどうやって乗り越えるかを、講師の先生方や仲間の皆さんと一緒に考え、議論し、そして考え方を仲間と一緒に12日間の貴重な時間を使って身につけていきたいと思います」と話した。



▲決意表明/菊池真暖さん

最後に沖縄クリスチャンスクールインターナショナル2年の尚瑠美さんが、地元の沖縄の歴史について語った後「例えどんな理由があろうと、命を奪う行為は決して許されてはいけません。しかし、分断されていた国と協調を重ねることで新しい世界が見えることもあります。協調とは相手のバックグラウンドをより知ることで実現されることです。この12日間という2度と戻ってこない時間を余すことなく、北は北海道から南は沖縄、あるいは海外からの参加者みんなで恐れることなく意見をぶつけ合いましょう」と述べた。



▲決意表明/尚瑠美さん

### (2) 塾生の様子と特徴

塾生の様子と特徴としてまず挙げられるのは、今年度初めて取り入れた「事前オンラインプログラム」の効果である。初対面のクラスメイトや塾生と自己紹介やアイスブレイクを事前にオンラインで実施したこと、合宿初日から非常に活発なコミュニケーションが見られた。また、ガイダンスを通して「この12日間の1秒たりとも無駄にしない」という強い決意や、自分たち自身の手でこの塾を自治・運営していくという意識を全員が



▲事前オンラインプログラムの様子

共有していたように感じられた。さらに、スタッフに対する言葉遣いや、講師の方々への態度・姿勢も例年以上に素晴らしい、リーダーとしての礼儀や節度の面でも高い成熟度が見られた。生活空間の面でも、自分たちで椅子の並びや荷物の置き方を工夫しながら過ごし、スタッフの干渉が最小限で済むように自律的に行行動していた。塾生は、自治運営のためにそれぞれ委員会に所属する。その委員会が自ら声を掛け合い、互いに助け合いながら自治運営を行っており、例年以上に「自分たちで作る塾」という意識が強く感じられた。

委員会	人数	主な役割
学級委員	2名	-クラスの責任者・まとめ役、担任補佐、連絡役、点呼など -講義場の椅子の設営、整頓、前夜祭の運営 -体調不良者の把握・報告、体温の確認、水分補給を促すなどの声かけ
GHS 委員	4名	-GHS 備品の管理、ディスカッションの記録、報告 -ディスカッションの主導を学級委員と話し合いながら決める -報告シートの提出、リサーチ時の不正などをチェック
生活委員	5名	-HR 備品の管理 (iPad などの受け渡し) -洗濯室の使用についてのルールや時間割、忘れ物の確認 -お風呂場の忘れ物・入浴マナーのチェック、時間内の終了確認 -ドライヤー利用の指導
掃除委員	5名	-宿泊棟や共用部分の清掃、シーツ交換を主導、ベッドメイキング -清掃後のチェック、部屋の換気などの衛生管理
食事委員	5名	-食券の管理、朝食時のクラステーブル分け -食材のつぎ分け、食事後の片付けのチェック
施錠 防災委員	4名	-宿泊棟の鍵の管理、戸締り確認、災害時の誘導など -クーラーや照明の確認



▲担任交代式の様子



▲講義後の講師と塾生



▲手を挙げる塾生たち

担任交代式や卒塾式では、多くの塾生が涙を流しながら別れを惜しみ、

12日間の濃密な時間を振り返る姿が印象的であった。また、有志の合唱委員も約1か月前からオンラインミーティングを重ね、自分たちで練習計画表を作成するなど、これまでにない主体的な取り組みを行っており、その意欲と行動力に大変驚かされた。

講義中の質疑応答でも積極的に手を挙げ、前向きに学び取ろうとする姿勢が顕著であった。事前課題として出された「名刺作成」では、自分で作った名刺を手に、様々な塾生やスタッフに自ら声をかけて自己紹介や挨拶を行う様子が見られた。講義後には講師の先生に名刺を渡し、「この出会いを大切にしたい」と積極的にコミュニケーションを取る塾生の姿も印象的であった。講師のお出迎え・お見送りも塾生の役割として行われ、緊張しながらも講師に丁寧に接し、事前にリサーチした質問を投げかけたり、講義前に意見交換を行ったりと、積極的に学びを深めようとする姿勢が多く見られた。

### ■スタッフから見た塾生の印象（主な内容を抜粋）

自主的に考え、積極的に行動する生徒が多かったという印象を持ちました。初期の頃は時間にルーズなクラスもありましたが、後半には一人ひとりの意識が高まり、スケジュールを把握した上で移動や準備ができるようになっていました。

全体的に「自分から動こう」という雰囲気があって、とても良かったと思います。普段とは違うタイトなスケジュールの中で、集団行動やシビアな環境を強いられることもありましたが、文句を言う子はほとんどいなくて、前向きに取り組む姿がとても印象的でした。さらに、スタッフの話にもきちんと耳を傾け、その素直さがとても頼もしく感じられました。

過去の塾生から感じたことと同様に、どの塾生も総じて真面目で、学ぼうとする意欲が非常に高く、限られた時間の中で一生懸命に取り組んでいると感じた。学校を飛び出てこのような活動に参加する意義を各々がしっかりと認識し、自分に足りないものを得ようとする前向きな姿勢を強く感じた。

クラス担任としての前半期間だけで、すでに殻を破っている子、変わろうとしている子の変化がよく分かりました。周りも変わろうとしていることもあり、そういった意識が触発されている環境が影響しているのかなと感じました。初めは、なかなか意識出来ていなかった当事者意識や、仲間との連携を積極的に意識して行動できる子は成長が早いと感じました。高校生の時点でここまで自身を変えていく姿には、感動を覚えました。

### (3) 短期間での成長

#### ■卒塾生代表挨拶

最終日に行われた卒塾式では、緊張した様子が見られた入塾式から一変、12日間のプログラムをやり遂げた、堂々とした表情が多く見られた。期間中の成長は卒塾式での代表挨拶に表れている。今年は2名の代表者が、塾を通して学んだことや卒塾後の抱負を声高らかに宣言しました。

#### 【4組】井上碧さん（アメリカ・St. Croix Lutheran Academy 3年）

12日前、私たちはこの武道場で初めて顔を合わせ、それぞれ思い思いのままにこの合宿をスタートしました。始めは永遠のように思えた仲間と過ごす時間も、残すところあと数時間です。私の所属するなぜかやや体育会系の4組は、担任の先生方や学生リーダーの2人を含め最初から本当に雰囲気が良く、挨拶も5分前行動も積極的に出来る私の自慢のクラスです。全員が成人した時の同窓会では、絶対に札幌ビールで乾杯しましょう。



▲代表挨拶/井上碧さん

今回のリーダー塾の中で私を一番成長させてくれた活動はグローバル・ハイスクール・サミットです。発表をするたびに審査員の皆さんに鋭いコメントを受け、その度に心が折れかけましたが、クラススタッフの愛と鞭、そして何より逆境を乗り越えようというクラスの熱意のおかげで最終発表では劇的な成長を見せることができました。発表を完成させるために4時に起きて解決の難しい世界問題について本気で話し合っていた高校生は、きっと日本で私たちしかいなかつたのではないかと思う。

講義直前まで友人と笑い話をしていたら怒られ、就寝時間を守らず怒られ、忘れ物をしては怒られ、とにかく怒られまくりの毎日でしたが、事務局の皆さんの愛のある指導のおかげで、私達は12日間という短い期間の中でここまで大きく成長できました。本当にありがとうございました。

私は3日後、アメリカに飛び立ち、高校での留学生活3年目が始まります。「日本人としての自分」と異国の地で求められる存在との乖離を克服できず、せっかくの留学生活を内向的に過ごしてきました。しかし今は、リーダー塾を通して以前より遙かに大きな自信に満ち溢れ持ち強くなった自分がいます。意見を共有した際に、激しい議論を交わす中でもお互いの根底にある意図を汲み取り、尊重する環境のおかげで12日間という短い期間の中でも私たちには一生物の強い絆が生まれました。残り1年の留学期間、培った自信をより確固たるものとし、意見を伝えることを恐れずに悔いのない生活を送っていきます。

「リーダー塾はあくまでもきっかけづくり」小説に例えるなら序章に過ぎません。ここからどんな物語を展開していくのか、筆者であり主人公でもあるあなたが描くストーリーには無限大の可能性があります。小説が出来上がった時には、必ずここにいるみんなで読み比べ、感想を語り合いましょう。

最後になりますが、この度は、日本の次世代リーダー養成塾事務局の皆様、並びに関係者の皆様、私たち22期生にこのような素晴らしい機会をくださり、本当にありがとうございました。

#### 【6組】吉田改理さん（私立智辯学園和歌山高等学校 2年）

今回、私たち高校生にこのようなサマースクールを開催して頂き、本当にありがとうございました。



▲代表挨拶/吉田改理さん

ここ、グローバルアリーナにきた初日、これから同期となる高校生と初めて話し、みんなの意識の高さに驚きました。学校の友達に誘われたからという軽い気持ちできた僕なんかがこれからこの人たちと上手く馴染んでいけるのか、不安で眠れなかったのを覚えています。それでも、話しかけると、みんな笑顔で返事をしてくれて、心の底から安心しました。本当にありがとう。

さらに活動が増えていくにつれ、どんどんみんなとの距離は縮まっていきました。特に6組のみんな。いっぱい悩んで、苦しんで、怒られたな。特に5日目のHRで時間にルーズすぎると怒られたのは凄く覚えている。でもその日から6組は絶対変わった。あの日を境に、6組は確実に前進した。グローバル・ハイスクール・サミットでも、話しが進まなかったな。思ったことを言葉にするのに苦戦していた人が多かったと思う。ただ、この苦しみ抜いたグローバル・ハイスクール・サミットは絶対無駄じゃない。確かに今回のグローバル・ハイスクール・サミット フィナーレは最下位で結果はでなかつたけど、今回流した汗と涙は、誰よりも輝き、夢を掴める日がきっと、いや、必ず来る。

みんなの夢は壮大なものが多いと思う。そんな夢を叶えるには、想像もしないような課題にぶつかることが絶対にある。そんなとき、思い出して欲しい。夢は、簡単に叶えられないから夢なのです。いろんな課題を乗り越えて、ようやく掴めるものが夢なのです。大した苦労もせず、辿り着いたものは夢じゃない。どんなに暗いトンネルの先にも必ず光が待っています。どんなに分厚く高い困難な壁が待っていても、その壁に先には、夢という名の光が差しています。夢を掴めるその日まで、少しでいい、1ミリでもいいから、毎日前進していきましょう。継続は力なりです。

このリーダー塾最終日に、私からみんなに伝えたいことがあります。「人生必笑」という言葉です。必ず笑うで必笑です。これから私たちの人生はマハティール先生のように100年続きます。100年もあれば、どんなに悩んでも解決策が見つからないような状態に陥ることが必ずあります。そんな時、根拠のある自信は必ず崩れます。「根拠のある自信を持つな」と言いたいのではありません。根拠のない自信をもつことも大事だと言いたいのです。笑顔を絶やさずにいると、どんなに追い込まれた状況でも、不思議と自信が出てきます。その自信には根拠がないのだから、崩れるはずがありません。崩れない自信を持てるって、最強じゃないですか？だから皆さん、どんな状況に陥っても、笑顔を絶やさず、必笑で人生を生き抜きましょう。

最後になりましたが、私たちのためにリーダー塾の用意をしてくださった事務局の皆様、関係者の皆様、本当にありがとうございました。今まで体験したことがないほど中身の詰まった12日間でした。さようならとは言いません。またどこかで会いましょう。夢を掴んだその日に。

## ■塾を通して成長したこと（主な内容を抜粋）

進路が曖昧になってしまったが、将来のことを考えたら慎重に夢を選べるきっかけになったと思うのでリーダー塾に参加してよかったです。このように考えられるのもネガティブな考えをポジティブ思考に変えられる力がリーダー塾を通して身についたからだと思います。また、私は人の目を気にしてしまうタイプでしたが、今では人前で恥をかいてあまり気にしなくなり、成長を感じました。

意見を言えるようになったのが大きな一歩でした。人前に立って発表するのが大の苦手だった私にとって、本当に成長できた瞬間でした。これはクラス担任、塾生、学生リーダーの皆さん、事務局の方々に支えられたおかげで成長できました。リーダー塾での目標であった「自分の殻を破る」ことが達成できて嬉しかったです。また、生活スキルを身につけられました。当たり前のことをちゃんとわきまえて、一日一日を過ごすことができました。

塾生のみんなと話をして、私の知らないところで、私と同じくらいの歳の子が、様々な活動をしていることに気づき驚いた。私たちの年齢では大変そうだと避けてきたことに対して、みんなが精一杯に取り組んでいるのを知り、自分の今までの視野の狭さに気づいた。そのため、リーダー塾で大きく変わったのは、視野が広がったことだと思う。将来の夢についても、デザイン系、とかいうあやふやなイメージしかなかつたけれど、いくつか具体的なものを持った。視野が広がり、可能性も大きく広がったと思う。

私はこの12日間「いい人」にならないようにした。学校では頼まれたことは何でも引き受け、自分の意見をあまり言わない。それを変えたくて、リーダー塾では自分の気持ちをそのままぶつけた。だからこそ、グローバル・ハイスクール・サミットでぶつかったり、涙が出たりした時もあった。しかし、本気で自分と向き合うことができた。「あ、私ってこんなにはっきり意見を言えるんだ」そう感じたことが何度も

あった。講義後の質問もできた。普段、少し苦手だと思うことに挑戦した12日間だったが、そのおかげで私の知らなかった私に出会え、私自身に可能性を感じた。

今までの自分なら嫌なことはなかなか手を付けず、ギリギリまではほったらかし、適当に済ませていた。自分のことだけで精一杯で世界の問題より自分のことばかりであった。でもリーダー塾に参加して、リーダー（大人）になるということは世界の問題に真摯に取り組み、昨日よりも今日がより良い世界になるよう取り組まなければいけないということが分かった。平和になればいいよねと願うだけでなく、行動しなければならないと思う。

まず自分で自覚できるほど大きな変化があったと思うのは、自分の他人への接し方です。最近ではとても社交的になれているのではないかと思います。リーダー塾に参加する前は喋れていなかったクラスメイトとも気軽に話すことができるようになりました。また、文化祭準備期間に自然とクラスをまとめる役割にまわっていたことが、自分にとって大きな進歩だったように感じています。以前はごく少数の人間しか信頼せず自らコミュニティを狭めていましたが、色々な人と交流するようになってから意外と気があつたり喋っていて楽しいと感じたりすることが増えて、今はとても充実している毎日を送っています。

#### （4）今後の課題

このように、今年度の塾生には数多くの良い面が見られた一方で、改善の余地も存在した。事務局は、12日間を通じて「体調管理の徹底」を最も重視し、「食べる・飲む・寝る」という基本を大切にするよう指導を続けた。最大でも22時30分にはプログラムを終え、消灯時間は原則23時であったが、中には時間を過ぎても電気をついている者や朝6時50分の点呼より不必要に早く起きて物音を立て、他の塾生を起こしてしまう者も見られた。事務局は、初日から連日全体に向けて指導を行い、後半にかけて改善は見られたものの、最終的には各自の自覚と自治の意識が問われる部分であり、今後の課題であると感じた。

また、講義開始前の「5分前着席・静肅」の約束についても、徹底できなかった。特に中盤以降、気持ちが高ぶる場面では静かに待機することが難しい様子も見られた。こうした点については、塾生一人ひとりが広い視野を持ち、「今は何の時間なのか」を意識して行動できるようになることが今後の成長につながるだろう。学校生活とは異なる集団生活の場であり、一人の行動が全体に影響するという責任を理解し、社会の一員としての自覚を高めていくことを期待したい。

12日間という限られた時間の中で、日本全国、さらには海外から集った仲間たちと寝食を共にし、社会人・大学生のスタッフ、講師の先生方など、多様な大人と関わる中で得た経験やつながりは、今後の人生において大きな財産になるだろう。リーダー塾はあくまで「きっかけ」にすぎない。この塾での経験を「よかったです」にとどめることなく、この後の人生で何をし、どんな挑戦をしていくかが最も重要である。そのことを胸に刻み、それぞれの舞台で力強く歩んでいってほしいと心から願っている。

#### ■スタッフから見た塾生の課題（主な内容を抜粋）

集団行動においてスタッフが指導したことに「はい！」と言って返事をするのは非常に好感が持てる一方、返事をすることへの意識が強く、内容をきちんと把握していないことにより自らで考えられていない場面が多かった。

生活態度や日々の行動においては高校生らしい幼さが残る場面も多く、時間管理が上手く出来ていなかったり、集団生活の中でのマナーをやや軽視していたりと、まだまだ成長していってほしいと思う場面も多々あった。

コロナ禍の影響もあり警戒心が強く、また自己開示に慎重な印象を持った。思考のパターンにはなると思いますが、「答え」を求める高校生が増えている印象でした。グローバル・ハイスクール・サミットの本質的な部分（自分たちらしさ、高校生の立場から問題提起を行う）への軌道修正が過去の担任時以上に必要になっていると感じる。

お互いのことを尊重できていた点は非常に良かったのですが、全体の場で頭一つ抜けていたり、目立つ塾生があまりいませんでした。リーダーではなくても大勢の人の前にでる機会は何度もあるので、どんどんチャレンジして積極的にみんなを引っ張る立場になってほしいです。

## 卒塾後の活動

卒塾後、例年 IN・COM 株式会社・大嶽一省様のご厚意で塾生はオリジナルネッピーをデザインし、缶バッジにしていただいている。大嶽様のご厚意に深くお礼申し上げたい。

卒塾後の10月には、塾生、保護者、学校の担任の先生に事後アンケートを実施した。塾生本人にはリーダー塾での経験を振り返ってもらい、保護者と担任の先生方には塾生の参加後の様子を第三者の目線から見ていただいた。塾生の成長や変化を様々な角度から知ることにより、卒塾生のフォローアップや、より魅力ある塾運営のために役立てることが狙いである。(資料①～②参照)

ここでは、塾生への事後アンケートから「卒塾後の活動」を一部紹介する。卒塾してすぐに活動している塾生も多く、行動力には目を見張るものがある。卒塾生達は今、全国各地で目の前にある課題をしっかりと捉え、自分の出来ることから挑戦を行なっている。今後も事務局は、卒塾生の活動を出来る限りサポートしていきたい。

### 【学生団体・ボランティア】

以前から立ち上げていた任意団体 Think で「ピースフラッグプロジェクト」を企画しています。12月に実施予定です。以下概要です。「ピースフラッグプロジェクト」は、主に九州出身の小学校高学年から高校生までを対象としたオンライン・ワークショップ型企画。歴史的に国際交流や平和への関わりが深い九州の若者が平和についての考えを深め、視野を広げられるプロジェクトとなればと考えています。

静岡の学生団体での活動や、企業アントレプレナーシップのプログラムへの参加を通じて、現在もさまざまな学びを得ています。学生団体では仲間とともに地域課題に取り組みながら、協働やリーダーシップの重要性を実感しています。アントレプレナーシップの活動では、自ら課題を発見し解決策を考える力を鍛えています。さらに、これから参加予定の NHK 「18祭」では、自分の思いや経験を全国の同世代と分かち合えることを楽しみにしています。

今後、留学を進学の手段とする人を増やすために、新しい留学コミュニティを作ることを決めました。

リーダー塾のクラスメイトと一緒に、世界の平和を目的とした「世界の高校生を集め、平和について考える場を作る」という活動を目指している。グローバル・ハイスクール・サミットで5組が発表した「今日とも」の概要とほぼ同じです。現在、その活動について固めている最中です。

私は県内の認知症カフェをよりよいものにするための活動を予定しています。学校の医療研究会では、認知症カフェをディスカッションの議題として取り上げ、高齢者やその家族に寄り添えるようなアイデアを考えます。認知症カフェには民営と市営の違いがあり、さらに市町村によって割合も異なるため、静岡県、そして日本全体の認知症カフェをより良くしていくために何ができるかを考え、実践していきます。その一環として、実際に周辺の市町の認知症カフェを訪問し現状を学びます。

5組で GLOBE という学生団体を設立しました。平和を求める全世界の高校生たちをもとに、英語でディスカッションをするちょっとした留学プログラムです。

### 【学校活動】

大きな活動はできていませんが、さっそく興味を持てた政治や国際関係学について調べています。またリーダー塾に参加して自分の中でのやりたいことが大きく変わってきたのでそれに合わせて自分の志望大学を検討している最中です。

NPO 法人生徒会活動振興会の協力のもと、石川県下の高校生の生徒会活動の活発化のため、石川県に生徒会連盟を立ち上げるプロジェクトを進めている。また、自校の生徒会活動の活発化、宣伝、生徒会連盟の基礎構築のために、星稜高校主催で石川県生徒会交流会を開催することを考えている。

体育祭で生徒会の活動があったので、みんなに指示を出したり、みんなの意見を一旦聞いてどう動いたら良いかをみんなで確認し、自分が何をすべきかを把握してもらうことができた。生徒会は10月いっぱいで終わるので、それまでしっかりと学校全体に目を向けて、意見交換をたくさんしていきます。

学校の探究活動の一環で、市役所で市長を含む方々に事業企画のプレゼンをして、事業の開催にあたる多額の補助金を獲得した。計画している事業は12月頃に開催する予定である。

大学在学時に海洋環境問題に対する学生団体を建てたいと考えています。また、マリンスポーツでは10月12日に行われる日本代表選手権でいい結果を残して国際大会や2028年のロスオリンピックにつなげたいと考えています。

高2でも引き続き文化祭実行委員として尽力する予定なので、勉強との両立も行いながらリーダー塾で得たものを忘れずに来年に活かしていきたいと思います。私の学校では文化祭に参加する学年の中での最高学年は高2でよりリーダーとして活躍する機会が増えるのでとても楽しみです。活動自体は10月からまた始まくるので、頑張ります。

部活動で行う劇のSetというセクションでリーダーをした。昨年は（留学の関係で1年休学している）この劇のディレクターを行っていたため、どのように劇に関わるかを熟考した。私はSetのリーダーだったので、去年苦戦した、1年生の士気上げに重きを置いた。私自身が手を抜かず、自分のセクションを褒めることで、士気が下がったタイミングを上手く持ち直せたと思う。

## 【その他】

リーダー塾1週間後、アメリカに留学に行ったのですが、アメリカ人は戦争のことをどう捉えているのか、戦時の過ちをどう思っているのかということを現地の人に沢山質問しました。驚いたことは、戦時米軍が日本に投下した原子爆弾は、本当によくない決断だったという考え方の人が沢山いたことです。この答えを聞いた時、被団協の方々の活動が世界中の人に届いているのだと思いとても嬉しく思いました。この経験から、やはり自分の国の過ちや戦争の悲惨さを発信していくかななければいけないと思ったと同時に、沢山の国に行ってその国の視点から見ることが大切だということに改めて気付かされました。

現在、語学留学でセブ島に短期留学をしています。現地の高校生との交流などはありませんが、文化や考え方の違いなどリーダー塾で培った力で現地で関係性を広げています。帰国後は学びの良さを生徒に広めたいです。学校の勉強ではなく、趣味などで自然と行う勉強を意識的に他の物に転じる事を知ってほしいです。

現在、リーダー塾での同期4人と共に自分の理念である「人類を進化させる」という言葉を掲げながら会社の設立に邁進している。その会社の最初のプロダクトとして、現在の人間がAIに頼り切ってしまっているといった問題を解決する為に、あくまで人間の思考を「助長」するAIであるFacilitatorといったAI開発に励んでいる。また、リーダー塾の他のメンバーの作ったNPO団体の設営プロジェクトに参加し、その中のメンバーとして教育とDXを掛け合わせたものを実現する為にプログラミング技術の提供を行っている。

今後地域のポイ捨てゴミ削減を目指したいです。そのためにまずポスターを作成したり、周辺の小中高学校を巻き込んで、年一の地域清掃の参加と講話を聞いて、現状をまず知ってもらう活動を行いたいです。その活動を行うために、まず私自身が色々な地区的地域清掃に参加と、地区のボランティア団体に入ろうと思います。

## 7. 塾を支えるスタッフ

リーダー塾では、開塾当初から社会人によるクラス担任制度をとっています。狙いは、高校生に学校の先生ではない企業などで経験を積む社会人を身近に感じて欲しいためである。前半7月28日～8月2日(6日間)、後半8月2日～8月8日(7日間)の日程で各クラスに1名ずつ受け持っていただいた。(6クラス・計12名) 例年、協賛企業などが派遣してくださっている。20代～50代までの年齢も職種も多種多様な総勢12名の社会の方々に、合宿形式で指導していただくことに加えて、療養中の塾生にはオンライン形式でも指導していただき、塾運営を支えていただいた。クラス担任は、日々の講義や議論、クラスの指導だけでなく、塾生の人生相談など様々な相談にも親身に乗っていただいている塾の要の存在である。



▲クラス担任の引き継ぎの様子



▲初日受付の様子

クラス運営を支える学生リーダーは、主に卒塾生からなる大学生・大学院生が参加している。各クラス2名と総括1名の計13名の学生リーダーを配置した。高校生である塾生にとって、年齢も近く、すぐ先のロールモデルとして身近な存在である。黙々と業務をこなす学生リーダーに、塾生は尊敬と憧れの気持ちを持っていた。学生リーダーは塾を円滑に運営するための重要な縁の下の存在もある。

今年も塾開始前からクラス担任・学生リーダーには多くのサポートをいただいた。例年通り、福岡のグローバルアリーナで6月末に事前研修を開催し、遠方のスタッフにはリアルタイムのオンラインで研修を実施した。また塾開催前から自主的にクラス運営についてクラス担任と学生リーダーでオンラインミーティングを積極的に企画し、塾生の指導方針などを共有していただいた。

塾本番でも、療養者へのオンライン配信や食事の準備、レイアウトの設営、塾生との交換日記など多くの場面で献身的にご協力いただいた。塾を支えてくださった皆さまには、改めて深く御礼申し上げたい。

また、看護師の右山綾子さん(全日程)、神田由美さん(前半)、藤谷拓也さん(後半)には、体調不良の塾生への対応をはじめ、コロナ療養中の塾生への細やかなサポート、怪我の処置、病院への付き添いなど、多岐にわたる場面でご尽力いただいた。塾生一人ひとりに寄り添ったメンタルケアや、スタッフとの日々のコミュニケーションを通じて生まれた温かなつながりは、塾の安心・安全を支える大きな力となった。

グローバルアリーナの皆様には、塾開始前から宿泊・会場・設備等の調整、バス手配、体調不良者の食事対応など、学びの場をより良いものにするための全面的なバックアップをいただいた。日々の運営が滞りなく進んだのは、皆様の細やかなご配慮のおかげである。

さらに、講師の送迎や式典準備をサポートしてくださった福岡県庁の皆様、物品や機材の貸出、式典準備をサポートしてくださった宗像市役所の皆様にも、深く御礼申し上げたい。

また、参画自治体の皆様には、塾生の選考、高校への周知、事前研修や報告会の開催など、年間を通してリーダー塾を支えていただいている。募集から運営まで、多方面におけるご協力がなければ今年の開催は成し得なかった。

そして、見えないところでご協力いただいた全ての関係者の皆様に、改めて心より感謝申し上げたい。

## ■クラス担任とのエピソード

グローバル・ハイスクール・サミットでつまずいていたとき、私たちの現状や今何をすべきかを整理して説明する時間を設けてもらった。そのおかげで、クラス全体が状況を理解し、次に取り組むべきことが明確になったことで、一気に士気が上がった。みんなが同じ目標を意識して行動できるようになり、協力して課題に取り組む雰囲気が生まれた。この経験は、クラス担任のサポートによってチームの力が大きく変わることを実感した貴重な思い出となった。

前半の担任の先生とのお別れの前日に、点呼のあとでクラスのみんなと写真を撮ったことが特に思い出深いです。その日までの活動を振り返りながら、笑顔で写真を撮る中、先生もみんなも泣かないようにしていましたが、少し泣きそうになっていて可愛らしかったです。写真を撮る瞬間には笑い声もありましたが、別れの寂しさを改めて実感し、仲間や先生との日々の大切さを強く感じました。温かさと切なさが入り混じった、心に深く残るかけがえのない瞬間になりました。

グローバル・ハイスクール・サミットの最終発表でクラスの少しが燃え尽き症候群になっていて頑張れていなくて困っていた時に、先生が相談に乗ってくださって、困っているだけではどうしようもないこと、行動をする必要があるなどアドバイスを下さり、とても心強かったのとありがたかったです。

前半の担任の先生とはあまり深く関わなかったことが心残りです。先生が提案してくださいました交換日記も、やってみたいと思いながらも結局言い出せず、後悔が残っています。しかし、最後にいただいた手紙には先生の愛がこもっており、短い時間でしたが、かけがえのない思い出になりました。後半の担任の先生は、最終日の夜にずっと抱えていた不安を相談したところ、真摯に話を聞いてくださった上で、とてもありがとうございましたアドバイスをいただけました。リーダー塾の中でも、かなり強く心に残る出来事です。

クラス担任とTシャツにお互いの名前を書き合うという体験は、とても温かく心に残る思い出になりました。名前を書くという小さな行為の中に、感謝や絆が込められていて、担任の先生との距離がぐっと近づいたように感じました。

僕はグローバル・ハイスクール・サミットで毎回6組のトリをしていたのですが、前半の先生にも後半の先生にも「締めがよかった」「やるときはやる男」と言われて、すごく自信になったのを覚えています。それまで僕はどちらかというとつなぎ役であり目立つことはなく、目立っても悪目立ちすることばかりだったので、本当にうれしかったです。学校でもプレゼンをすることがあります、リーダー塾のように自信をもって話すことを心掛けています。

## ■学生リーダーとのエピソード

クラスの学生リーダーは、海外大学を自分自身が目指そうとしており、まさに自分の目指すべき存在であった。キャリア教育などを通して海外大学について色々なことを聞くことができ、とても感謝している。

クラスの学生リーダーが、HRの時間に自分の人生や考え方について語ってくれた時がとても印象的だった。高校生活を送ってきて人生を振り返った時に、自分を変えようとして海外の大学の進学を選ぶことが、私にとっては衝撃的だった。私は、日本の大学しか考えていなかったので、視野の広さに感激した。また、自分の将来の理想像を確立し、今やりたいことをするという姿も印象深かった。

学生リーダーから「他責思考が強すぎる」と指摘されたことが強く印象に残っています。経済の例を通して、「自分がやらなくても誰かがやる」という考え方では社会は変わらず、逆に「自分が変える」という意識こそが社会を動かすのだと教わりました。これまで私は責任を周囲に押しつけがちでしたが、その言葉を受け、自分の行動や選択に責任を持ち、“自分ごと”として捉える姿勢が大切だと強く実感しました。

議論がうまく進まないとき、学生リーダーは常に冷静に状況を見て的確なアドバイスをしてくれました。その言葉で場が整理され、私も自分の考えを自信を持って発言できるようになりました。学生リーダーの存在があったからこそ、クラス全体の話し合いが深まり、互いに成長できたと思います。

自分の今後の目標について学生リーダーに聞いてもらったことで、漠然としていた将来のビジョンが少しずつ形になりました。真剣に耳を傾け、励ましの言葉をもらえたことで、自信がつき、前向きに挑戦しようという意欲が湧きました。

クラス全員で意見がまとまらず悩んでいたとき、学生リーダーが「一度全員の意見をホワイトボードに書き出そう」と提案してくれたことです。焦っていた私たちに「完璧じゃなくていいよ。大切なのは全員で考えること」と声をかけてくれて、場の空気が一気に明るくなりました。そのおかげでみんなが安心して意見を出し合えるようになり、最終的に良いまとめてたどり着けました。冷静さと優しさ、そして人を動かす言葉の力を間近で感じ、自分もそんな存在になりたいと思いました。

## ■事務局とのエピソード

模造紙を忘れてしまい、事務局の方にも迷惑をかけてしまったことで、自分の責任の重さを痛感しました。チームメンバーだけでなく、全体の進行に関わる人たちにまで影響が及ぶことを学び、準備の大切さを強く感じました。注意の後は、挽回するために積極的に動き、クラス一丸となって模造紙を完成することができました。この経験から、責任感を持って行動することの重要さを改めて実感しました。

事務局の方々にはたくさん叱っていただきました。他の人への敬意、感謝の気持ちを常にもつこと、自分の行動や発言に責任をもつことなど、次世代リーダーとしても、1人の人間としても大切にしていかなければならないことをたくさん学びました。

時には厳しい指導が続くこともあったが、12日間という限られた時間の中で、私たち一人ひとりの意見や考えを丁寧に引き出し、挑戦する姿勢を育ててくださった。そのおかげで、自分の成長を強く実感でき、仲間と協力する力や考えを整理して伝える力も身についた。何より、学ぶ楽しさや仲間と支え合う大切な大きさを実感できたことに深く感謝している。

12日間ずっと私たちに真っ直ぐ向き合ってくださったことが心に残っている。高校生になって自分の行動は自分で決め改善していくことが多くなったため、楽な方に逃げることが癖になっていた。しかし、スタッフの方々がリーダー塾期間中は常に私たちを大人として見て、責任が足りていない部分や大人として改善すべき行動を指摘し続けてくださったことで、逃げずに自分と向き合い自分が改善すべきことの具体的な方法を考えることができた。このように、12日間で大きく成長できたのは私たちが何度も失敗しても向き合い続けてくださったからだと思う。

マハティール元首相の前での発表に、登壇する直前まですごく緊張していましたが、私が意を決して「行きます」と答えた時、あたたかく「頑張れ」と送り出してくださったのは、すごく心の支えになりました。また発表の後も、「よかったよ」とグーパンチをしに来てくださいり、すごくうれしかったです。

## ■看護師とのエピソード

看護師さんにはたくさんお世話になり、病院にも連れて行っていただきありがとうございました。現場で働いていた時代にたくさんの奇跡を見てきた、だからあなたの病気も大丈夫よという風に言ってもらえてとても安心しました。

最新の医療器具について詳しい説明を受け、医療工学の進歩とその現場での活用の広がりを実感した。

私が体調的にもメンタル的にもちょっと落ち込んでいたときに、看護師さんにいろいろ話を聞いてもらったり、話をしてもらったりして気持ちを整理することができ、落ち着けた。また、メンタル的な部分でいろいろ配慮していただき、最後まで気持ちよく過ごせました。

## クラス担任

### (1) 概要

クラス担任は、協賛企業のリーダー格社員や活躍されているリーダー塾の卒塾生、有志の社会人の方に担当いただき、安心して塾生をお任せしている。今年の企業・機関は、下記の通り。

#### ■クラス担任の企業・機関（五十音順）

エコー電子工業株式会社	株式会社ふくや	サッポロビール株式会社
学校法人麻生塾	株式会社ミズ	長瀬産業株式会社
九州電力株式会社	株式会社戦国	happy homing
株式会社 BS 朝日	株式会社正興電機製作所	ヒューマンリンク株式会社

本年度は、計12名の社会人の皆様に、1クラス25名、全6クラスの塾生指導を前半6日間・後半6日間の2期間に分けて担当していただきました。6月には、グローバルアリーナおよびオンラインのハイブリッド形式で事前研修を実施し、事務局よりリーダー塾の理念や特徴、また塾期間中のクラス担任としての具体的な役割について共有した。

クラス担任の皆様には、「答えを与えるのではなく塾生自身が考え行動する力を引き出す」という本塾の基本方針を踏まえた指導をお願いしていました。グローバル・ハイスクール・サミット等の主要プログラムにおいても、あえて一步引き、塾生が自ら議論し、結論を導く場づくりにご協力いただいた。

一方で、塾生の看過できない行動や、議論すべき問題が発生した際には、一人の大人として真摯かつ厳正に向き合い、社会の基準を示す指導も併せて行っていただいた。社会で活躍されている皆様だからこそ、塾生にとって学校とは異なる新たな指標となり、その助言や指導は強く心に響いたものと思う。

また、担任の皆様にはクラス運営のみならず、裏方としても多方面で支えていただいた。講師アテンド、体調不良者対応、プログラム間の設営・撤収、さらには療養へのオンライン配信対応など、多岐にわたるご協力を頂戴した。加えて、塾生と寝食を共にしながら、時に厳しく、時に温かく、言葉だけでなく背中で示す指導をしていただいたことに、深く感謝申し上げたい。

学生リーダーとも密に連携していただき、クラス運営の方向性の相談や、独自に取り入れている日記・振り返りシートへのコメント記入など、塾生の成長を第一に考えた取り組みを随所で実践してくださった。さらに、塾終了後も進路相談等で塾生とつながり続けてくださっており、継続的な伴走に心より御礼申し上げたい。

酷暑の中での6日間は、体力的にも精神的にも大変厳しい環境であったと思う。そのような状況でも変わらぬ熱意と献身で塾生の成長を支えていただいたことに、改めて深く感謝申し上げる。クラス担任の皆様には、今後も塾生との関係を大切に育んでいただき、10年・20年の長い時間軸で、一人ひとりの人生を見守っていただきたい。いずれ時が経ち、教え子たちと共に杯を交わせるような、温かい関係へと繋がっていくことを願っている。



▲全体で自己紹介をする様子



▲担任交代式の様子



▲塾生と集合写真を撮るの様子



▲キャリア教育の様子

## (2) クラス担任の感想

### ■クラス担任からみた塾生の感想

事前に担当する塾生の志望動機を確認した際に、世の中や自分自身を客観的に捉えられており、非常にレベルが高いと感じていたが、実際に接してみると、思考の深さや知識力は確かに高い一方で、高校生らしいあどけなさも残っていると感じた。今回の塾生は、リーダーとしてさらに成長したいと考える生徒と、自分の殻を破るために挑戦している生徒の2つのタイプに分かれていたと感じる。それぞれ異なる課題や葛藤を抱えていたと思うが、共通して成長しようという強い意志を感じられ、こちらも多く学びを得ることができた。

体調を崩す塾生も見受けられたが、集団生活に伴う環境の変化に対応しきれていない部分が多く、日々過ごす中で自己解決を図ろうとしている姿勢も垣間見られた。総じて、イメージ通りの塾生たちの姿ではあったものの、現代社会を生きる高校生らしさを随所に感じることとなった。

知識が深く、考察力も行動力も高い高校生が多かった。見通しが甘く、時間にルーズになりがちなところはあったものの、これから経験を積んでもっと成長していくんだろうなと感じた。

### ■クラス担任の指導方針、クラス運営

指導ではなく、「コーチング」をするように心がけていました。クラスにはとがったリーダーがおらず、グローバル・ハイスクール・サミット等では特に困った印象でした。一度課題に気づくと、解決策を考えられるクラスではあったので、クラスをまとめ上げ、引っ張ってくれる「圧倒的リーダー」が欲しかったというのが正直な所です。

毎年、「答えを言わず、考えさせる」「聞かれるまで待つ」という姿勢を大切にしている。塾生自身が課題に向き合い、主体的に考える力を育むことを意識している。今年は、交換ノートを塾生の自主性に任せたところ、約5分の1の塾生が賛同してくれた。本来であれば、全員に書いてもらい、個々とゆっくりコミュニケーションを取る機会として活用したかった。

日々の生活の中で足りていない、あるいは望ましくないと思ったことをストレートに表現するのではなく、そこにどのような問題点があるのか、何を意識してほしいのかを伝えることで、塾生たち自身の力で課題解決を促すようにした。過去には、じっくりと見守り敢えて何も言わないことで塾生自らの成長に期待した部分もあったが、一人の大人としてポイントを示すことが、彼らのより深い学びや成長につながるのではという思いもあり、今回は極力「気付き」を与えられるように考えた。積極的な塾生が非常に多く、日々の生活やクラスでの活動、あるいは進路など、様々なことに対して「アドバイス」を求められたが、直接的に何かを伝えるのではなく、彼らが私の言葉を振り返ることで進むべき道に近づけるような言葉がけを意識した。

指導にあたって意識していたのは、あくまで関係性は「担任」と「生徒」であるという線引きを明確に保つことです。そのうえで、日々の成長や良かった行動を具体的な言葉で本人に伝え、勇気づけを意識したフィードバックを行っていました。参考にしていたのはアドラー心理学の考え方で、「できている点」に焦点を当てて承認することで、主体的な行動が増えるよう働きかけていました。

### ■クラス担任を務めた感想

若手の育成なども、会社で行っていますが、答えを教えずに考える機会を与えるということを全く考えてていなかったなど、改めて感じました。質問に対して、答えることは簡単ですシムーズに業務がすすむのですが、教えられた側が理解していないと意味がないなど。それは結果として、単なる作業になってしまい、なぜそのプロセスをしているのか分からぬなどなくやっている、昔からしているから、といった思考停止スパイラルに陥ることもあるのでは、と気づきました。

日ごろ会社員として、上司・先輩、部下・後輩、取引先の方々など多くの人々と関わっているが、普段学校の教員でもない私が高校生たちを担当し、クラスの一員として関わっていくことは、本当に素晴らしい経験と出会いを得ることができたと感じている。同じ組織に属していれば、その中の常識や考え方、思考にとらわれる部分も大きいあるが、バックボーンも問題意識も全く異なる塾生たちと日々向き合うことは、私自身ももっと学び、彼らと切磋琢磨して生きていきたいと強く思うきっかけとなった。

短期間だったが間近で見ながら刻一刻と成長していることをヒシヒシと感じた。子どもはいないけど、この成長を見守る親の気持ちはこのような感じかと思った。グローバル・ハイスクール・サミットでは自分がよく知らなかった世界の紛争や分断を知り、改めて多様な視点で物事を捉えることの大切さを感じた。

特に2点学びました。第一に、高校生の自主性を信じて任せることの重要性です。助言したくなる場面でもあえて見守ることで、高校生同士が支え合い、自ら判断し行動する姿が生まれ、これ自体が成長のサイクルになると実感しました。第二に、教育業界で働く意義の再認識です。将来や教育への思いを語る高校生の姿に触れ、成長や夢の実現に貢献できる環境をつくりたいと改めて感じました。今後は担当業務の新卒社員の育成においても、この経験を踏まえ、一人ひとりの自主性を尊重した支援・指導を行い、育成計画や支援体制の改善に活かしていきたいと考えています。

高校生たちの自主性を尊重することを意識するあまり、どこまで介入すべきか判断に迷う場面も多くあった。アプローチについての反省点も少なくないが、自分自身の殻を破り、行動する塾生の姿を見て、私自身多くの学びと示唆を得ることができた。

私はリーダー塾に自身の経験が少しでも塾生のヒントになればという思いで参加しているが、実際には塾生、学生リーダー、クラス担任の皆さんから多くの気づきや学び、刺激、そして元気をいただいている。感謝の気持ちでいっぱいである。体力的にはハードな面もあるが、心のリフレッシュにもなっており、毎年楽しみである。

### 3) 評価点、課題

クラス担任の皆様には、塾生の成長と塾全体の運営において非常に重要な役割を果たしていただいた。塾生一人ひとりに寄り添い、指導や助言を行っていただいたことで、塾生にとっての良きロールモデルとなり、多くの塾生がクラス担任の背中を追いかけたいと感じる存在であった。塾生の自主性を尊重したクラス運営や主体的なディスカッションを促す取り組みにも事務局の趣旨を理解し、ご協力いただいた。

学生リーダーとの連携、絆も強固であった。クラス運営や塾生についての考えを共有し、塾生のために自主企画の振り返りシートなどで悩みに耳を傾け、必要な助言を行っていただいた。

また、送迎やトラブル対応といった運営面でのサポートから、体調不良者へのハイブリッド対応に至るまで、さまざまな場面で迅速かつ的確に行動していただいた。

塾後も塾生との交流を続け、進路相談に応じるなど、長期的な関わりを持つ姿勢は、塾生にとって人生の指針を得る貴重な機会となっている。

総じて、クラス担任の皆様の活動は、リーダー塾の成功に欠かせないものであり、その情熱と献身に深く感謝したい。

# 学生リーダー

## (1) 概要

学生リーダーは、卒塾生の大学生・大学院生を中心に、毎年公募により選考しています。全期間を通して参加し、塾生のサポートに加え、クラス運営や全体運営の補助など、運営の中核を担っていただいている。応募は毎年定員を上回るため、書類選考、オンライン面接を実施し、学生リーダーを決定している。なお、応募資格として「卒塾生であること」は必須ではない。高校生の時にリーダー塾へ参加していなくても、大学生・大学院生になってから運営に携わりたいという志を持つ方の応募も多く、実際に卒塾生以外の方が学生リーダーとして参加するケースも毎年ある。

### ■学生リーダーの所属大学/卒塾期（五十音順）

国内		海外
大阪公立大学(16期)	日本女子大学(非卒塾生)	Aberystwyth University(19期)
京都大学(16期)	明治大学(非卒塾生)	Orange Coast College(18期)
慶應義塾大学(非卒塾生)	横浜市立大学(非卒塾生)	Denison University(18期)
同志社大学(18期)	立命館アジア太平洋大学(15期)	University of Manchester(19期)
東洋大学(16期)		

本年度は、計13名の大学生にご参加いただき、クラス担当および全体統括に分かれて、学生リーダーとして12日間にわたり塾の運営を支えていただいた。6月に実施した事前研修では、クラス担当と全体統括それぞれの役割の違いや、具体的な業務内容について事務局より説明を行い、共通の理解を持って期間に臨んでいただいた。

学生リーダーの皆様には、塾生の数年先を歩む“身近な先輩”として、かっこいい背中を示すことを特に期待している。自身の言動に責任を持ち、期間中は模範となる姿勢を貫くと同時に、向き合うべき課題には厳しく寄り添う存在として、重要な役割を担っていただいた。

クラス担当の学生リーダーは、事務局とクラスのパイプ役として、伝達事項の共有、クラス担任との連携、独自の取り組みや振り返りシート、ホームルーム運営など、日常のクラス運営を支えていただいた。一方、全体統括の皆様には、会場設営、次プログラムの準備、荷物運び、運営資料の管理など、塾全体を支える裏方業務に幅広くご協力いただいた。

また一部の東京周辺の学生リーダーには、塾の前後にアルバイトとして事務局業務にも携わっていただいた。書類整理、発送物準備、備品確認、荷物運搬など、塾運営の基盤となる多くの事務作業を丁寧かつ確実にサポートしていただいたことにも、この場を借りて深く感謝申し上げたい。さらに、開催3日前よりグローバルアリーナに入り、会場準備・設営を行ってくださった方もいた。塾終了後の撤収・片付けにも最後までご協力いただき、運営に欠かせない存在であった。

学生リーダーには各自のキャリアや大学生活、またリーダー塾卒塾生である方々には卒塾後の経験について塾生に共有していただき、身近なロー



▲業務の様子



▲業務の様子



▲審査員を務める様子



▲前夜祭を楽しむ学生リーダー

ルモデルとして大きな刺激を与えていただいた。「大学とはどんな場所か」という具体的なイメージを塾生に届ける貴重な機会になった。

塾終了後も、塾生から寄せられる進路相談に継続して応え、学生リーダー一同士が大学の枠を超えたコミュニティを形成し、定期的に集まるなど、素晴らしいネットワークに発展していることも大変心強く感じている。

また、学生リーダー全体を束ね、事務局との調整役を務めた「全体総括」については、リーダー塾での経験が豊富な学生リーダーに担当していただいた。重責の中で12日間、多岐にわたる調整・管理業務を見事に遂行していただいた。

期間中、学生リーダーには、体調不良者の対応、講義サポート、裏方としての技術・設営作業など、多方面で力を発揮していただいた。大学2年生から4年生まで年齢も背景も異なる中で、互いに壁を作らず、一つのチームとして、そしてクラス担任や事務局とも協力しながら、「より良い塾を創る」という共通の目標に向けて取り組んでくださった姿勢は、非常に評価すべき点であった。

多忙な12日間を、文句ひとつ漏らさず、塾生の成長と塾全体の成功のために全力で支えてくださったことに、改めて深く御礼申し上げたい。

### (3) 学生リーダー感想

#### ■学生リーダーから見た塾生の感想

みんなとても真面目で、やるべきことはきちんとやる姿勢がありましたが、「情熱的に何かをやり切る」「全体を巻き込んで盛り上げる」といったエネルギーはやや控えめだったように感じました。前に立って全クラスを引っ張るような存在がもう少しいれば、さらに活気に満ちた雰囲気になったのではないかと思います。

自分自身（19期）、コロナ禍の真っただ中で高校生活を送った世代であることもあり、クラスの枠を越えて塾生同士や学生リーダー、さらには各担任の先生方と積極的にコミュニケーションを取ろうとする姿勢が見られた点は非常に印象的であり、好ましく感じた。また、その一体感や前向きな関わり方には、少なからず羨ましさを覚える部分もあった。一方で、選りすぐりの意識の高い高校生が集まっているとはいえ、時間に対するルーズさや共同生活における自覚の欠如など、まだ未熟さを感じる場面も多く見受けられた。こうした点は成長の過程として致し方ない部分もあるが、今後はリーダー塾生としての自覚と責任感をさらに磨いていってほしいと感じた。

最初は積極性を欠く部分や遠慮もあったが、味噌汁コンテストや宗像大社の見学など前半の大きなプログラムを通してクラスの学生の間でのコミュニケーションが活発になり、グローバル・ハイスクール・サミットなどの課題にも主体的に取り組む塾生が多かったと思う。またディスカッションの中でそれぞれの役割を発揮し、それぞれの力を活かせる場所で活かしている印象が大きかった。しかし、その分、ぶつかり合うことは少ない印象だった。今後は、チームで一つのことを作ることも大切だが、個人を尖らせて成長していってほしい。



▲学生リーダーの集合写真

#### ■学生リーダーの感想

自分が高校生としてリーダー塾に参加していた当時、学生リーダーは非常に身近でありながらもキラキラとした憧れの存在として映っていた。しかし、今回実際にその立場を経験してみて、想像以上に裏方としての役割が大きいことを実感した。頭では理解していたつもりでも、やはり実際に経験してみなければ分からぬことが多い、当時の学生リーダーたちがこのような多くの業務をこなしながらも、私たち塾生の前では常に理想の姿を示していたのだと改めて感じた。自分自身が今回、塾生たちにとってのような存在でいられたかどうかは分からぬけど、この12日間を通して多くの気づきと学びを得ることができた。

参加する前は、学生リーダーは主に裏方で作業を行い、クラスにはあまり深く関わらない立場だとイメージしていました。しかし、実際に参加してみると、学生リーダー=高校生が憧れるロールモデルとしての

側面がとても大きいことに気づきました。私たちが塾生と話したり、相談に乗ったりすることで、確かに何かしらの価値を届けられていたと思います。裏方として支えるだけでなく、「親しみやすい先輩」として塾生に寄り添う存在であることも、学生リーダーの大切な役割の一つなのだと実感しました。

参加前は、塾生を確固たる態度で導いていくことが「学生リーダーの役割」だと捉えていました。しかし実際に参加してみて、塾生が十分に能力を発揮し、望む成長を獲得できる環境を作る手伝いをするくらいの程度こそが求められるのではないかと考えるようになりました。何か問題が起きた際に、組織でその問題を見極め、組織内で解決・向き合っていくための適切なプロセスを踏み、話し合い、方法を改善していく一連のサイクルをいかに密度濃く塾生たちに経験してもらえるか、またそのサイクルのもとで活動するための心理的サポートまでが、私たち学生リーダーの役割だったのだと思います。

想定していたイメージと大きな乖離は無かったものの、自分が実際にどうやって塾生と関わればいいのかやリーダー塾そのものに関してどんな環境で具体的にどのように過ごすかが分からなかった。参加してから少しづつ雰囲気を掴むことが出来た。学生リーダーは塾生のことをサポートしつつ成長を促すという方向性は分かっていたが、想像よりも塾生主導で塾生自治を奨励していた。

### 3) 評価点、課題

学生リーダーの皆様には、塾生の成長はもとより、塾全体の運営に大きく貢献していただいた。特に学生リーダーは、全期間にわたるフル参加となり、体力的にも厳しい中での活動だったかと思う。その12日間、さらに前後の準備・片付け期間を含め、常に全力で塾生と向き合い、時に起こるトラブルにも臨機応変かつ迅速に対応していただいた。

また、荷物の移動など、決して楽ではない業務にも率先して取り組んでくださり、文句一つ言わず、快く引き受けてくださった皆様には感謝の念に堪えない。学生リーダーというコミュニティは、日本全国の大学から仲間が集い、学生リーダー同士にとってもかけがえのない出会いの場となっている。このつながりと絆を、ぜひこれからも大切にしていただきたい。

一方で、学生リーダーの皆さんとの課題というよりは、事務局側の課題として、事前の業務マニュアルのさらなる整備や説明の充実が必要であると感じた。当日、より不安なく業務に取り組んでいただけるよう、事前準備の体制を今後さらに強化していきたい。

また今年度は、中盤以降の疲労を軽減するため、2日交代で朝の時間をゆっくり休める「午前休制度」を導入しました。その効果もあり、例年と比べて疲労感が軽減されたとの評価もいただいている。この取り組みについては、来年度以降も継続できるよう、事務局として準備を進める。

学生リーダーの皆さんには、塾生にとって数年先を歩くお兄さん・お姉さんとして、これからもかっこいい背中を見せ続けていただきたい。大学受験や人生の節目において、相談に乗ってくれる存在として、長く関わり続けていただければ幸いである。

総じて、学生リーダーなくして、このリーダー塾は決して実現しません。皆さん的情熱と献身に、心から感謝申し上げたい。

## 8. カリキュラム

### (1) 100歳を迎えたマハティール・元マレーシア首相の講義を九州大学とコラボ

100歳を迎えたマハティール・マレーシア元首相に対して、九州大学から名誉博士号の授与が2年越しでようやく実現した。講義は石橋達朗・同大総長はじめ理事ら幹部、同大大学生や大学院生、マレーシアからの留学生、リーダー塾生と一般の方々も参加して、同大学伊都キャンパス椎木講堂で行われた。今回の九州大学とのコラボの講義は、同大国際部国際企画課の全面的サポートで実現した。また、リーダー塾講師でもある川原尚之・認定NPO法人ロシナンテス理事長のご尽力で実現した。ここに皆様に厚くお礼を申し上げたい。

「100歳のリーダーから～争いのない未来を築く処方箋」と題したマハティール氏の講義の概要は以下の通りだ。

私は100年という時間の中で、第一次世界大戦が終わった7年後の1925年に生まれ、その後、第二次世界大戦を含む数え切れない戦争を見てきた。第二次世界大戦では約7千万人の命が失われた。その反省から国連は設立されたが、現実には一部の大國が拒否権を持つことで、総会で虐殺や戦争を止める決議がされても実行されることはない。パレスチナでの大量虐殺をやめさせる決議がいい例だ。また、武器を売るために超大国が挑発行為を行っていることも見逃してはいけない。もし今度、核兵器が使われれば、それは文明の終わりを意味する。だからこそ私は、若い世代に訴えたい。戦争は絶対に避けないといけないし、国連から拒否権をなくすこと、もしくは、まったく違った国際機関を設立してほしい。

日本は多くの家屋が木造のため第二次世界大戦では多くの都市での空爆で焼け野が原となり、さらにアメリカは追い打ちをかけるように広島や長崎に原爆を落とした。戦後、世界で唯一自衛を除いた戦争を放棄する平和憲法を策定したことは、今、世界のモデルとなる憲法と言える。

東南アジア5か国は60年前、対立をしていたが、リーダーが集まり、対話と交渉により平和を維持するために東南アジア諸国連合(ASEAN)を設立した。次世代のリーダーには、戦争が違法であることを明記した憲法を各国に制定してほしい。世界の人々には、反戦を掲げるリーダーを選んでほしい。

質疑応答で塾生から「マレーシアは第二次世界大戦で日本軍に占領されたが、憎しみはないのか」との問い合わせにマハティール氏は「隣人とは共に一緒に生きていかないといけない。マレーシアは戦争中の残虐行為は横において、私はリーダーとして戦後急速に復興を遂げた日本を（経済発展の）モデルにした国づくりをしてきた。学ぶべきところは学ぶということが重要だ。若いさんは過去を教訓に、現在、未来を選び取る力を養ってほしい」と述べた。

また、最近、世界で起きているリーダーのポピュリズムに対する塾生の質問に「民主主義国家では国民は選挙で人気のあるリーダーや政党を選ぶが、時に間違ったリーダーを選んでしまうことがある。そうなったときには、根気よく次の選挙の機会を待ち、よりよいリーダーを選ぶことが必要だ。リーダーは、きちんと法に基づく政策を行い、法を犯してはいけないということを教訓にすべきだ」と答えた。

講義の後、石橋総長がマハティール氏に名誉博士号を授与。マハティール氏は「自分自身、今後も名誉博士号に恥じないように研鑽を積みたい。九州大学には多くのマレーシアからの留学生を受け入れていただいている。今日は水素エネルギー国際研究センターを見学したが、水だけをエネルギーとする究極、環境に優しい自動車に乗り、地球がきれいになる最先端の技術に触れ、今後も九大とマレーシアの関係が深まることをお願いしたい」と謝辞を述べた。



▲名誉博士号の授与の様子



▲講義の様子



▲サプライズの合唱を披露する塾生

## (2) 原爆投下から80年、ノーベル平和賞受賞した被爆者らが講義

原爆投下から80年にあたり、被爆者が年々高齢化し、平和授業で直接被爆者からお話を受けるチャンスが少なくなった塾生のため、2024年にノーベル平和賞を受賞した長崎原爆被災者協議会の田中重光会長に「被爆者として次世代に伝えたいこと」と題して講義をしていただいた。田中先生は4歳10ヶ月に長崎で爆心地から約6キロの自宅で被爆した時の状況を、ガラスの破片を示しながら語っていただいた。田中先生は「原子爆弾は、わずか1キログラムにも満たないプルトニウムが核分裂を起こし、太陽表面を超える熱と凄まじい爆風、致死量をはるかに超える放射線を一瞬で生み出した。被害は兵士ではなく、圧倒的に多くの一般市民に及んだ。戦争とは国家が人びとを動員し、声を奪い、命を消費していく仕組みなのだと理解するようになった」と語り、「戦後も被爆者は長く支援されず、偏見と差別の中で苦しみ続けた。自らを救い、人類の危機を救うために、国内外で訴え続けてきた。その積み重ねが核兵器禁止条約へつながった。核兵器は人間と共に存できない。未来をつくる若者一人ひとりが考え、行動すれば、社会は必ず変えられる。私は自分の人生を通して伝え続けたい」と訴えた。



▲田中重光先生



▲想いを受け取る塾生

また、被爆二世である柿田富美枝・長崎原爆被災者協議会事務局長は、「原爆は過去の出来事ではなく、今も続く現実である。かつて37万人いた被爆者は、80年を経た今、10万人を下回り、平均年齢は86歳を超えた。被爆体験を直接語れる人が急速に減る中で、私は家族証言者として、母の体験や被爆者一人ひとりの人生を語り継ぐ役割を担っている。被爆者がいなくなる時代に、私たち一人ひとりがこの事実を自分の言葉で受け止め、次の世代へ伝えていく責任がある。皆さんのが未来をつくる存在として、核兵器も戦争もない世界を本気で思い描き、行動してほしい。それが、原爆で命を奪われた人々に代わって、私が伝え続けたい願いである」と被爆二世から三世、四世へと語り継ぐことの重要性を強調していただいた。



▲柿田富美枝先生

一方、医師の立場であり、調漸・長崎平和推進協会理事長は「学生時代、医学部で学びながら『社会の役に立つことに関わりたい』と出会ったのが熊本水俣病だ。患者が国や社会から正当に認められず、声を上げることすら難しい現実に衝撃を受けた。現地調査や支援に関わる中で、病の原因は化学物質だけでなく、『人を人として扱わなかった社会構造』にあるのだと学んだ。その後、医師として長崎に戻り、被爆医療と向き合う中で、原爆がもたらした被害の深さを改めて知った。生き残った被爆者が白血病やがん、差別や偏見に今も苦しみ続けている現実は、決して過去の出来事ではない」と語った。



▲調漸先生

調先生は長崎大学核兵器廃絶研究センターを立ち上げ、研究と教育を通じて核の問題を伝えると同時に、若者が国連で学び、発信する機会を作ってきた。「平和は誰かが与えてくれるものではなく、自ら学び、考え、行動することでしか近づけないことを確信した。音楽や芸術、対話や国際交流、どれもが平和への取り組みになり得る。人の痛みが分かる想像力こそが平和の原点であり、次の世代にどんな世界を手渡すのかを考え続けることが、今を生きる私たちの責任だ」と話していただいた。

### (3) 初めてリーダー塾に登壇した日本や世界を代表する講師陣と卒塾生による講義

リーダー塾は、日本や世界を代表する学者、経済人ら各界を代表する一流の講師による講義が大きな特徴となっている。今年は22の方々に講師をお願いした。

初めての講師として、長船健二・京都大学 iPS 細胞研究所副所長・教授に「『iPS 細胞を用いた再生医療の現状と未来』」と題して講義をしていただいた。長船先生とは、5月に同研究所をマハティール氏が訪れ、中山伸弥名誉所長にお話を伺いして、腎臓の iPS 細胞研究の第一人者である長船先生のラボを訪れたことをきっかけに講師をお願いした。



▲長船健二先生

長船先生は「iPS 細胞は病気の原因解明や病態モデルの構築、さらには再生医療への応用へと発展し、すでに一部では臨床応用が進んでいる。私はこの研究を通じて、『医療が“治せない”を減らしていく時代が訪れるかもしれない』という可能性を強く感じている」と語っていた。研究は努力すれば必ず成果が出る世界ではなく、何年も同じ実験を続けても、目に見える結果が得られないこともあります。それでも研究を続けられるのは、「一人でも多くの患者を救いたい」「社会の役に立ちたい」という目的があるからだという。「困難や失敗に直面したときに諦めるのではなく、『なぜ失敗したのか』『次にどう改善できるか』を考え続けられる人こそが、最終的に社会を前に進めていく」と研究者としてのみならず、人として生きる矜持を教えていただいた。

ショコラティエの姿で登場したのは「LES TROIS CHOCOLATS PRIS」代表の佐野恵美子先生。「フランスと日本で見つけた『好き』を仕事にするチョコレートの旅」と題して話してくださいました。佐野先生は「好きなことを伸ばすこと」というのが最も大切にしてきた信念。好きな道を選んだからこそ求められる姿勢もある。それは、プロとして手を抜かず、一つひとつの行動に誠実であることである。好きな仕事でも続けるほど責任は重くなり、直面する壁も増えていく。失敗を恐れず、起きたことから学び、次に活かして切り替えていく姿勢こそが、挑戦を継続する力になる」と話してくださいました。チョコレート産業は現在、地球温暖化によるカカオ生産への影響、供給不足や価格高騰といった「カカオ危機」、そしてカカオ農園における貧困や児童労働の問題など、構造的な課題を抱えているという。佐野先生の「おいしいチョコレートを作ること」と「その背景に責任を持つこと」を切り離さずに捉えているところに感銘を受けた塾生が多かった。



▲佐野恵美子先生

卒塾生を代表して、今年も1期生、外務省の中川智博・外務省経済局経済連携課首席事務官に講師をお願いした。中川先生はマハティール元マレーシア首相や明石康・元国連事務次長の講義に感銘を受け、日本と世界を繋ぐ役割を果たしたいと慶應義塾大学文学部から外交官を目指し、国家1種試験に合格し、外務省に入省。Yale 大学院、Stanford 大学院両方で修士号を取得。外務省では、ワシントン DC の日本大使館で政務担当の駆け出し外交官を経験し、日米安保、国連・人権外交、中国や台湾経済、国家安全保障政策にも携わってきた。首相が外遊するときの英語通訳を務めている。



▲中川智博先生

中川先生は「首脳会談という華やかな場面はほんの一部で、その裏側には膨大な準備と多くの人の努力がある。通訳は言葉をそのまま置き換えるのではなく話し手の意図を深く理解し、相手に確実に届く形で伝えることが求められる。「どう訳すか」より「どう伝わるか」が何よりも重要になる。英語や語学は、将来の選択肢を広げ、世界への扉を開く力になる。完璧である必要はない。自分の弱さを抱えたままでいいから、勇気を持って一步踏み出し、舞台に立ってほしい。その経験が、必ず次の成長につながると私は信じている」と塾生にエールを送っていただいた。

#### (4) グローバル・ハイスクール・サミット「争いのない未来を描こう～分断からの決別」

リーダー塾の大きな特徴として、期間中、クラス別に毎日、その年に起こっている社会課題について深く考え、議論するプロジェクト型の取り組みを行っている。今回も、九州で学ぶ AFS の留学生はアジアのみならず世界の他の地域から来ていたため「グローバル・ハイスクール・サミット」という名前で行った。簡単に答えが出ない課題について期間中、高校生同士が考え、徹底的に討論して、具体的な成果物をつくるのだが、今回のテーマは「争いのない未来を描こう～分断からの決別」。第二次世界大戦が終わって 80 年。これまで政治や経済の分野で様々な国々や地域が連携し合う仕組みづくりをしてきたはずが、あっという間に自国に有利なことばかりを優先するリーダーが登場し、協調から一気に分断の時代に突入してしまった。

ロシアのウクライナ侵略、イスラエルのパレスチナへの激しい爆撃が終わりを告げない中、イスラエルがイランの核施設などを爆撃し、イランはイスラエルへ報復攻撃を行い、アメリカが核施設にミサイルを撃ち込んだ。このほか、カシミール紛争、ミャンマー やスーザンでの内戦で無実の人々が今もなお命を落としている。民主主義国家のアメリカはトランプ大統領の就任で一方的な関税政策を発表し、移民を排除する政策を取り、留学生が学ぶ場を失う事態となっている。ヨーロッパ各地でも右傾化が進み、難民排斥する動きが顕著になっている。

日本は戦後 80 年、努力を重ねて先進国入りして経済発展を遂げたものの、この 20 年あまり経済は停滞し、経済格差が広がり追い打ちをかけるように地球温暖化による天変地異が起り、将来を考える時、国民の多くが先行きへの不安を感じている。

広島と長崎に原爆が落とされて 80 年を迎える。昨年は日本被団協がノーベル平和賞を受賞した。唯一の被爆国として、その意味と責務を次世代はきちんと知り、核戦争はおろか、世界にこれ以上の分断が広がることを阻止することが私たちの使命だ。日本が、日本のためにできること、そして、日本が世界のためにできることって何なのか。5 年先、10 年先、20 年先そして、80 年先も子どもたちが笑顔で暮らし、平和を享受できる世界を築くために、12 日間という限られた時間内に、高校生が、分断がもたらす歴史的背景、原因、現状、そして、その分断を協調に変える未来を描く処方箋を考えいくこととした。

##### 【事前課題】

- ① 現在の社会における「分断」の具体的な事例を取り上げ、その原因・現状・そして今後起こりうる事象について、800 字程度でまとめる。
- ② 自分の後輩や兄弟姉妹から「なんでこんな争いが起こっているの？」と聞かれたことを想定し、クラスごとに割り振られた戦争や紛争を「①歴史的背景」「②間接的・直接的原因」「③現在の情勢」の 3 つの視点からまとめ、教科書 (A4 サイズの紙に手書き) を作成する。

##### ■事前課題の感想

事前課題のおかげで、大まかな情勢や自分の考えをある程度まとめることができ、議論の中で自分の意見を出しやすかったとすごく感じました。また事前課題と同じクラスの人と見せ合い考え方の意見交換などをスムーズに行えることができたと思います。もし事前課題がなかったらうまく話をまとめることもできなかつたと思いますし、ゼロからのスタートだと思うので、時間もすごくかかっていたと思います。

「A4 で好きにまとめてくる」のような、具体的過ぎない指示がかえってよかったですと感じた。人によって濃さや長さが全く違い、その人の本気度のようなものがよく表れるなど感じた。そこからみんなで情報共有していくのがたのしかった。

事前課題に取り組んだことで、初めてその問題について深く調べることになり、問題意識が根付くきっかけになり、とてもよかったです。また、自分の住む地域の知識を深めるきっかけともなり、こちらも大変有意義であった。

## ① 構成

「社会の分断」という、現代社会において極めて重要な課題に取り組んでもらった。「分断」とは簡単に定義することが困難な課題である。

提出された事前課題を見ると、日本国内の分断や、海外の経済格差について学びを深める塾生よりも、「国際情勢」に関して興味を示す塾生が多かった。そのような塾生の関心も反映させ、本年は、「社会の分断」の究極的な行末である「紛争」という国際的なテーマを扱うこととした。

包括的に戦争や紛争に関する学びを深めることを目指し、各クラスに特定のテーマを与え、専門的な知識、分析力、思考力を養う機会を提供するとともに、最終的に「次世代の教科書」を作成するというゴールを課すこととした。ただ、「教科書」といっても、ただの知識や史実の集合体ではなく、次世代の教育に不可欠な要素も組み込んだ「高校生ならではの教科書」を作つてほしいと伝えた。

当初は、前半期間を各クラスでの教科書作成の準備に費やし、後半期間をクラスの垣根を超えた教科書作成に取り組むことを予定していたが、塾生の議論や発表を見て予定を変更し、塾生の成長を最大化するため、最終発表まで、各クラスでの議論に没頭させ、最終発表後の数日で、全クラスでの作成に取り組むという流れに軌道修正を行なった。

なお、グローバル・ハイスクール・サミットの全審査は、以下の評価基準で公正な総評に努めた。

No	項目	詳細
①	理解度	歴史的背景、紛争・戦争の現状について正確且つ深い理解を出来ているか。
②	客観性	歴史を伝える身として、客観性が担保されているか。
③	プレゼン力	審査員・観客に伝わりやすい発表が出来ているか。チーム力が最大限生かされているか。
④	当事者意識	クラステーマの国・地域の一員として、当事者意識を持った内容になっているか。

## ③ 中間発表までの議論の様子

今年の塾生は、例年と比べても積極性や主体性を持ち合わせていた。クラスの仲が深まるスピードも早く、一見簡単に準備が進むのかと思われたが、実際の「議論」となると全く別であり、議論の進め方のノウハウ、危機感、当事者意識が薄く、非常に難航していた。特に、話し合いの基本である「役割分担」や「タイムキープ」といったことができておらず、発表準備を計画的に行なうことができていたクラスは少ない印象であった。その準備の結果が、中間発表（7月31日）に直接的に響いた印象である。

中間発表では、事前課題を持ち寄せ、「知識をまとめる」ことは各クラスからうじてできていた。一方で、今回のテーマである「次世代の教科書を作成する」という点に関しては、大きく理想の形からはかけ離れていた。ただ時系列順に物事をまとめるだけで、それを「わかりやすく伝える」「客観的かつ当事者意識を持った視点」が欠けていた。また、理解度に関しても、知識が断片的であり、審査員からの質疑応答に上手く答えられなかった様子を見ても、深い思考ができておらず、当事者として理解するというステップまでは程遠いと感じた。

また、発表内容の参考文献がどこから来ているのかが不明であったり、矛盾する点を論じていたりと、反省点が目立った。これも、一つの事象に対して深く「調べる」ことに慣れていないかった結果であると

クラス	特定のテーマ
1組	アメリカ・イラン・イスラエルで起きている軍事的衝突
2組	スーダンの内戦・ミャンマーの内戦
3組	中国・台湾の問題
4組	イスラエル・パレスチナの戦争
5組	韓国・北朝鮮の分断と問題
6組	ロシア・ウクライナ戦争

▲各クラスのテーマ



▲互いの事前課題を擦り合わせ



▲中間発表にて寸劇を行うクラス

感じている。総じて、中間発表では、内容に自信を持って発表できていたと感じるクラスはなかった。「調べ、考え、議論し、伝える」の4つについて全て課題が垣間見えた。

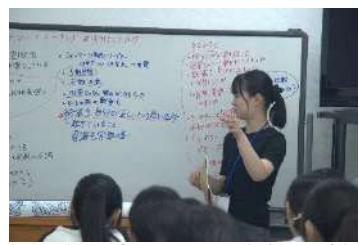
#### ④ 最終発表への準備・意見交流会を経て

中間発表での審査員からの厳しい指摘を受け、全クラス反省の念と、向上心が非常に高まっていた。

塾生たちは、審査員のフィードバックを映像で何度も見返し、一挙手一投足を深く考え、改善の余地を探っていた。これは、「深く考える」ことが芽生えた瞬間であった。また、議論の進め方に関する指摘を受けたことも踏まえ、議論をどう進めるかに関する「議論」も重ねていた。

そしてこの時期に差し掛かると、クラスの輪も良い意味で乱れていった。当初司会をしていた塾生は自信を失い、進行の仕方に対して意見が割れ、時には話し合いが激昂し、涙を流す塾生や意気消沈してしまう塾生も増えてきた。しかし、これがグローバル・ハイスクール・サミットの醍醐味である。普段の学校生活では滅多に経験しない、「もどかしい」、「辛い」という感情を抱き、一種の挫折を経験することで、その後の達成感や成長に繋がる。最終発表（8月4日）までの期間の塾生たちの真剣な姿勢が、卒塾時の自信に満ち溢れた表情に直結したのであろう。

また、クラスの垣根を越え、自身のクラスでは解決できないような難解について、他のクラスのテーマと共通点、相違点を探りながら、解を模索していた。8月2日には、各クラスの代表者が全体の前で討論し、意見交換をする機会も設け、「宗教」「民族」「国際政治」「国内政局」という4つの観点を根本的な課題として合意し、案を出し合っていた。議論の進行、そして課題の解像度も改善し、全クラス最終発表に臨んだ。



▲最終発表に向けて議論する様



▲クラスの垣根を超えた意見交換会

#### ⑤ 最終発表・フィナーレ

最終発表（8月4日）では、大きな変化が見られた。各クラスの教科書の内容は大幅に刷新され、もはや従来の枠にとどまるものではなかった。塾生一人ひとりの視点や表現が反映され、内容には「高校生らしさ」が色濃く表れ、歴史に対する理解も確実に深まっていた。

しかし同時に、「もう一步」という印象も否めなかった。そこでもう1日時間を与え、フィナーレに臨んでもらうこととした。この時期になると疲労もあり、力を出し尽くしたようなクラスも出てくる。そうしたクラスは、思うように前へ進めず、苦しむ場面も見られた。しかし、そのような状況下においても、最終発表まで全クラスが辿り着くことができたのは、間違いなく、塾生のメンタル面も含めて最後まで支え続けてくれたスタッフの存在があったからである。心の底から感謝の意を表したい。

そして、遂にフィナーレの日を迎えた。塾生一人ひとりの表情には、「自信」と「覚悟」がはっきりと宿っていた。何度も突きつけられた厳しいフィードバックに対し、誠実に向き合い、自分たちがどう成長できるのかをチーム内で話し合い、自信を持って発表に臨んでいた。

多くのクラスが、現状の問題点を深く掘り下げ、その解決の糸口となる政策を提示した。もちろん、すべての案が完成度の高いものだったわけではなく、理解度やプレゼンテーションに課題が残る部分もあった。しかし、それ以上に、全員が「やりきった」「出しきった」という事実が強く



▲最終発表で審査員の質問に答える塾



▲フィナーレ会場の様子



▲フィナーレにて力強く語る姿

伝わってきた。これこそが、グローバル・ハイスクール・サミットの取り組みを通じて得られる最大級の成果であると考えている。

言うまでもなく、今年のテーマには、簡単に答えを導き出せるものは存在しない。むしろ、答えはないと言ってもいいだろう。重要なのは、その答えを探し求め続ける姿勢である。クラス一丸となり、調べ尽くし、考え尽くし、議論し尽くし、「やりきった」と感じられる経験こそが、何より大切なのである。

AIに問い合わせれば、ほとんどの答えが瞬時に返ってくる時代において、「考えること」から距離を置いてしまう危険性も高まっている。だからこそ、塾生たちには、自ら考え抜くことでしか得られない成果、学び、出会い、達成感、そして次へ進む可能性を感じて欲しい。

#### 【フィナーレの講評】

	アメリカ・イラン・イスラエルで起きている軍事的衝突		
1組	2位	138点	前回は「浅く広い」歴史理解に留まっていたが、今回は宗教・政府・核の3つの主要な視点に整理することで、対立構造を立体的に捉えることができた。三国間の関係性を丁寧に分析し、それぞれの国がどの国に、どのような働きかけを行うべきかについて踏み込んだ議論を展開した点は高く評価できる。
	スーダンの内戦・ミャンマーの内戦		
2組	5位	110点	対立が生じる要因そのものは的確に理解できており、特になぜそれが武力行使へと発展してしまうのかという点に強い問題意識を持っていた。解決策として提示された三つの提案は独創性があり、画期的であった。遠方の地域で起きている内戦は「自分事」として捉えにくいテーマであるが、原因を丁寧に辿ることで、どの地域でも起こり得る普遍的な問題として包括的に論じていた点が印象的である。
	中国・台湾の問題		
3組	3位	124点	複雑な歴史的背景を、法的枠組みや客観的な資料に基づいて明確に定義し、議論の土台を丁寧に構築していた。感情論に流されることなく、新たな政策提案へとつなげていた点は評価が高い。日本という立場から、米・日・中の関係を俯瞰し、現実的に「考えられること」「できること」を深く探究していく点に、成熟した視点が見られた。
	イスラエル・パレスチナの戦争		
4組	4位	121点	イスラエル側・パレスチナ側という二項対立に陥ることなく、どちらの立場から見ても危機的状況にあるという前提に立ち、包括的な思考を展開した。現状分析と未来予測の2段階で歴史を整理し、問題を表層的な側面と根本的な側面に分解して論じていた点は非常に論理的であった。全体として、思考の深さが際立つ発表であった。
	韓国・北朝鮮の分断と問題		
5組	1位	139点	歴史理解の深さが際立っており、次世代の高校生だからこそ提示できる視点が随所に見られた。「アート」と「対話」を通じて齟齬を解消するという提案は、従来の政治的アプローチにとどまらない独創的な発想であり、高く評価できる。課題設定・分析・提案のすべてにおいて完成度が高く、総合的に最も優れた発表であった。
	ロシア・ウクライナ戦争		
6組	6位	109点	分断構造を細かく分解し、二国間における実情をそれぞれの定義に即して整理していた点が特徴的である。解決策についても段階的に整理し、どのアクターが、どの局面で、どのような役割を果たせるのかを熟慮していた。全体として構造的な理解は深く、今後は提案の説得力をさらに高めることで、より強い発表につながると考えられる。

## ■グローバル・ハイスクール・サミットの感想

グローバル・ハイスクール・サミットがなければ、リーダー塾での成長はすごく限られていたと実感しています。スーダンとミャンマー内戦についてさらなる知識を深められただけではなく、人の意見を聞いて、自分の意見と照らし合わせ話をまとめていくと言う作業に最初は困惑しましたが、議論を重ねるごとに、役割分担が明確にされ、最終的には私たちにとって最高の発表に仕上げることができたと思います。ディスカッション能力を得られただけではなく、自分の意見を伝える主体性が大切だと思いました。

一番つらかったから一番鍛えられた時間だったと感じています。時間が限られているスケジュールの中でみんなで頭を使い絞り出して、一つの問題について話し合いました。3組では話し合いが進んでいるようで進んでいなかったり、進んだと思ったら振出しに戻ったりすることが多かったかなと思います。議論にするにあたって軸は絶対に必要なこと、何を伝えたいかをはっきりさせることも絶対に必要なことなのだと学んだ。無理だと思ってもみんなで考え続けることで何か別の考えが出てくることも学んだ。

グローバル・ハイスクール・サミットでは自分に自信をもつことができた。元々みんなをまとめることが、前に立って発表することは得意ではなかったが、GHS 委員になり、フィナーレでも発表するという今までの自分では想像できないようなことを、やりきることができた。どれも悩んで苦しい思いをしたが、その分発表の前から「私たちが1位だ」と思えるほど自信を持てるようになりました。

リーダー塾の軸となるプログラム。なんだかんだ言ってすごく楽しかったです。一番きつかったし、心が折れそうになったことが何回もありました。しかし、これがなかつたら、クラス仲間とこれだけ仲良くなることはなかったし、やりきってよかったなと思いました。今のニュースを見るのがもっと楽しくなりました。よかったなと思いました。

世界情勢を当事者意識を持ちながら、多角的な視点で考えることができました。平和とは何か、今私たちができるることは何か本気で話し合うことができたと感じています。また、話し合いを通して、友達からいい刺激を受けることもできました。たくさん意見を出し、話し合いを進めながら上手くまとめている仲間を見て、圧倒されるとともに、自分もできることを見つけ負けずに精一杯頑張ることができました。

## ⑥ マハティール元マレーシア首相への発表

フィナーレが終了すると、一息つく間もなく、マハティール元マレーシア首相への発表に向けた準備が始まった。これまで各クラスで作り上げてきた教科書を、今度は一冊の教科書にしてマハティール氏に発表する。6クラスの学びはそれぞれ一つの章（全6章）となり、教科書の「はじめに」と「終わりに」は、全クラスの代表者が集い、意見を出し合いながら作成していった。こうして、クラスの枠を越えた一冊の教科書が形作られていった。

フィナーレで優勝した5組以外の塾生は、大きなプレッシャーから解放され、どこか表情も和らいでいた。これまでの取り組みに対する確かな自信があったからこそ、次は内容を英語に翻訳するという新たな課題に対しても、迷いなく向き合うことができていた。一方で、教科書の「はじめに」と「終わりに」という全クラス共同で作り上げる部分については、新たな創作に取り組む難しさもあり、疲労の色が徐々に見え始め、作業が滞る場面もあった。そんな中、5組の塾生は、達成感と同時に強い責任感を抱き、主体的に議論を牽引していた。各クラスの意見を丁寧に汲み取りながら、各章ごとの共通点や相違点を整理し、「はじめに」と「終わりに」を一つの物語としてまとめ上げていった。この時点では、もはや勝敗やクラス間の対立は存在していなかった。発表を終えた安堵感の中で、全員が手と手を取り合っていた姿勢には、深い学びの先に生まれた連帯感が表れており、大きな感銘を受けた。発表者は、5組



▲発表を聞くマハティール氏



▲マハティール氏への発表

から市原柳奈子（岐阜県立関高等学校・2年）、スマス・エミリー蓮花（私立静岡サレジオ高等学校・1年）、谷口裕里（The Williston Northampton School・2年）の3名に決定した。

発表会場には、多くの九州大学の学生や関係者に加え、マレーシアを24年間首相として率いてきたマハティール氏とシティ・ハスマ夫人や関係者が出席していて、そのような場で発表を行うことに、3人は緊張を隠せない様子であった。しかし一方で、これまで積み重ねてきた取り組みに対する確かな自信も持ち合わせており、その自信は少しずつ落ち着きへと変わり、やがて発表への確信へと昇華していった。本番では、堂々とした姿勢で、自らの言葉でプログラムの成果を伝えきった。

発表テーマは「To Achieve a World Without Conflict ~Calling an End to Societal Division」、全6章・24ページからなる「次世代の教科書」を創り上げた。

第1章では、米国・イラン・イスラエルを取り巻く軍事的緊張を取り上げ、長年にわたる相互不信の蓄積、短期的な国家利益を優先した軍事的拡張、という2つの角度から原因を究明した。また、国家間の相互理解を深めるための「戦争万博の開催」という具体案を、高校生ならではの発想で提案した。

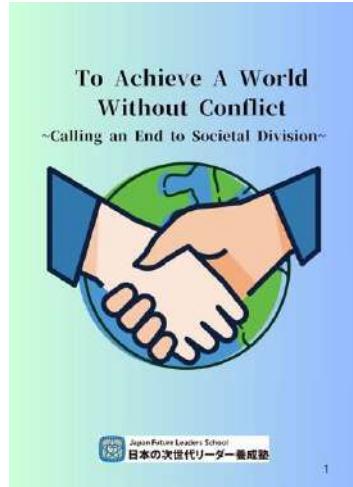
第2章では、ミャンマーとスーダンで長期化する内戦を扱った。解決には第三者の介入が不可欠である中で、次世代のリーダーが主体的に関与できる新たな支援の形として、「ロボットやAIを活用した人道支援」といったアプローチを提示し、混迷する国々への貢献の可能性を模索した。

第3章では、中国と台湾の緊張関係について述べ、長年にわたり政治レベルの対立が注目される一方で、市民の声が十分に反映されていない点に強い課題意識を持ち、「Kokoro Shout」という取り組みを提案した。これは、若者の声を世界に届け、国際社会がこの紛争の長期化に対し危機感を強める契機となれば、という彼らの純な想いの象徴である。

第4章では、イスラエル・パレスチナ紛争を扱った。宗教・政治・歴史が複雑に絡み合う本問題において、革新的な解決策を見出すことは、非常に難解である。その中でも、「未来」を見据えた施策として、新たな防空壕の設置という実践的な案から、両国の若者たちの対話の場を創出するための思慮深い解決策を提示した。

第5章では、朝鮮半島の歴史を取り上げ、「アート」を媒介とした相互理解の実現という具体的な提案を行ない、歴史的対立を乗り越える手段として、文化的表現が持つ可能性を力強く論じた。これはロシア・ウクライナ紛争について述べられた第6章でも同様触れられ、歴史教科書やメディア発信を通じて、対立する双方の視点の理解度をより深めるための教育的取り組みの必要性が強調されていた。

「次世代の教科書」という極めて大きなテーマであったが、すべての章を通じて共通し語られたことは「相互理解」の重要性である。理想論と捉えられるかもしれないが、塾生が真摯に議論を重ね、導き出した結論には、今後、塾生が実生活でも思い出し、真剣に向き合っていってほしい。また、「教科書」に不可欠な「客觀性」や「史実」の重みを踏まえつつも、次世代ならではの解決策を模索した姿勢からは、彼らの強い平和への想いが凝縮されているのではないだろうか。その想いがこの発表の場にとどまることなく、今後も一人ひとりが沈思と行動を積み重ね、未来社会の平和実現に貢献してくれることを強く願っている。



▲塾生全員で作成した教科書の表紙

Is Division Really a Bad Thing?  
We believe that mutual recognition and broadening our interests will lead to coexistence.  
Our proposed measures are as follows...  
**Art × Dialogue**  
Our Concept of Art:  
Something that Inspires People's Hearts  
Use art as a catalyst for building friendly relations between countries. However, art is subjective, so it is necessary to communicate through dialogue to convey the true message and eliminate mutual distrust.

Today, We Became Friends.

Inspired by the Japanese youth TV program "Kyōto Suki," the class has come up with the idea of "Kyōto Tomodachi." High school students from around the world would deepen their exchange and communication.

▲アートと対話の重要性を訴える本文



▲メッセージを書くマハティール氏

## ⑦ 総括

グローバル・ハイスクール・サミットの開催は、本年で2回目となった。ここで改めて、本プログラムの意義、そして塾生へのメッセージについて述べたい。

1つ目は、「考えることの楽しさ」「学ぶことの楽しさ」に気づいてもらうことである。学校での学習や受験においては、どうしても暗記や知識ベースの学びが中心になりがちである。しかし、本来の学びの醍醐味は、問いを立て、調べ、考え尽くし、自分なりの答えを導き出す過程そのものにある。思考を深めることで得られる楽しさや達成感を、少しでも実感してもらえていれば幸いである。

2つ目は、個人、そしてチームにおける「ゴールの明確化」である。個人としてどのような発表を目指すのか、チームの中でどのような役割を果たしたいのか、まずは自分自身の目標を明確に設定する必要がある。これは勉強や受験、部活動など、あらゆる場面において不可欠な姿勢である。そして、自ら設定した目標に対して執着して、そこから逆算して「今」何に取り組むべきかを考え、やり切ることが重要だ。

この考え方は、個人だけでなくチームにおいても同様である。チームとして何かに取り組む際、全員の目線が揃っていないければ、取り組みは容易に瓦解してしまう。今回の経験を振り返ると、最初の段階でチームとしての明確なゴールを定め、そこから逆算して進めていれば、よりスムーズに進行できた場面も多かっただろう。この気づきは、今後さまざまな場面で生かされるはずである。

3つ目は、「やり切ること」の重要性である。高校時代は、何かに本気で打ち込めるだけのエネルギーと時間がある、人生の中でも極めて貴重な時期である。その時間を使って、対象は何でもいい。趣味でも、特技でも、遊びでも構わない。ただし、目標を定め、全力で最後までやり切ること。その過程で得られる経験や学び、そして見えてくる未来は、必ず自分自身を豊かにしてくれる。

高校時代に悔いを残さぬよう、塾生には、これからも何事にも全力で向き合い、完全燃焼してほしい。グローバル・ハイスクール・サミットで得た学びが、その一歩となることを心から願っている。

## (5) 今年の特徴的なカリキュラムについて

### ■キャリア教育

塾生が将来を見据え、自らの進路や生き方について考える機会として実施した。クラス担任の社会人の方々からは、現在の仕事の内容だけでなく、日々の業務のリアルや、これまでの失敗・葛藤なども率直に語っていただいた。華やかに見えるキャリアの裏にある努力や苦悩を知ることで、「失敗してもいい」「挑戦することが大切だ」という気づきを高校生が得る時間となった。また、大学生との座談会では、海外・首都圏・地方それぞれで学ぶ大学生が、自身の進学理由や学部選択の背景、大学生活、課外活動について紹介した。少し先を歩く先輩たちの等身大の姿を通して、塾生は「自分の将来像」をより具体的に思い描くきっかけを掴み、社会人・大学生の双方との対話を通じて、塾生一人ひとりが進路選択やキャリア形成を“自分ごと”として考える貴重な学びの時間となった。



▲社会人の話を真剣に聞く塾生



▲学生リーダーによるキャリア教育

### ■宗像大社・神宝館

2014年に「『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群」としてユネスコ世界文化遺産に登録された宗像大社を正式参拝した。厳かな空気の中での参拝を通じ、塾生は伝統や信仰の歴史の深さを肌で感じていた。参拝後はクラスごとに分かれ、神職の皆様にご案内いただきながら本殿や第二宮、第三宮などを回った。



▲集団参拝の様子



▲神宝館の入口で説明を受ける様子

### ■道の駅むなかた / 味噌汁コンテスト

本年も恒例の「味噌汁コンテスト」を開催した。塾生は、道の駅むなかたで自ら選び購入した地元食材を使い、各チームで個性豊かな味噌汁づくりに挑戦した。味噌は、協賛企業であるフンドーキン株式会社様よりご提供いただいた。クラスごとに、食材を切る係・火を起こす係・洗い物係など、役割分担をしながら協力して調理を進め、一方で、審査員に向けたプレゼンテーションの準備も並行して行われ、味噌汁の魅力や工夫した点を言葉で伝える練習にも励んだ。



▲食材を購入する塾生



▲味噌汁作りの様子

どのチームも「ナンバーワンの味噌汁を作るぞ！」という熱意にあふれ、会場は活気に包まれていた。調理後は、審査員をお迎えし、各クラスが渾身の味噌汁をプレゼンテーション付きで発表しました。結果発表では、自分たちのチームが作った味噌汁が評価されると歓声が上がり、仲間と共に味噌汁を完成させた達成感と喜びを共有した。地域の食材と仲間の協力を通じて、「つくる・伝える・味わう」という学びの三拍子がそろった、熱気あふれるプログラムとなりました。

## ■担任交代式

社会人のクラス担任が前半・後半で交代する担任交代式を実施した。6日間にわたって共に過ごした前半クラス担任との別れを惜しみ、多くの塾生が涙を流しながら感謝の気持ちを伝える姿が印象的であった。サプライズとして、塾生は合唱曲「ダーリン」を披露。感謝の思いを込めた歌声が会場に響き渡り、クラス担任への温かいエールとなった。式の最後には、前半クラス担任から後半に向けて励ましのメッセージが送られ、「クラス担任の期待に応えたい」という前向きな気持ちで塾生たちはお見送りをした。続いて、新たな後半クラス担任が入場し、自己紹介を経て新しい出会いの時間が始まった。緊張した面持ちの塾生たちだったが、次第に打ち解け、質問が絶えないほど興味津々に話に耳を傾けていた。

年齢や立場を越えた深いつながりが生まれるのも、この担任交代式ならではの光景だ。わずか6日間という短い期間であっても、社会人の献身的なサポートと真摯な姿勢が、塾生の心に強く刻まれる時間であった。



▲見送りの様子



▲感謝の気持ちを伝える塾生

## ■SAGA アリーナ

グループごとに分かれて SAGA アリーナを巡り、展示エリアや観覧席、アリーナなどを見学。実際にアリーナの中央に立ち、見上げるような大きな天井と広大な空間に、塾生たちは驚きと感動の表情を見せていました。また、これまで SAGA アリーナで行われたアーティストのライブ展示コーナーも見学し、「自分の好きなアーティストがこの場所に立ったんだ！」と嬉しそうに話す塾生の姿も見られた。さらに、通常は立ち入ることのできない関係者エリアを特別に見学させていただき、塾生たちは非日常の空間に心を躍らせていました。

佐賀県が誇る最新の文化・スポーツ施設の魅力を肌で感じるとともに、大きな舞台に立つ人々の努力や情熱に思いを馳せる時間となった。



▲アリーナ内の見学



▲室内展示の見学



▲室内展示を真剣に見つめる塾生



▲野外見学の様子

## ■名護屋城博物館

8月3日に名護屋城博物館を訪問し、近隣諸国との歴史関係を学ぶフィールドワークを実施した。武谷副館長による講義を受講した後、クラスごとに博物館見学と城跡見学に分かれて活動を行った。博物館では、講義内容を踏まえて資料を読み解く姿が見られ、塾生たちは展示資料を主体的に読み取りながら理解を深めていた。城跡見学では、グループごとに配布されたタブレット端末を用いて、各地点で復元された城の様子を映像で確認しながら見学を行い、歴史に思いを馳せる様子が印象的であった。

猛暑の中での活動となつたが、熱中症対策を徹底しながら、実際の地を訪れることで日本と朝鮮半島の交流史を体感的に学ぶ貴重な機会となつた。

## ■AFS 留学生交流

全世界約50カ国と高校生の交換留学を行っている公益財団法人AFS日本協会の協力のもと、九州に留学中の留学生11名・9カ国（アルゼンチン・イタリア・カナダ・スイス・タイ・ドイツ・チェコ・フィンランド・ラトビア）と3泊4日の期間、寝食を共にした。留学生は各クラスに参加し、塾生と同じ部屋で生活しながら、すべてのプログラムに参加した。特にグローバル・ハイスクール・サミットでは、それぞれの国の背景や文化、価値観の違いについて意見交換が行われ、塾生にとって新たな視点を得る機会となった。日常生活を共にすることで交流が深まり、互いの理解が進んだことも大きな成果である。留学生からも、本プログラムへの参加を通じて多くの学びと交流が得られたとの声が寄せられた。



▲AFS 留学生との交流の様子

## ■九州大学の卒塾生と交流

本年度は九州大学にてプログラムを実施する機会があったことから、同大学に在学するリーダー塾卒塾生5名（14期生～19期生）を招き、交流プログラムを実施した。塾生にとってのロールモデルとなる存在として、大学生活や学びの内容、進路選択の経験などについて、実際の教室にてプレゼンテーションを行っていただいた。その後は少人数の座談会形式に分かれ、大学進学や将来の進路、学問分野の選択などについて具体的な質問や相談を行う時間を設けた。

塾生たちは先輩の体験談を通して大学生活をより具体的にイメージすることができ、九州大学への進学を志す塾生も見られた。実際にその地で学ぶ卒塾生との交流は、進路選択を考える上で大きな刺激となり、将来像を描くうえでの重要な機会となった。



▲九州大学について紹介する卒塾生



▲卒塾生の話を真剣に聞く様子

## ■夢ディスカッション

プログラム終盤に実施する「夢ディスカッション」は、これまでの学びを踏まえ、塾終了後の未来について考える総括的なプログラムである。個人で完結するのではなく、12日間を共に過ごした仲間とともに将来のビジョンを描くことを目的としている。

まず各自が0歳から現在までの人生グラフを作成し、自身の経験や転機を振り返った。その後、グループ内で共有することで互いの背景や価値観への理解を深めた。続いて「私の未来設計図」と題し、20年後までのキャリアや挑戦したこと、人生計画を個人で整理し、グループ内で共有しながら相互に意見交換を行った。リーダー塾の仲間だからこそ本音で語れる将来像を共有し合うことで、目標の具体化と相互の励ましにつながる時間となった。



▲夢を共有する塾生たち

## ■目標宣言

夢ディスカッションの後、塾生全員が将来の目標や挑戦したいことを発表する「目標宣言」を実施した。全員の前で自らの目標を言葉にすることで、決意を明確にし、仲間同士で今後の挑戦を応援し合うことを目的としている。塾生一人ひとりが原稿に頼らず、自身の言葉で将来像を語る姿が見られ、互いの成長や決意に触れて涙する場面もあった。「医師として貧困層の人人が質の良い医療処置を受けられるような環境を作りたい」「生成AIに関する会社の起業をし、海外大学で拡張知能やAGI、量子コンピュータに関する研究を行いたい」「新しい地域貢献の形を作りたい」「世界一周をしてみたい」といった大きな目標や「〇〇大学に合格する」「リーダー塾で学生リーダーをする」といった身近な目標も多く挙がった。学びを総括する場として、リーダー塾の集大成ともいえる重要な時間となった。



▲目標宣言の様子

## ■卒塾前夜祭

8月7日夜、学級委員を中心とした塾生主体の企画として「卒塾前夜祭」を実施した。全国から集まった仲間との最後の夜を共に過ごす機会として毎年実施しており、内容は各年度の塾生が主体的に企画・運営している。歌やダンスなどのパフォーマンス、未成年の主張、12日間の振り返りなど多彩な内容が行われ、塾生それぞれが思い出を共有しながら最後の夜を過ごした。笑いと涙が入り混じる時間となり、仲間との絆や成長を実感する機会となった。



▲盛り上がる塾生たち

## ■合唱 Mrs. GREEN APPLE「ダーリン」

卒塾式では、12日間にわたるリーダー塾の集大成として、全員で合唱を披露するのが恒例となっている。本年の課題曲はMrs. GREEN APPLEの「ダーリン」。塾生たちは事前課題の段階からパートごとに分かれ、合唱委員を中心に自主的に練習を重ねてきた。限られた時間の中でスケジュールを調整し、クラスを超えて交流しながら、「ひとつの作品を全員で創り上げる」ことを目的にチームビルディングの一環として取り組んだ。練習を重ねる中で、塾生たちは歌詞に込められた思いを自分たちの経験や12日間の塾生活と重ね合わせ、一人ひとりが自分なりの解釈を胸に歌声を響かせた。卒塾式本番では、これまでの日々や仲間との思い出を噛みしめながら、涙をこらえきれずに全身全霊で歌う姿が印象的だった。



▲涙ながらに歌う塾生



▲合唱の伴奏をする塾生

卒塾後も、この曲を聴くたびにリーダー塾での日々を思い出し、新たな挑戦への原動力になっているようだ。

## 9. 参画自治体の声

リーダー塾は、8県2市の自治体から参画を受けており、塾生の募集、選考など、多くの協力を頂いている。参加した塾生の様子や塾に期待していることなどについて、参画自治体に対し、アンケート調査を実施した。

### 【北海道 環境生活部くらし安全局地域安全課青少年係】

今年度、北海道から参加した6名は、各国や全国からの参加者との交流を通して多くのことを学び、感じることができました。事後に実施したアンケートでは、参加者から「時間管理や話し合いの進め方を学んだ」「充実したカリキュラムを通して将来を見据える具体的な学びが得られた」といった声があつたほか、保護者の皆さんからは「将来について真剣に考えるようになり、確実にモチベーションが上がった」「国内外での情勢等のニュースにも以前より関心を持つようになり、明らかに視野が広がった」との言葉をいただき、先生方からは、「進路希望の分野にも幅が広がった」「客観性と物事を深くしっかりととらえる思考力を身に着ける機会になった」との感想が寄せられました。

今回の経験をきっかけに、参加者が今後ますます成長を重ね、将来、北海道や世界で活躍してくれることを期待しています。

### 【青森県 交通・地域社会部 地域交通・連携課 人づくりグループ】

青森県では、自らの目標に向かって果敢に挑戦する人材を育成するため『『夢のカタチ』形成事業』を実施しており、その取組の一環として「日本の次世代リーダー養成塾」への高校生の派遣を行っています。今年度は7名の高校生を派遣しました。生徒たちは、日本や世界で活躍する一流講師の考え方や知見に触れたり、高い志を持つ仲間と議論を重ねたりすることで、自分の将来や世界の情勢について真剣に考える機会を得ました。これにより、「意欲が高まった」「自分の可能性を広げることができた」「夢を具体的に描くきっかけを得ることができた」といった声が寄せられています。また、帰省後にも、全国の仲間と連絡を取り合いながら、お互いに成長を刺激し合える関係を築けたことに対して、大きな喜びを感じている様子が伺えます。

今後は、この塾への参加を通じて得られた知識や経験、そして全国の仲間とのつながりを活かしながら、本県や日本の未来を担うリーダーとして、それぞれの持てる力を大いに発揮し、さまざまな分野で活躍してくれることを期待しています。



▲事前研修会の様子(提供:青森県)



▲事前研修会の様子(提供:岩手県)



▲仙台空港での出迎えの様子(提供:岩手県)

### 【岩手県教育委員会事務局教育企画室】

今年度、岩手県からは7名の高校生が参加しました。事前研修において、英語での自己紹介スピーチや本県卒塾生からのメッセージ、グループディスカッションを通じてリーダー塾に向けて見通しをもち、参加意欲の向上を図るとともに、それぞれに将来の目標や現在の自己の課題を持ち、塾を通して課題を克服し、さらに成長しようという明確な目的意識を確認した上で、リーダー塾に参加してもらえたと考えています。

リーダー塾終了後の感想文には、「自分の発言に自信と責任をもてるようになった」「自分に軸を持ち、その軸を貫き通し努力する姿で希望を与える人になりたい」「自分の弱さを認める勇気が人として成長するための第一歩だと気づいた」「海外の大学への進学や留学への強い興味が沸いた」「新しいリーダーを担う高校生へのボランティア活動を行いたい」

「自分から発言できるようになった」「地域のために何か活動を起こすなど、いろいろな活動に挑戦したい」という感想や目標が綴られていました。普段の高校生活だけでは得られない多くの人の出会いから得られた経験を力に変え、岩手で、世界で活躍する人材として成長していくことを期待しています。

### 【静岡県企画部 総合教育課】

静岡県は、本県発展の中核的存在となる人材育成を推進するため、「日本の次世代リーダー養成塾」へ参画しており、今年度は、静岡県推薦枠として県内12校から15名の高校生を派遣しました。

本県塾生を対象に実施した事後アンケートでは、「世界の今を題材としたグローバル・ハイスクール・サミットなどの経験を通し、17年間の人生で自分を最も高めることができた」「物事について多角的に深く考えることができるようになった」「自分の目標や夢に対して意志が強くなった」「一步を踏み出す勇気が湧くようになった」「自分らしさを思い出した」「最高の仲間と会えた」といった、多くの前向きな声が寄せられました。

一流の講師による講義から得られた知見や、世界規模の大きな課題と共に取り組む全国の仲間との交流を通じて、価値観や視野を広げ、思考力を高めるなど、自らの成長を実感した様子がみられました。リーダー養成塾への参加は、塾生にとって貴重な学びと経験となりました。貴塾の取組が、次代を切り拓く人材育成につながる活動となるよう、更なる発展を祈念いたします。



▲事前研修会の集団討論

グループディスカッション(提供:静岡県)

### 【岐阜県子ども・女性部子ども・女性政策課青少年係】

本年度は岐阜県推薦枠塾生として県内の高校生6名が塾に参加させていただき、事務局職員の皆様の並々ならぬ御尽力により、無事開催することができましたことに心から感謝申し上げます。

事後レポートでは、「挑戦することの楽しさや、苦しくても頑張り続けたときの達成感を学んだ。」「講義を通して、将来の目標が明確になった。」といった感想が寄せられ、塾生一人ひとりが学んだことを実際の生活で具体的に実行していくとする姿を伺い知ることができました。また、保護者の方々からの感想では、塾への参加を通して成長した我が子の姿に喜びを感じておられる様子が伝わってきました。

今後の学校生活や将来の進路において、塾への参加を通して得られた知識・経験、そして卒塾生同士の繋がりを生かしながら、それぞれの立場でリーダーシップを大いに發揮し、より一層活躍されることを期待しています。

### 【和歌山県教育庁教育総務局教育政策課】

リーダー塾最終日、参加生徒みんなで肩を組み合い、涙を浮かべながら合唱する光景や、帰路に就く直前まで別れを惜しみ再会を約束し合う姿を見て、リーダー塾に参加した生徒たちが、今年も特別な夏を経験したことを確信しました。

参加生徒の事後のレポートには、学びや気付き、自己の成長、将来の夢や決意、かけがえのない仲間などについて、次のように熱い想いが綴られていました。「リーダー塾での大切な学びは、行動すること、あきらめないこと、人生を楽しむことです。」「仲間とともに何かに一生懸命に取り組むことの大切さを学びました。」「悔いのないものを作り上げるために自分の意見を言うことを躊躇しなくなりました。」「思いを行動に移すことを大切にしながら1日1日努力し続けたい。」「リーダー塾はきっかけにすぎないと肝に銘じ、これからも成長していきたい。」「出会った仲間は、成長のきっかけであり、辛いときの一番の心の支えでした。」「学校では出会えないような素晴らしい同世代の人と出会えた。」「悩みながら

答えのない問い合わせで仲間と涙を流すこともありました。」「たくさん涙を流しました。ですが、この涙は私の宝物です。」

普段の学校生活における12日間では決して得られないかけがえのない経験をすることができた参加生徒たちの、今後のさらなる成長と活躍が楽しみでなりません。このような場を毎年作ってくださるリーダー塾関係者の方々に心より感謝いたします。

また、リーダー塾のスタッフの方、特に高校生と同世代の大学生スタッフの方のリーダー塾への溢れるほど熱く若さ漲る想いやその姿が、高校生の成長を加速させるとともに、リーダー塾をより一層特別な空間、期間にしていると感じました。今後も、日本の次世代リーダー養成塾が引き続きます充実しながら飛躍していくことを願ってやみません。

### 【福岡県人づくり・県民生活部私学振興・青少年育成局青少年育成課】

リーダー養成塾において、同世代の仲間と寝食を共にしながら、各界の一流の講師による講義を受け、日々議論を重ねることは、参加者にとって他では得難い、大変貴重な経験になっています。

特に、学校や学習塾に通うだけでは味わえない、全国から集まった大志を持つ仲間との議論、語らいは、新たな刺激となり、自分自身を見つめ直す良い機会になったことだと思います。

近年、世界情勢のめまぐるしい変化に伴い、自ら主体的に考え、解決に向けて行動する力や、グローバルな舞台で多様なバックグラウンドを持つ人々と通じ合い、新しい価値観を創造する力が求められています。

参加した皆さんには、大いに悩み、考え、自らの考えを確立し、そして強い信念をもって未来に向かって立ち向かっていただきたいと思います。今回の参加を契機に、皆さんがさらに多くのことを学ばれ、高い志と希望を胸に、日本そして世界の第一線で活躍されることを心より願っています。



▲事前研修会の様子(提供:福岡県)

### 【佐賀県地域交流部さが創生推進課】

本年度は佐賀県推薦枠塾生として16名が塾に参加させていただき、事務局の献身的なサポートに感謝申し上げます。報告会の際に、参加者からは「様々な講師の講義を受けたことで、将来の夢が明確になった。」「全国の仲間たちと議論をする中で、自分の意見を持って伝えることの大切さを学ぶことができた。」との報告があり、リーダーとしての資質を習得することはもちろん、世界で活躍する講師や全国から集まった仲間たちから多くの刺激を受けたようです。

また、「世界を舞台に挑戦していくためには、英語でコミュニケーションが行えることは当たり前なことなのだと学び、英語力を高めることに加えて、第二外国語を学ぶことの重要性を感じた」との報告もあり、世界を見据え、塾生の向上心も大いに高めたように考えます。

これからも、ここで得た経験や塾生同士のつながりを大切に、佐賀県や世界のリーダーとして、社会に貢献していくことを期待しています。



▲事前研修会の様子(提供:佐賀県)



▲報告会の様子(提供:佐賀県)

### 【宗像市教育部教育政策課地域教育連携室グローバル人材育成係】

第22回となる「日本の次世代リーダー養成塾」を、今年も宗像市で開催いただき、誠にありがとうございました。世界遺産・宗像大社での講義や、地元食材を活用した「味噌汁コンテスト」など、宗像ならではの特色を盛り込んだカリキュラムを通して、全国から集まった塾生の皆さんに宗像の歴史や文化、地域資源の魅力を体感いただけたことは、本市としても大変意義深いことと感じております。

塾生の皆さんにとっては、国内外の著名な講師陣による講義やディスカッションを通じ、自身のリーダー像や将来の方向性を考える貴重な機会となったことだと思います。今回の経験を今後の成長の糧として、それぞれの目標に向かって力強く歩んでいかれることを期待しております。

#### 【うるま市教育委員会 教育政策課】

今回で10回目の参加となりますうるま市では、担当課が教育委員会へ変わり、より人材育成を充実させる事業となりました。

市で行った事前学習会では塾の課題を塾生同士でディスカッションをし、本市について学び地域の良さを確認することができました。合宿に出発する時は少し不安そうにしていましたが、沖縄に帰ってきた時は、楽しかったことや大変だったことを明るく、嬉しそうに話してくれました。参加報告会では、教育委員会・学校関係者・市議会議員を前に、自分でまとめて作成したデータを示してそれぞれの感じたこと・学んだことを堂々と発表する姿が大きく見え、成長を感じました。

最高の仲間たちに刺激を受けて留学したいと思い、自分で情報を集めはじめた卒塾生。地元で両親のようにお店を経営する夢を持っていたが、他のことにも関心が出てきたという卒塾生。普段の生活では会えない各界で活躍する講師陣の貴重な講話を聴き、高い志を持った仲間と過ごした時間は、塾生にとって忘れられない強烈な経験となり、将来を考える良い機会となったようです。

この経験を学校生活に生かし、友達や家族に対してもグローバルな視点からの言動で共に成長できるような人になってほしいと期待しています。



▲参加報告会の様子(提供:うるま市)

## 資料① 塾生アンケート調査結果

塾終了後の9月に塾生149名にプログラムに関するレポート・アンケートを実施し、全塾生から回答を得た。報告書では主な設問を掲載する。



### 興味深かったプログラム（複数回答可）



### 各プログラムの評価・感想

#### (1) 事前オンラインプログラム（7月20日実施）



#### ■主な感想

- 慣れない環境で過ごす新しい仲間を見たとき、画面の中から個性が溢れていた。クラスの自己紹介の時間はそれぞれの持つ趣味、感性に触れることができ、また一人一人の人柄が見えて充実した時間だった。
- 事前にクラスの人と顔合わせや軽い挨拶が出来て、クラスメイトのことを知ったり、リーダー塾に向けてより意識するきっかけになったと思う。また、委員会での話なども出来て、当日までの疑問点や不安も多少解消されてよかったです。

#### (2) 入塾式



#### ■主な感想

- 自分が今から一人の塾生として参加するという自己認識を持つことができ、塾の雰囲気をつかめてよかったです。入塾式があったから12日間本気で臨もうという風に思えた
- 不安を抱えながら迎えた初日、全国から集まった高校生の意欲と元気に圧倒されたことを覚えています。「皆に負けていられない。自分も人に刺激を与えられるように活動しよう。」と決意しました。

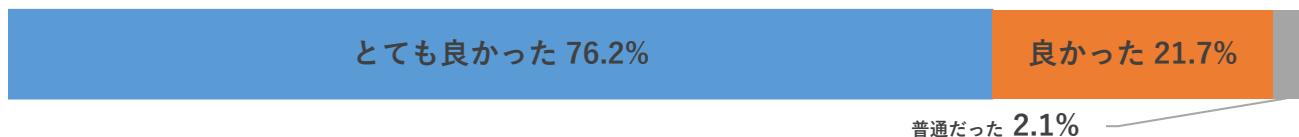
### (3) 【前半】クラス担任によるキャリア教育



#### ■主な感想

- 将来の夢だけでなく、目指す大人像を考えることも大切だということを知って、目指す大人像に近づけるように夢を設定して夢を実現させたいなと思いました。
- 学び続けることの大切さを社会人も感じているとわかりました。コミュニケーション能力は重要とも言っていたので人間関係を大事にしようと思いました。

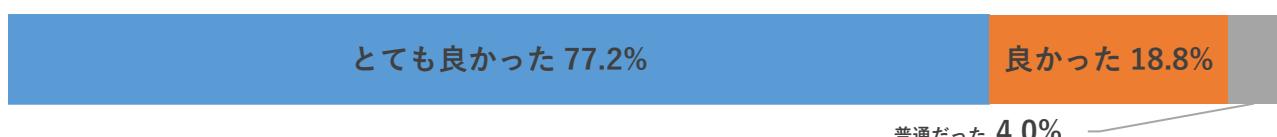
### (4) 【後半】クラス担任によるキャリア教育



#### ■主な感想

- 実際に人生のプランを書く中で本当に人生って時間が足りないな、限られているなと感じました。言語学を学んだ経緯や、商社という自分が知らない仕事を知ることができました。
- 自分が思っている、「私ってこういう人だろう」という自分に対する先入観が、他の人から私を見たときは少し違い、自分の性格を客観的に分析することができた。

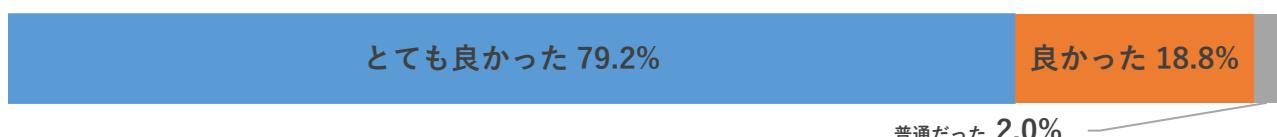
### (5) 【前半】大学生によるキャリア教育



#### ■主な感想

- 中学生や高校生すでにボランティア活動にむけて動き出していたことに驚き、尊敬の気持ちがすごく大きくなかった。結果的に、私もこんなふうになりたい！と夢や目標をつくるきっかけになったと思う。
- 高校生のうちからたくさんのことについて挑戦する姿に憧れを持ち、自分も参加したいと思え、とても良かった。また、目標の人ができるきっかけになったのでとても良かった。

### (6) 【後半】大学生によるキャリア教育



#### ■主な感想

- 主に留学についての話が聞きたくて参加したが、参加者に海外の高校生が多く飛び交う質問のレベルの高さにとにかく驚いた。
- 自分の将来像や働き方について深く考えることができた。努力や挑戦の大切さを改めて実感し、自分も目標に向かって行動しようという意欲が高まった。

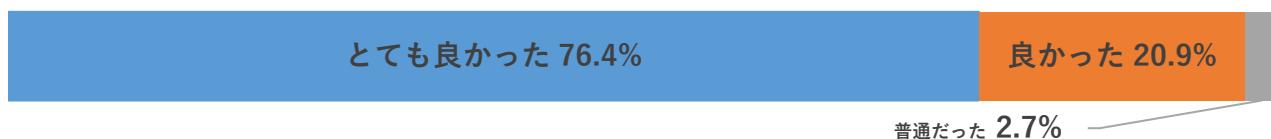
## (7) 宗像大社・新宝館見学



### ■主な感想

- 今まで教科書に載っていたり、学校の先生が言っていたことがようやく頭の中でつながった瞬間だった。こんなにも心が古い記憶と共に鳴したのは初めてでした。
- 地元にこんなに歴史と文化の深い場所があることに改めて誇りを感じた。古代の人々の信仰や海を越えた交流の豊かさが伝わってきて、宗像が日本と大陸をつなぐ重要な地だったことを実感した。

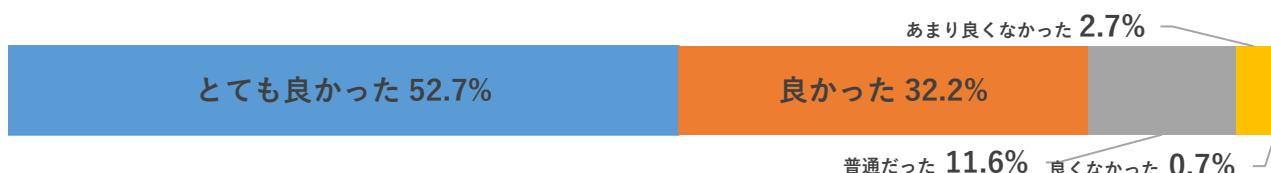
## (8) 味噌汁コンテスト



### ■主な感想

- 具材の購入から味噌汁の作成やプレゼンまで、一体となって一つの方向に向かっていくのを感じ、それぞれ役割分担をし、協力しあったことでチームワークも育った。ひと夏の思い出の特別な味がした。
- クラスで話し合ってコンセプトから材料まで決めることをして、大人数で一つのことを決める難しさを痛感した。意見の方向性が違うと根本から決まらず、自由度が高いと同時に難しさを感じた。

## (9) 映画鑑賞「ちゃわんやのはなし-四百年の旅人-」



### ■主な感想

- 今までの歴史から現代にいたるまでの当事者の視点を知り、それについて考えさせられ、伝承の趣深さに興味を持ちました。
- 人の生き方や生きる力、なぜ生きているのかまで深く感じることができる作品で、なぜあそこまで辛い思いをしても夢を追い続けられるのかということを理解することができた。本当に魅力に溢れていた。

## (10) 担任交代式



### ■主な感想

- 後悔と反省とこれから更に頑張ろうと思う気持ちが沸き上りました。やり残したことや学んだことが何度も脳内を駆け巡り、涙が止まらなかったです。担任交代式も成長するきっかけでした。
- 人生で最も出会いから別れの時間が早かったが、素敵の方に会えたからこそ涙を流して思いを伝えられて良かった。私達の成長を喜んでくださり、こんな大人になりたいという理想像ができた。

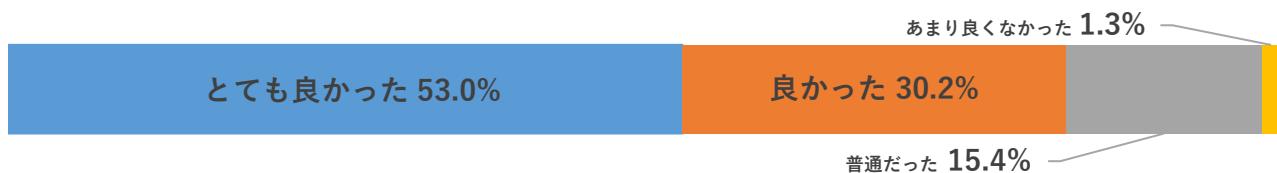
## (1 1) SAGA アリーナ見学



### ■主な感想

- 目が飛び出そうなほど衝撃を受けた。設備の充実はもちろん、ユニバーサルデザインを意識した建築がなされており、次世代に必要とされる施設だと思った。誇れる佐賀への一步を進んでいると感じた。
- SAGAアリーナは縦にも横にも高さも大きい施設でバスケの試合などで見る大きな液晶のテレビや、スポーツ以外でも使える設備の有用性などがあり、可能性を感じる施設でした。

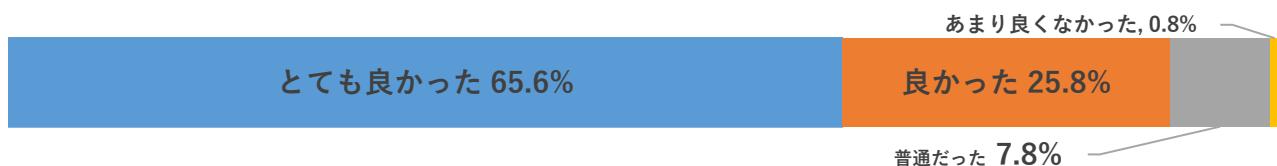
## (1 2) 名護屋城博物館見学



### ■主な感想

- 自然と歴史に触れることができた。一番印象に残っているものは大きな棘がついた船で、なぜこんな形をしているのだろう？と考えて楽しかった。異国の文化や九州の歴史を知れた。
- 沖縄にも名護という市があるので名護という言葉にすごく親近感があり、同じ名前でとても驚いた。沖縄の建物以外に他の国の建物の話を聞き、外も景色が良く歴史を感じられる場所もあった。

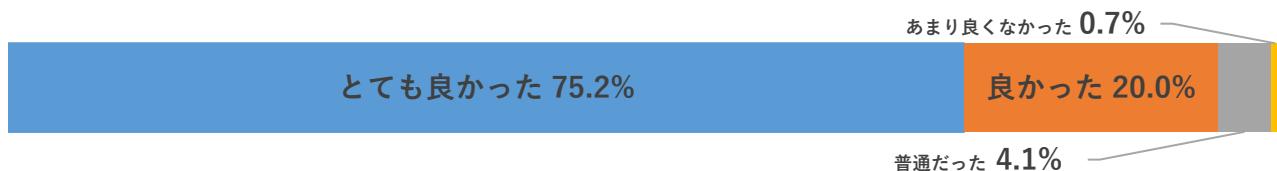
## (1 3) 九州大学在学中の卒塾生による交流プログラム



### ■主な感想

- 今の自分は九州大学に入るのに相当な努力がいると痛感した。自分の学びたいことを胸張って言えるようにもっと自分がしたいことやなりたいものを考えてみようと思った。
- プログラムが始まる前にみんなで身体を使って、じゃんけんをしたのが楽しくて、とても印象に残っています。自分も興味を持つことを大学で学んだり、それを仕事や将来生かせるよう頑張りたいです。

## (1 4) 夢ディスカッション



### ■主な感想

- 自分が本当にしたいことは何かというのは、一人で考え抜くのも一つのやり方かもしれないが、仲間と話しながらやりたいことが見えてくることもあるのだと実感した。仲間の夢は壮大で素晴らしいかった。
- 自分の夢について考えることは多くあり、道筋や大枠などは考えていたが、リーダー塾に来て夢に全力で向かっている人を見て、自分の考えの甘さを感じ、見直すことができた。

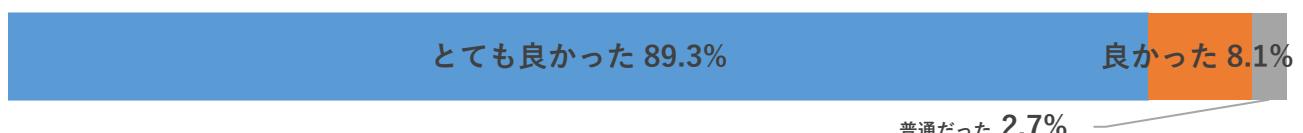
## (15) 目標宣言



### ■主な感想

- 目標宣言で、マイク1本で皆の前に立ち、着飾らぬ自分の目標をさらけだした。自分でも気づかなかつた「本当にやりたいこと」が明確になり、目標を達成したいという言葉への責任を持つことができた。
- 今まででは夢を語ったときの周りの反応が怖かったが、たくさんの人々に夢を宣言したことでの、1人ではないと実感した。大きな夢を持ち努力している人は輝いていると改めて感じた。

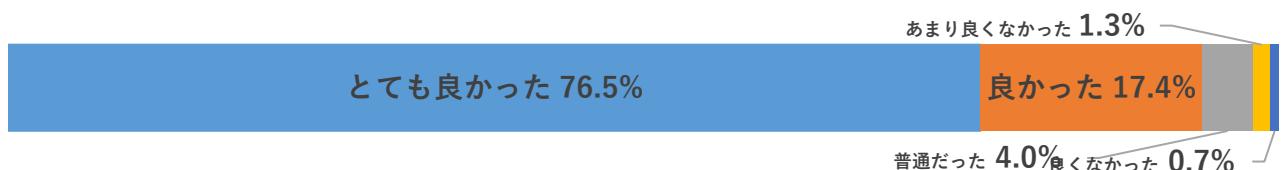
## (16) 卒塾前夜祭



### ■主な感想

- 歌や未成年の主張でみんなで笑い合うことができてとても楽しかった。腕を組んで笑い合える友達ができて嬉しかった。全国各地のみんなと集まれたのは本当に奇跡だったんだなと思った。
- クラス・学年・男女問わず一緒に盛り上がり、12日間の間作り上げてきた仲間との絆が深くあっという間に感じ、全国各地のみんなと集まれたのは本当に奇跡だったんだなと一生忘れない夏の一日となった。

## (17) 卒塾式



### ■主な感想

- もう終わってしまうのかという寂しい思いとこれからの自分の人生への期待があった。たった人生の中の12日間なのに卒塾するのが寂しくて仕方なかったのを覚えている。
- 同じプログラムを受けていたとは思えないほど様々なものを吸収していることが伝わってくる代表挨拶だった。私ももっとできることがあったのではないかと考えたが、自分のできる全力は出せたと思った。

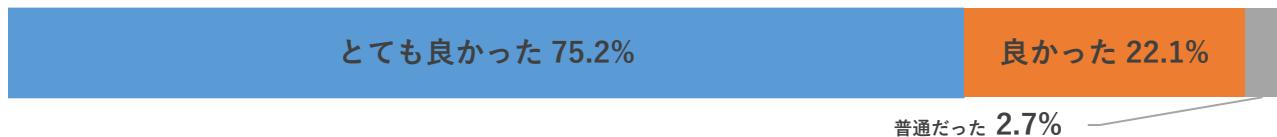
## (18) 合唱「ダーリン」



### ■主な感想

- まとまらなかったりトラブルがあったりしたもの、最後には合唱によって気持ちを最大限に伝えることができたと思う。合唱練習では、149人が一体となり、別のクラスとの交流も深めることができた。
- 肩を組んで、全員が繋がって息を重ねて、本当に一つのものとしてここまで来れたことに強い達成感を感じた。合唱のおかげで、組の枠を超えて、塾生全員が一つになれたと思う。歌の力を思い知った。

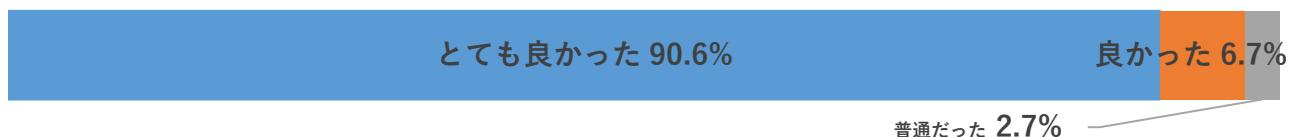
## (19) ホームルーム



### ■主な感想

- 本音を出し合って互いに向き合う時間として12日間の中で特に濃い時間だった。クラスで目標を決めたことが一体感を生み出し、仲間同士の団結力を高める大きなきっかけとなったと思う。
- 全く知らない高校から来た多くの人たちと交流できたことはとても良い経験となり、協力し合う大切さを実感できた。一生の友達もたくさんできてよかったです。

## (20) グローバル・ハイスクール・サミット



### ■主な感想

- 世界情勢について考える良い機会になった。1つの問題の裏では沢山の事情が複雑に絡み合っていることを実感した。また、ディスカッション能力だけではなく自分の意見を伝える主体性が大切だと思った。
- 考えるという行為をここまでやり抜いたのはグローバル・ハイスクール・サミットが人生で初めてだった。問題解決のためのプロセスの大部分を学ぶことができたと思う。



## リーダー塾に参加して良かったこと

仲間・友人ができた	<p>それぞれ異なるバックグラウンドを持った人たちとの関わりはあらゆる面で私の中に気づきを与えてくれました。クラスの人の中には連絡を取っている人もいて、これからもこの縁を大切にしたいと思います。何か行動を起こすときには手を借りたいと思うし、何より周りの力になりたいと思っています。また、講義の中でも本当に多くの気づきがあり、新しい知識を得ていくことで自分の視野が広がっていくのを感じることができました。</p> <p>私は、高い志を持った仲間達と関わる中で自分自身の最低限の基準が上がったように感じる。卒塾後もクラスメイトと SNS などでよく連絡を取るが、高校生でありながら、団体を立ち上げたりするなど社会に貢献している姿を目にし、自分も頑張ろうと思うことができる。ただの友人ではなく、一緒に苦難を乗り越えた戦友のような感覚もあり、全国規模でネットワークを構築することができ、とても嬉しい。</p> <p>全国から集まった仲間や友人と出会い、人脈が広がった。互いに励まし合い、刺激を受けながら学び合えた経験はかけがえのない財産となった。また、将来について真剣に考える時間を持つことで、自分が進みたい道や成し遂げたい目標がより明確になった。さらに、議論や活動を通して自分自身の成長を強く実感でき、自信を持って新たな一歩を踏み出そうという意欲につながった。</p>
世界観・価値観が広がった	<p>講師の講義から新しい視点を得て、世界の見え方が大きく変わりました。また、仲間とのディスカッションを通して、自分の考えを深めることで成長を実感し、発言に自信を持てるようになりました。さらに、将来について真剣に考えるきっかけにもなり、自分の目標や進むべき道を意識するようになったことが大きな収穫だと感じています。</p> <p>講義を通して、自分の不十分や多くの知らなかつた事を知り、物の考え方方が変わった。HR やグローバル・ハイスクール・サミットの活動を通して、同じクラスの人と考えを言い合ったり相談しあったりして、リーダー塾後も連絡を取り合うような、とても仲が良いと言える友人が多くできた。そして、休む暇もないくらいに忙しいスケジュールの中で、わりと責任のある役についたことで、自分がどのような性格なのかを知ることができた。</p> <p>私は今まで、曖昧に、ぼんやりと日常を送ってきたところがあった。目標はあっても、努力をしなかった。しかし、リーダー塾を通して、とても恥ずかしいと思ったし、やってみるだけの価値があると思った。挑戦して失敗することは恥ずかしいことなんかではなく、誇るべきなのだと教えていただいた。</p>
成長を実感したり、自分の長所や短所を知れた	<p>一番は、価値観が変わりました。今まででは完璧を求めることが多く、苦しむことが多かつたけど限られたものや時間の中でどれだけ全力をだせるかということが大切なことが知ることができました。</p> <p>前までは勇気が出なかったことも、今では全然緊張せず、人前で喋れるようになったし、1組の友達とは、今でも連絡を取り合って互いに高め合っている仲間もあります。すごく自信が持てるようになったし、仲間に負けないように、追いつこうという意思が生まれ、何事にも挑戦するようになったからです。まだまだ躊躇うこともあるけど、他の人の気持ちもしっかり考えて、自分も高めていこうと思いました。</p> <p>たくさんの知識や経験などを得たことから、自分の将来のために勉強する意欲が上がり、無意識に世界情勢が気になるようになった。それを通して、知識や人脈が武器となり、自信を持つことができるようになった。</p>
自分と向き合えたり、自信が持てるようになった	<p>今まででは人の意見に合わせてばかりで、みんながいいならいいやと流されがちだったけど、自分の意見をきちんといつて、まとめるができるようになり、自信が持てるようになりました。また、みんなの今までの経験などを聞いて、自分は全然何もできていないなと実感し、教育学部を目指しているのでなにか子供に関わる活動を今からはじめて見ようかなと思うことができました。そして、人脈がとても広がり、一生の友だちをつくることができとてもうれしいです。</p>



## 参加後、ものの考え方や興味関心が変わりましたか？



### ■主な内容

視野が広がった 社会・世界 に興味を持った	ものごとについて意識的に考える習慣が身についた。特に、表面的な理解にとどまらず、「なぜそうなるのか」を自分なりに考えるようになったことで、物事の本質を深く理解する力が養われた。今後もこの姿勢を大切にし、学びや日常生活に活かしていきたい。
	元々、自分の考え方としては特に決まっている軸がなく、手当たり次第やることをモットーにして動いていたが、リーダー塾参加を通して、色々な成功者の理念や自己像を聞くことにより、自分の軸が明確となったと感じている。また、今まで特にテクノロジー関連（AI、量子コンピュータ）に強い興味があったのだが、歴史や政治にも興味が湧き自分の知見が広がったようにも感じた。
	ニュースで世界情勢に関心を持つようになった。今まででは国外のことは正直関係ないと思っていたし、目を向けようともしていなかった。しかし、絶対に自分も知っておかないといけないことだと思うようになった。また自分は日本国内の政治のあり方や外交関係もよく知らないということを自覚し積極的にニュースや情報をみるようになった。他にも、ネットで知名度の高い人が言っている意見などが本当に正しいのかを論理的に自分の頭で考えるようになった。
	グローバル・ハイスクール・サミットで当事者意識と共に認識をもつことができ、物事を自分だけの視点だけでなく世界規模で客観的に捉えることが無意識のうちにできるようになりました。能力はもちろんですが意識的なものに大きな変化と成長を感じています。
	私は以前より、やってみたいことが多くなった。そして、そのことについて素直に考えられる、素直に人に言えるようになった。以前から企画運営の仕事が好きであったが、機会があったら取り組むだけで、自分から調べたり、行動したりすることはなかった。今は自ら進んで調べたり、常に自分にできることは何かと考えたりしている。また、社会や地域の問題についても興味を持つようになり、自分のやりたい企画運営と絡めて考えている。
	何かを考えたり発表したりするときに言葉の定義が曖昧なものをはっきりさせたくなったり、普通というものは人によって違うため、ないようなものだと思い自分のなかの普通を少し捨てることができました。また、他人の目を考えて行動してきたけれど、自分の好きな服やものをもっと大切にして、世の中の誰かが受け入れてくれるかもと考えられるようになりました。
自信がついた・周りの目 を気にしなくなつた	参加前は、リーダーは1人でなんでもこなさなければならない、私がしっかりしなければいけないとばかり思っていた。しかし、様々なレベルの高い同年代の子たちに会って考え方には変化が起こった。リーダーだからなんでも1人でこなすのではなく、リーダーだからこそ、仲間をうまく頼って、協力して事業を進めていく必要があることを実感した。
	自分を否定する人はたくさんいるものの、自分を肯定・応援する人はその何倍もいると言うことを考えさせられた。友達を作ることは苦手で、人見知りとよくは言われていたが、リーダー塾後に人と話すことの大切さ学んだため、積極的にクラスのことも話すようになった。自分の意見を伝えることの大切さを知った。
	文化祭のPR大会で全校生徒の前で発表するクラス代表に立候補し、プレゼンしました。前までは絶対そんなことはできなかっただし、(クラス40人でも緊張してたのに)英語のスピーチコンテストにも挑戦し、自信持ってプレゼンすることができるようになったからです。最終的には、学校で開催されているアカデミックデーにも参加し、そこでもリーダー塾についてプレゼンしたいと思っています。
	学校で自分の将来について自分で考えることはあっても明確な夢を持った人が多くいるわけでもなかったため、誰かと夢を語り合うこともあまりなかったが、リーダー塾に参

	加して、多彩な夢を抱いている仲間と出会い、自分の将来をみんなと思い描くことができた。自分の将来が仲間の夢や自分たちの少し先を経験している学生リーダーや担任の先生方、そして、現在日本や世界で活躍している講師の方々と出会ったことで色鮮やかな映像として浮かび上がってきた。リーダー塾で私は自分の夢を叶える覚悟が決まった。
	私は物事に全力で打ち込む人は本当に輝いていてかっこいいと感じました。ここでは学校には少ないインターの子、NPO を立ち上げて活動している人、研究に打ち込んでいる人、全国レベルのアスリートなど様々な子に会いました。彼らは自分のやりたいという気持ちに忠実で夢や目標をかなえるために自分だけのやり方で努力しています。そこで私は殻にこもっていると感じ、全力で何かに打ち込む人になりたいと思いました。
リーダー像	次世代のリーダー養成塾に参加して、私の考え方は大きく変わりました。以前は、リーダーとは特別な才能を持った人だけがなるものだと思っていたが、講義や体験を通して、リーダーに必要なのは「才能」ではなく「姿勢」と「覚悟」だと気づきました。嘘をつかず信頼を大切にすること、自分で考えて決断する力を持つこと、そして失敗を恐れず挑戦し続ける姿勢が重要だと学びました。また、自分の意見を相手にわかりやすく伝える力や、多様な考えを受け入れる姿勢の大切さにも気づき、今後は自分も一步踏み出して周りを引っ張っていける人になりたいと思いました。

## ② 参加後、やりたいことが明確になりましたか？



### ■主な内容

リーダー塾に参加する前は中学校の英語教師になりたいという夢があり、リーダー塾でリーダーとはどんなものなのかを学ぼうと思って参加しました。しかしレベルの高い人が多く、自分も英語力を伸ばし、もっと英語を使える職業に就きたいと夢が広がりました。リーダー塾に参加することで将来の夢は明確にはならなかったけど、将来やりたいことが明確になったのでいろんな経験をしていきたいと思います。

アフリカで十分な医療が行き届いていない現状に触れ、改めて世界には支援を必要とする人々が多いことを痛感した。この経験を通じて、もう一度海外青年協力隊に参加し、困っている人々の力になりたいという気持ちが再び強く湧き上がった。

海外に行きたいと元々思っていたが、それはただの旅行程度のものしか想えていなかった。リーダー塾を通してもっと知らない世界があることを知り、海外で働く人になりたいと思った。理由は、自分が全く知らない文化や価値観を知りたいいろんな人と仲良くなりたいと思ったから。テストに向けてただ勉強していてもそれは自分がこれから社会で生き残れるか、やりたいことができるかとはまた別であることを知った。

リーダー塾に参加する前は、生涯をかけて教育に携わっていきたいな、と曖昧な目標をもっていました。しかし参加してたくさんの仲間から刺激を受けたことで「目標のスケールは大きくていいんだ」と感化されました。そして目標宣言で海外の教育現場を見に行くこと、文部科学省に入って裏から日本の教育を支えるという2つの目標を定めました。リーダー塾は自分の将来を見つめ直す良い機会となりました。

私はリーダー塾を通して、夢に向かって具体的に行動している人をたくさん見た。正直、同じ高校生なのにこんなにも違うんだなと圧倒されたが、前に進んでいる人の背中を見て、刺激をもらった。そして、今まで自分が将来について考えることから逃げていたのだと自覚した。本当は心のどこかに夢があっても、すぐに自分には無理だと諦めたり、具体的に考えることを放棄したりしていた。これからは、自分の夢や目標と正面から向き合っていきたい。

「助産師として海外で働きたい！」という漠然とした目標から、「ロシナンテスに所属することで、医療を必要としている国で、母子ともに幸せを届けたい！」という明確な目標を立てることができた。川原先生の講義を受けることで、スーダンをはじめとする、人道危機に陥っている国が自立できるような支援をすることで、なるべく多くの人のお産が幸せなものになるように、そしてその後も幸せな家庭を築くができるよう、手助けできるようにしたい。

## 資料② 保護者・学校アンケート調査結果

卒塾してから約3ヶ月後、149名の22期生の保護者、学校の担任教員を対象に、卒塾後の塾生の変化についてのアンケートを実施した。保護者は102名から（68%）、学校の担任教員は80名から（53%）回答があった。主な項目を抜粋して掲載する。

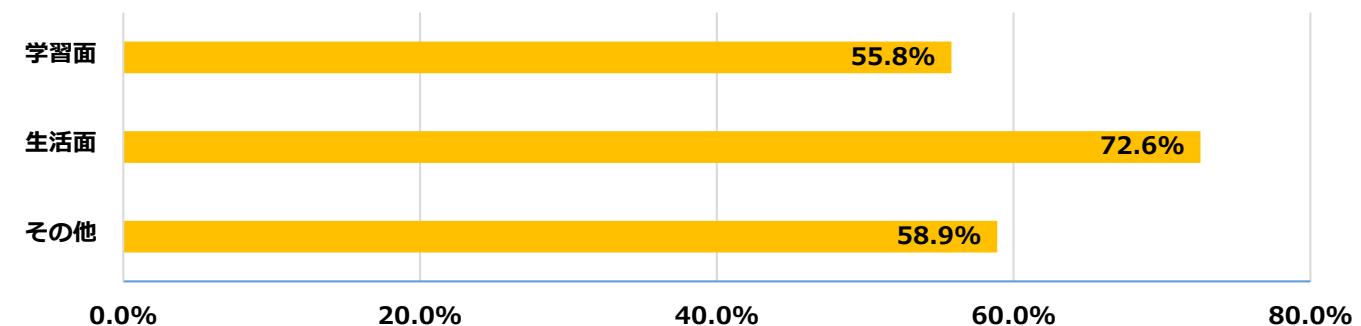


### 塾参加前と参加後でお子様の様子に変化がありましたか？



### 「変化があった」と答えた方は、どのような変化がありましたか？(複数選択可)

※各項目ごとに選択された数を「変化があった」と回答した人数で割った



学習面	今まで机にむかって勉強はしていたが、ただこなしてる感に近かった。しかし、リーダー塾での1日目で圧倒されたらしく、全国の高校生を目の当たりにして負けてられない、並んで同じものをみたいと奮起しているようだ。勉強の向き合い方が変わってきたように思える。ただどうしても日常の学校生活での思春期真っ只中の友達とのギャップに悩み、葛藤している。
	世界や国内のニュースに興味を持つようになりました。また、どんな難しい問題にも諦めずに努力する姿が見られます。
	参加前は、学校での通常の勉強やテスト対策など当たり前の学習はしていたが、参加後は、娘と会話していても娘自身の将来像や将来の夢について真剣に考えるようになりました、視野が広がった考え方をするようになったと感じた。また、国内・国際ニュースなどを始めとした様々な事柄に興味を示すようになりました、学校の学習以外にも興味を持った事柄について自ら調べたり学習するようになった。
	自分の進路について、目指す方向が決まりその為に学習をするようになった。
	海外にいると何かと背伸びをして服装や容姿に気を取られることが多かったように思いましたが、リーダー塾から帰ってからは、少し純粋さを取り戻した様な気がしました。
生活面	これまで入学してからも校内、県の英語弁論大会や部活動も2つ兼部など様々な活動をびっちりしていましたが、部活動も1本に絞り、勉強時間を確保して生活するようになりました。
	参加前は、集団行動についていけるのか心配するほど生活面にルーズなところが見受けられ、時間管理についても決められた時間を守れないことが多々あったが、参加後は自分自身の学習や生活面でのスケジュール管理をして時間厳守の態度が身についたように感じている。
	このような経験ができるることに対して、言葉で感謝を伝えてくれるようになりました。高校生としては当然かもしれません、基本的に自分の行動については自分で考え行動するようになりました。
	生徒会長として学校生活でリーダーシップをとるために何をすべきか、さまざまな視点から物事を考えることができるようになった。

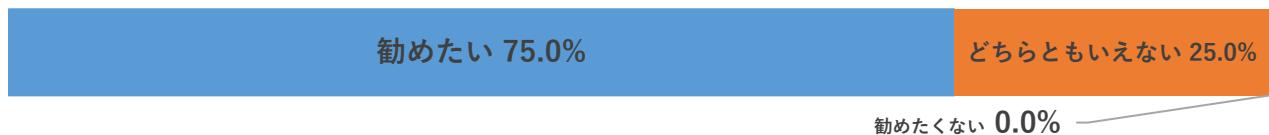
	<p>親や友人、先生とのコミュニケーションの場で、個人の意見ではなく総合的に対象者を捉えた上で、個々への態度や声かけができるようになった。また、色々なイベントを見つけ参加したり、冬休みの短期留学へ参加できるよう動いたりし積極性が見られた。</p> <p>日頃何かしら忘れる事が多いため、帰ってきてそれを悔しがるようになった事はびっくりした（最近は薄れてきているが）。手伝いをする事に少し積極性を感じる。何でも簡潔な言葉でしか話さず、説明を面倒くさがっていたが、会話を楽しむことや人に興味を持つと言ふ事が出てきたように思える。</p>
その他	<p>兎にも角にも充実感に満ち溢れていて一皮も二皮も剥けた様に思いました。本当にこのプログラムに参加することができて感謝しています。</p> <p>今まで一人で頑張る場面が多かったのですが、仲間とやり遂げたことと達成感を共有できたことで初めて涙が溢れたそうです。どこか人に対して冷めていた所に変化がありました。</p> <p>参加後、ボランティア団体に応募し、面接を受け加入したのが3つから4つ。地域のボランティアにも週末色々と参加している。リーダー塾のようなプロジェクトにも、志望動機を送り4つ参加している。合宿の時、合唱したのが楽しかったらしく、「NHK18祭」に応募し合格したので今年参加する。</p>

### ■お子様の感想で印象に残ったこと

<p>帰宅後第一声が、「留学してみたい」でした。自分の生きている世界は小さくて、もっと広く世界を見てみたいと話していました。また、物事には裏表が必ずあり、メディアに取り上げられている事ばかりではなく、自分の目や耳でしっかり事由を見極め、問題を考えていきたいと話している姿が印象的でした。全国から集まった仲間と出会い、一緒に学べたことがとても良い経験だったようで、地域や年齢関係なくたくさんの仲間の話を嬉しそうに話す姿を見られたことが嬉しかったです。</p> <p>帰宅初日に娘と会話した時に、娘がリーダー塾で大変感化されており、会話の中から多様で様々な考え方をもつ仲間と出会えて、かけがえのない一生交流ができそうな人間関係が構築されたような印象がある。普段の生活や学校生活では得られないような刺激や学びを経験したことで、自己成長につながったと感じた。今後、自分の夢に向かって更なる向上心を持ってもらい、リーダーシップ精神など自己研鑽を継続してもらいたいと思いました。</p> <p>涙を流すことの少ない子ですが、発表で悩んだ時、最終日の別れの時、たくさん感動の涙を流したと聞いてビックリしました。帰宅後、Tシャツに書かれたメッセージを見て、かけがえのない時をすごしたんだなあと私も実感しました。</p> <p>「今まで留学や色々な研修に参加してきたけれど、今回のリーダー塾が一番役に立つと感じた。」と言ったこと。自分の学ぶ方向性も明確になり、希望の大学や学部の変更も考えはじめ、将来について真剣に考えるようになったと感じます。</p> <p>今までで1番充実した日々だった。すごい子ばかりで驚いた。他の子の話を聞いて、自分も何かやりたくなった。海外にどうしても留学したくなった。</p> <p>『これからも毎日がリーダー塾で良い。そして世界を変えたい』現代っ子の我が子はこんなハードな団体行動はすぐに音をあげるのかな？と送り出す時不安が少しありましたが、子どもはつくづく“スポンジ”だなあと。周りにいる人や与えられる環境により視野が広がり、素直に何でも吸収するので、若い時に様々な人と出逢える事は重要で貴重さを感じた。</p>
---



## 他の保護者または高校生に参加を勧めたいと思いますか？



### ■主な理由

志の高い高校生がお互い議論して創り上げる過程やそこでの学びによって心が震える様な経験をすることができたからです。

コミュニケーション力、チームビルディングなど全国レベルで交流できる事や普段の講演では聴けない国際関係、紛争等貴重な話が聞けたことです。また人脈作り、仲間が増えるので是非勧めたいです。

各界のトップランナーに直接会え、全国各地から集まった高校生と知り合い語り合う無二の機会が提供されるから。

今まで狭い世界の中で生きていた子が、リーダー塾に参加し日本全国の優秀で多種多様な多くの仲間たちと出会い、刺激を受け、自身の世界を広げ、大きく成長して帰ってきました。このような機会に触れるることは高校時代において一生の財産となると思うので、ぜひおすすめしたいです。

高校生という短い期間の中、普段の生活や学校ではなかなか体験できない濃厚な日々をすごし、自分を見つめ直し、仲間と絆をつくることができる。普段はついスマホと向き合う方が長いような、この年代でこそリーダー塾での経験がとても良いと思った

娘がこんなに威力的に行動し、知識を高めようと自ら努力している姿を見て参加させて良かったと思った。トラブルがあっても気にせず前向きに考え、精神的にも言動も大人になって帰って来た。

今の子供は SNS の普及により、限られた興味のあるものの情報しか入りにくくなっていることに危機感を覚える。人との関わりも浅く広く細部に気を使う。だから関係性でも自信が無い。そんな子達に本音でぶつかり合い認め合う、人の話をきちんと聞きわかりあうまで話し合うという機会を与えることはとても重要だと思う。

娘は人前で話したり積極的に行動するタイプではないので、全国から集まる優秀な高校生とやっていけるのか心配でしたが、とても楽しい学びとなった様子です。他では出来ない濃密な経験となりました。本人にも難しいプログラムをやり遂げた自信となり、全国にできた友達と今後も切磋琢磨していくのではないかと楽しみです。

普段の学校生活では、知りえない仲間に出会え、これから進路を決める高校生にとってやりたい事にできるチャンスだと思います。

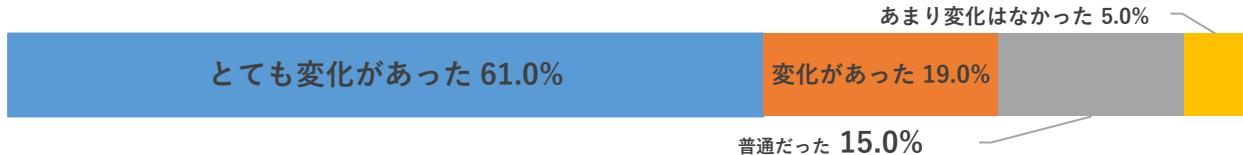
一流の講師の方の講義を聴き、今まで興味がなかった分野にも興味を持つようになった。何より考え方がすごくポジティブになり何事も一生懸命努力する姿が見られるようになった。

全国、世界に仲間（スタッフの皆さん含め）ができた。意志を持ち、高いレベルで活動をしている仲間に、終了後も大きな刺激をもらっている。また、どう行動したらよいかわからずにいた中、視野が大きく広がった。行動力も確実についたと感じているからです。

プログラム自体は、とても良いが、経済的な面を考えると、誰にでも誘えるわけではない。

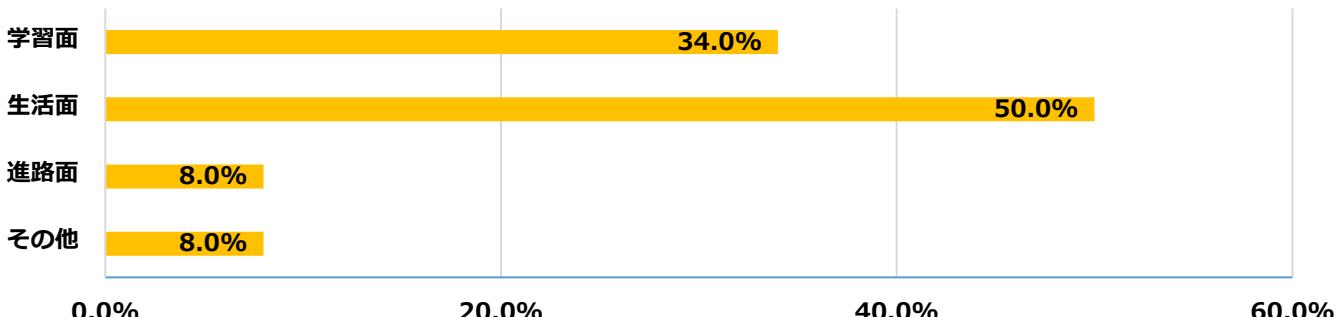
## 学校の担任教員へのアンケート

### ？ 塾参加前と参加後で生徒の様子に変化がありましたか？



### ？ 「変化があった」と答えた方は、どのような変化がありましたか？(複数選択可)

※各項目ごとに選択された数を「変化があった」と回答した人数で割った



学習面	目標が明確化し、志望校決定。意欲的に学習に取り組むようになった。
	元々学習面で優秀な生徒でしたが、刺激を受けてさらに熱心に取り組んでいます。
	英語やプレゼン能力の向上
	各地から集まった生徒たちに刺激を受け、学習に対する貪欲さが向上したように見られます。
	分からないことはそのままにせず、友人に質問する、教科担当の先生に質問に行くなどして、理解に努めるようになった。
生活面	学校行事、課題研究に対してさらに積極的に取り組むようになった。
	もともと近隣の進学校へ行かず、体験的な学習や特色ある学びを求めて、遠く離れた芸北分校へ入学し寮生活をした生徒であるが、見知らぬ地で高いレベルの講話や議論を経験したことでの、もっとチャレンジしたいという気持ちが強くなり、より積極的に外での活動に参加するようになつた。冬はトビタテ留学 JAPAN でルーマニアに留学する予定の生徒であるので、どのように今回の経験を活かすことができるのか楽しみです。
	クラス内で決め事をする際に積極的に音頭を取るなど円滑に進めるよう努めていた。
	元からリーダーシップを発揮できる生徒でしたが、より物事を考えながら全員の前で話したりすることができるようになったように感じる。
	以前は引っ込み思案なところもあり、参加もためらっていた。夏休みが明けてからは表情も朗らかになり、自主性をもって学校行事へ参加する様子が印象的である。
	しっかりと落ち着いて、周囲も含めて物事を考えて行動するようになった。
	生徒会長として、人前で話す際も堂々と話せるようになった。
その他	「これくらいでいいか」と現状に満足している感じだったのが、「上には上がいるので、現状に満足しているだけではいけない」という気持ちの変化があったように感じた。実際に第一志望大学を上位の大学に決めて頑張っている。
	本校では平和活動を推進している中、本人は最初あまり興味を示さなかった。本人としてはもっと違う視点でいろいろなことをしたいと考えていたが、今回の経験で、何事にも平和に関するることはつながっていくのだと理解していた。

## ■生徒の感想で印象に残ったこと

はじめは周りとのギャップを感じることもあったが、意識して自分から考えて行動するようになったと言っていたことが印象的でした。

忙しい毎日だったけれども、周囲から刺激を受けることができ充実した内容だったときいています。文化祭では、本校から一緒に参加させていただいた生徒たちとともに、全校生徒の前で活動報告をしてもらいました。

講師による講演の内容が充実していること、意識の高い友人ができたことを話していました。全校の前で 10 分程度プレゼンテーションをしてもらいました。

集まったメンバーへの敬意や、みんなで一つのものを作り上げていく楽しさや大変さなどを目をキラキラさせながら話していました。

同年代の生徒と活動している中で、リーダー塾の日程だけで活動を終わらせてしまうのはもったいないと、学生団体を立ち上げようとしている、ということ。



## 他の先生または高校生に参加を勧めたいと思いますか？

勧めたい 75.0%

どちらともいえない 25.0%

勧めたくない 0.0%

## ■主な理由

生徒の変化が著しかった。他校のしかも全国の同級生がこんなにも色々な考えを持っているのかということがよくわかったと思う。今回のことが契機となり、私見を深めていってほしい。

間違いなく得るものは大きいと感じますが、手放しに全生徒に勧められるかというと…と思います。他の教員には勧めたいです。

多感な高校生時代にこのような経験をさせていただくことは大変貴重なことだと思います。

学校では得られない変化を得られると思います。また大変な課題を期限までに仕上げていく大変さや、コミュニケーション能力など、日常とは違うところで体験することで、より成長できる機会であると思ったからです。

普段岩手県の沿岸地域で生活しておるため、今回のような経験が生徒の価値観を大きく変えたり、周囲の友人とは全く異なる質の生徒と触れ合う数少ない機会だと思うため。

これまで何人もお世話になっているが、多くの生徒が新鮮な刺激を受けて帰ってきており、生徒にやっては、その場で築いた人間関係が社会人になってからも続いている者もいる。充実したプログラムだったと話す者がほとんどなので、今後も継続的に応募を促していくたいと考えている。

これまでのべ 3 人の生徒が参加し、刺激を受けて帰ってきた。学校の外に出て、多くの仲間や大人とふれることが何よりの経験と考えているから。

12 日間と長い期間であるが、意識の高い全国からの生徒と過ごし、また、世界で活躍されている講師の方からの話を聞き、自身の考え方があらっと変わる契機になるとを考えるから。さらに、その経験を学校に還元できると考えるから。

### 資料③ 塾生概要

**塾生総数 149名**  
**22都道府県+4か国（アメリカ、エチオピア、フランス、ベトナム）**

#### ○参画自治体推薦枠 110名

	都道府県	人数
1	北海道	6 名
2	青森県	7 名
3	岩手県	7 名
4	静岡県	15 名
5	岐阜県	6 名
6	和歌山県	14 名
7	福岡県	35 名
8	佐賀県	16 名
9	宗像市	2 名
10	うるま市	2 名
計		110 名

#### ○一般公募枠 39名

	都道府県	人数
1	山形県	1 名
2	千葉県	1 名
3	東京都	5 名
4	神奈川県	4 名
5	石川県	1 名
6	静岡県	1 名
7	愛知県	1 名
8	大阪府	1 名
9	兵庫県	2 名
10	愛媛県	4 名
11	広島県	1 名
12	福岡県	7 名
13	大分県	1 名
14	長崎県	1 名
15	熊本県	1 名
16	沖縄県	2 名
17	海外	5 名
計		39 名

## 資料④ 塾生高校一覧

22 都道府県+4 か国（アメリカ、エチオピア、フランス、ベトナム） 97 校

学校所在地	学校名	学校所在地	学校名
北海道	札幌市立札幌開成中等教育学校	和歌山県	私立開智高等学校
	北海道立夕張高等学校		私立近畿大学附属和歌山高等学校
	私立函館ラ・サール高等学校		私立智辯学園和歌山高等学校
	私立北星学園女子中学高等学校		広島県 広島県立加計高等学校 芸北分校
青森県	青森県立青森高等学校	愛媛県	愛媛県立西条高等学校
	青森県立三木本高等学校		愛媛県立南宇高等学校
	青森県立八戸北高等学校		私立愛光高等学校
	私立青森明の星高等学校		福岡県立ありあけ新世高等学校
	私立八戸聖ウルスラ学院高等学校		福岡県立香椎高等学校
岩手県	岩手県立大船渡高等学校	福岡県	福岡県立春日高等学校
	岩手県立釜石高等学校		福岡県立輝翔館中等教育学校
	岩手県立葛巻高等学校		福岡県立小倉高等学校
	岩手県立福岡高等学校		福岡県立小倉工業高等学校
	私立盛岡白百合学園高等学校		福岡県立早良高等学校
山形県	山形県立寒河江高等学校		福岡県立城南高等学校
千葉県	私立市川高等学校		福岡県立筑紫丘高等学校
東京都	東京都立富士高等学校		福岡県立伝習館高等学校
	私立成城学園高等学校		福岡県立宗像高等学校
	私立東京女学館高等学校		福岡県立八幡高等学校
	私立日本大学第二高等学校		福岡県立山門高等学校
	アメリカンスクールインジャパン		福岡県立八女高等学校
神奈川県	私立聖光学院高等学校		私立上智福岡高等学校
	私立洗足学園中学高等学校		私立筑紫女学園高等学校
	私立平塚学園高等学校		私立筑陽学園高等学校
	私立横浜隼人高等学校		私立福岡工業大学附属城東高等学校
石川県	私立星稜高等学校		私立福岡女子商業高等学校
岐阜県	岐阜県立加納高等学校		私立福岡大学附属大濠高等学校
	岐阜県立関高等学校		私立明治学園高等学校
	私立鷺谷高等学校		佐賀県立伊万里高等学校
	私立済美高等学校		佐賀県立鹿島高等学校
静岡県	静岡県立科学技術高等学校	佐賀県	佐賀県立唐津東高等学校
	静岡県立清水東高等学校		佐賀県立神埼高等学校
	静岡県立沼津東高等学校		佐賀県立武雄高等学校
	私立加藤学園暁秀高等学校		佐賀県立三養基高等学校
	私立静岡英和女学院高等学校		私立弘学館高等学校
	私立静岡学園高等学校		私立早稻田佐賀高等学校
	私立静岡県富士見高等学校	長崎県	長崎県立長崎東高等学校
	私立静岡サレジオ高等学校		熊本県 熊本県立八代高等学校
	私立静岡聖光学院高等学校		大分県 大分県立大分鶴崎高等学校
	私立知徳高等学校	沖縄県	沖縄県立石川高等学校
	私立桐陽高等学校		沖縄県立開邦高等学校
	私立常葉大学附属菊川高等学校		沖縄県立具志川商業高等学校
	私立浜松日体高等学校		Okinawa Christian School International
愛知県	私立海陽中等教育学校	海外	International Community School of Addis Ababa
大阪府	私立四天王寺高等学校		LYCEE GAMBETTA-CARROT
兵庫県	私立近畿大学附属豊岡高等学校		St. Croix Lutheran Academy
	私立三田学園高等学校		the Williston Northampton school
和歌山県	和歌山県立新宮高等学校		United Nations International School of Hanoi
	和歌山県立日高高等学校		

## 資料⑤ クラス担任・学生リーダー及びスタッフ名簿

クラス担任	原口 敦光	1組前半クラス担任 / 株式会社ふくや
	山元 崇央	1組後半クラス担任 / 株式会社ミズ
	菅野 雄太	2組前半クラス担任 / 株式会社 BS 朝日
	島崎 奏南	2組後半クラス担任 / 長瀬産業株式会社
	原田 朋美	3組前半クラス担任 / 九州電力株式会社
	濱崎 享	3組後半クラス担任 / 株式会社戦国
	山口 健太	4組前半クラス担任 / サッポロビール株式会社
	酒井 希歩	4組後半クラス担任 / 学校法人麻生塾
	右田 良隆	5組前半クラス担任 / エコー電子工業株式会社
	重光 咲希	5組後半クラス担任 / ヒューマンリンク株式会社
	白木 大河	6組前半クラス担任 / 株式会社正興電機製作所
	小田中 美穂	6組後半クラス担任 / happy homing
学生リーダー	村松 由梨	学生リーダー(総括) / 慶應義塾大学 経済学部(非卒塾生)
	後藤 雅尚	1組学生リーダー(クラス) / Denison University Politics and Public Affairs (18期)
	古松 彩華	1組学生リーダー(全体統括) / 同志社大学 文化情報学部(18期)
	栗田 瑞希	2組学生リーダー(クラス) / 大阪公立大学 現代システム科学域教育福祉学類 (16期)
	井上 颯人	2組学生リーダー(全体統括) / Aberystwyth University Business and Management(19期)
	池田 佳隆	3組学生リーダー(クラス) / 立命館アジア太平洋大学 アジア太平洋学部(15期)
	堺田 千晶	3組学生リーダー(全体統括) / 日本女子大学 人間社会学部(非卒塾生)
	郭 聖陽	4組学生リーダー(クラス) / University of Manchester Computer Science(19期)
	井戸本 和花	4組学生リーダー(全体統括) / 明治大学 理工学部(非卒塾生)
	鈴木 あい	5組学生リーダー(クラス) / Orange Coast College Hospitality(18期)
	小澤 美文	5組学生リーダー(全体統括) / 横浜市立大学 国際商学部(非卒塾生)
	上田 礼芽	6組学生リーダー(クラス) / 東洋大学 国際学部(16期)
	湯川 智生	6組学生リーダー(全体統括) / 京都大学 経済学部(16期)
参画自治体	大森 美香	北海道 環境生活部くらし安全局地域安全課青少年係長
	奈良 文生	青森県 交通・地域社会部地域交通・連携課人づくりグループ主幹
	土佐 卓	岩手県 教育委員会事務局教育企画室指導主事
	木村 晴信	静岡県 企画部総合教育課主査
	河合 宏昭	岐阜県 子ども・女性部子ども・女性政策課青少年係主任
	坂本 修一	和歌山県 教育庁教育総務局教育政策課政策管理班政策推進員
	野中 恵子	福岡県 人づくり・県民生活部私学振興・青少年育成局青少年育成課長
	西川 幸子	福岡県 人づくり・県民生活部私学振興・青少年育成局青少年育成課企画監
	松村 遼	福岡県 人づくり・県民生活部 私学振興・青少年育成局青少年育成課育成第二係長
	水上 優希	福岡県 人づくり・県民生活部私学振興・青少年育成局青少年育成課主事
	永田 辰浩	佐賀県 地域交流部さが創生推進課長
	中村 博二	宗像市 教育部長
	南 宏和	宗像市 教育部教育総務課地域教育連携室長
	占部 真珠アイリーン	宗像市教育部教育総務課地域教育連携室グローバル人材育成係長
	島田 撤成	宗像市教育部教育総務課地域教育連携室グローバル人材育成係 主査

	平川 留美	うるま市 教育委員会社会教育部教育政策課課長
	長田 朝成	うるま市 教育委員会社会教育部教育政策係長
	高江洲 恵	うるま市 教育委員会社会教育部教育政策係主任主事
	百崎 順二	株式会社グローバルアリーナ代表取締役社長
	宗政 茜	株式会社グローバルアリーナ
	ゲトフ ステファン	株式会社グローバルアリーナ
	鬼束 五郎	株式会社グローバルアリーナ
	森田 智	株式会社グローバルアリーナ
	松田 真也	株式会社グローバルアリーナ
事務局	加藤 晓子	日本の次世代リーダー養成塾専務理事・事務局長
	齊藤 美恵子	日本の次世代リーダー養成塾職員
	大家 美希	日本の次世代リーダー養成塾アドバイザー/旅行業務添乗員
	船山 貢	日本の次世代リーダー養成塾職員
	濱田 鳩太	日本の次世代リーダー養成塾職員
	前 冬磨	日本の次世代リーダー養成塾サポート
	西守 梓	日本の次世代リーダー養成塾サポート
看護師	右山 綾子	看護師
	神田 由美	看護師（前半）
	藤谷 拓也	看護師（後半）
アドバイザー	市川 智也	NPO 法人九州・アジア経営塾事務局長補佐
	稻葉 太郎	九州電力株式会社テクニカルソリューション統括本部副部長兼計画管理グループ長
	上野 志保	春日市総務部総務課長、(併任)選挙管理委員会事務局長
	内山 朋臣	九州電力株式会社コーポレート戦略部門部長（グループ経営管理）
	神山 勝司	九州電力株式会社執行役員エネルギーサービス事業統括本部企画・需給本部長
	永松 資紹	Seibu Giken Thailand Co.,Ltd. Managing Director
	濱崎 享	株式会社戦国執行役員事業推進部長
	右田 良隆	エコー電子工業株式会社 DX ソリューション部部長
	溝上 泰興	株式会社ミズ代表取締役
	吉村 拓二	株式会社ふくや支援部執行役員部長

## ご協賛・ご助成・ご協力いただいた皆様

今回の日本の次世代リーダー養成塾は、次に掲げる皆様のご協賛とご協力により開催することができました。ここに、深く感謝申し上げます。(敬称略、五十音順)

### ■ご協賛いただいた皆様

株式会社麻生  
学校法人麻生塾 麻生専門学校グループ  
株式会社インスピア・インベストメント  
株式会社 NKB  
公益財団法人 オリックス宮内財団  
九州電力株式会社  
九州旅客鉄道株式会社  
株式会社 QTnet  
株式会社クラフティア  
株式会社翔薬  
西部ガスホールディングス株式会社  
株式会社正興電機製作所  
ゼロマチクリニック天神  
株式会社全教研  
第一交通産業株式会社  
滝久雄ビジネス研究所  
株式会社テノ. ホールディングス  
株式会社戸上電機製作所  
株式会社トクスイコーポレーション  
長瀬産業株式会社  
株式会社西日本シティ銀行  
西日本鉄道株式会社  
株式会社日本政策投資銀行  
日本生命保険相互会社  
美巣（エムスタイルジャパン株式会社）  
株式会社福岡銀行  
株式会社福住  
フンドーキン醤油株式会社  
株式会社ミズ  
三井松島ホールディングス株式会社  
三菱商事株式会社  
株式会社安川電機  
株式会社ロジテム九州  
株式会社ロボカル

### ■ご助成いただいた皆様

公益財団法人福岡県市町村振興協会  
  
■ご協力いただいた皆様  
IN・COM株式会社  
株式会社グローバルアリーナ  
九州大学  
公益財団法人 AFS 日本協会  
SAGA アリーナ  
佐賀県波戸岬少年自然の家  
佐賀県立名護屋城博物館  
JR 九州バス株式会社  
株式会社スモモ  
第一交通産業株式会社  
一般財団法人 長崎原爆被災者協議会  
株式会社ふくや  
ホテル日航福岡  
株式会社ミズ  
水野旅館  
道の駅むなかた  
宗像大社



Japan Future Leaders School

# 日本の次世代リーダー養成塾

〒107-0062 東京都港区南青山 5-12-28 メゾン南青山 403 号  
tel 03-5466-0804 fax 03-5466-0842 mail info@leaderjuku.jp  
<https://leaderjuku.jp/>

